

2



0000676-000

302.22-G35s

支那縦横観

銀間絮子・著

東洋書籍出版協会

1931

AAB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権  
第67条の規定に基づき、平成12年3月2  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

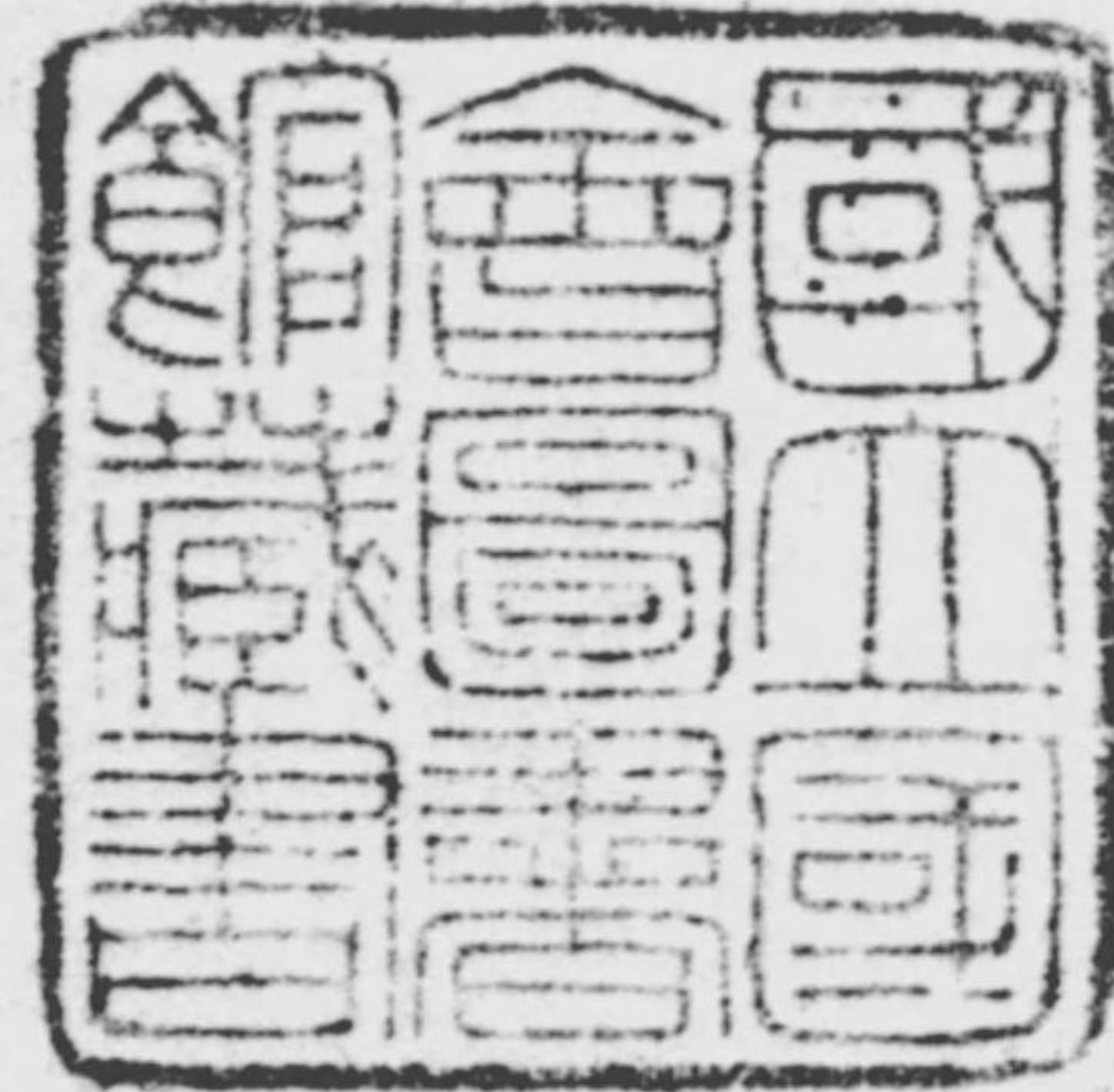
東京都千代田区丸の内二丁目十二番館六号四二室  
芳澤中國記念事業財團  
電話(28)四一〇八番

銀闌絮子著

支那縱橫觀

東京・東洋書籍出版協會發行

302.22  
G35s



512834

## 序

支那で最高學府と云へば今でも北京大學に第一指を屈すべきであるが、其處の教壇で半白の老教授が、講義のあひの手に床に唾を吐き、手鼻を醒さんだからとて些も怪しむに足らない。なまじ手巾に包んでポケットにでも藏かくひ込まれると其の不自然さに見てゐる方が氣がよりである。

座敷の眞中に洗面器を持込んで、さて臉かほを洗ふとせよ、水を盆外に滾あさぬ爲めには水を掬ひ上げた掌の上に臉だけを揺かすことが最も合理的であるであらう。

所謂先輩支那通から吾々は多くの教を得てゐる。曰く手鼻をかむ、不潔である。臉だけ動かし乍ら洗面する、奇怪である。……である……である等々。

支那に就いて「ある」ことの報告は少くないが、何故に然るかについては猶ほ多く教を受けることが出来なかつたやうだ。

日本の支那觀に大體二の型があると観ることが出来ると思ふ。漢文支那と支那語支那だ。文はクラシックに膠着して形式に墮し易く、語は眼前に目まぐるしく顯滅するパノラマを逐ひ事實の源流を究はむるに遅がない。一は書齋先生の頭の裏に考へられ、一は蒼蠅の如うに

街頭の餌を漁るべく焦慮する。支那では古來概して語と文とは二個の併行的存在であつたが爲めに、相互の聯繫が稀薄であるから、原因と結果、過去と現在との歴史的因果關係を看すして一方に偏據すると、其の真相を理解することが困難となり、報告が愈々密にして謎は愈々深めらるゝかに見える。

歴史の長久と地域の廣大と、支那の理解は併し其の一斑を窺ふさへ全く容易ならぬ業ではある。

茲に「縱横觀」としたのは輯録されたものが研究隨筆旅行記等、換言せば雜觀多面觀であると云ふ意味の外に、縱觀と横觀、主として歴史觀によつて現代支那の理解を些しでも容易ならしめんとの一の試をも企圖したつもりである。

昨年八月北平から歸國して正に一年になる。留燕二年有半の見聞を基礎に、隨時「我觀」「日華學報」等に寄せた所作を一應結束して、一には先輩諸公に對する報告の義務を果し、一には思出多い留平二年半を自ら記念せんとするのである。

銀剛梨子識於范茫草堂

昭和六年九月九日  
民國二十年

## 支那縱横觀目次

一、大陸展望……………	一
峨眉    長江水源    水災    天災と人禍    萬里長城    「一片散砂」	
腐つた銅    長江氾濫    秦始皇と孫逸仙    支那とは何ぞや	
二、支那の稱呼について……………	一五
中華民國……………	一七
日本政府の取定め    中華民國遺民章炳麟    支那内學院	
チヨン黨と辯髮    國號と通稱	
中……………	二三
中國の意味    抽象的道德的意義    中國の具體的地域	
「中國」の自家撞着    中國と非中國    「中華民國」——中	
國——「國民」	
支……………	三四
「支那」の源流    自稱と他稱    「支那」は卑稱ではない	
「先生」「大將」    「中國人」と倭奴    支那内學院の「支那」	
美稱論	
三、天下と國家……………	四一
天下——封建境域    國家——國際境域    中華民國と天下    縱横家	

——說客——食客 辯舌外交 尋常六年生の大臣 戦争と宣傳  
中華と野蠻 「以逸待勞」 「遠交近攻」 「世界大同」

四、現代支那の封建的諸相……………五三

「大公報」の社説——莫名其妙 莫名其苦 地理的環境と歴史的傳統  
——特性 支那の交通通信 社會的聯繫の缺如 三民主義革命  
漢楚と蔣馮 魚朝恩と揚子雲

五、女男平等……………六七

女子の男裝 漢口市長の細君 西北軍の女子軍 女學校の軍訓  
政界の女流 最初の女縣知事 男女平等主義の新民法 法文と實際  
男女共學 密司の優越 職業婦人 「女招待」 國民會議代表選  
舉に對する婦女團體の請願 北平女師大學生の宣言 「女子と小人」  
司馬相如と卓文君の戀愛結婚 蓄妾制 則天武后 山陰公主

六、同文同種吟味……………八九

「日支親善」 同種の問題……………九一  
同 文 文章——言語——文學——文化 パン饅頭うどん 言行二途……………九二  
仁 沈氏の新解……………一〇〇  
大義滅親 王莽 則天武后……………一〇二  
忠 逢丑父 荀息 解揚 魯仲連……………一〇五

七、河南に於ける馮玉祥……………一一一

屈原と肉彈	楚と日本……………	一一四
結	現在の巨頭 形式と實踐 不同文化……………	一一六
緒……………		一一三
1	朝氣と暮氣 黨政一途 馮玉祥と閻錫山……………	一二四
2	服裝の劃一 農村組織訓練所 國産品提唱……………	一二六
3	偶像孫中山實權者馮總司令……………	一二九
4	政治の一斑 獨裁專制 政綱……………	一三一
5	ポスターと標語 「河南」の強調 馮の願望 排日の強調 「革新體聯」……………	一三四
6	軍隊訓練と救恤 勸勵會 「老百姓」の軍隊 「我們是爲取消不平等條約誓死拚命」 陣亡將士の救恤 烈士女子學校……………	一四〇
7	社會政策施設 平民講演所 革命紀念館 農民招待所等……………	一四四
8	民衆教育 平民教育處 開封婦女求知學校 圖書館……………	一四八
9	百 蘇門山 植林……………	一五二
10	袁世凱の墓 明孝陵と中山陵 袁墓寢宅……………	一五四
11	開封の風物 馮の人爲 其の幕僚 北伐革命と北方支那人 蔣介石と馮玉祥……………	一五七
12	結	

八、革命支那の三民主義教育……………

1	緒……………	一六三
2	所謂黨化教育……………	一六五
3	第一回全國教育會議……………	一七〇
4	教育宗旨の確立……………	一七三
5	中華民國教育宗旨説明書……………	一七四
6	三民主義教育行政……………	一七八
	訓練主任及黨義教師    各級學校黨義教師檢定條例    各級學校黨義教師 檢定委員會組織通則    各級學校黨義追加課程臨時通則    三民主義教課 書審查規定    總理紀念週	
7	三民主義教課書……………	一九三
	小學校初級用第一卷——第八卷(商務印書館)……………	一九五
	小學校高級用第一卷——第四卷(同前)……………	二一九
	其他の教科書    日本に關する部分    教科書の改訂……………	二三九
8	結……………	二三三

(目次終)

一、大陸展望

娥眉 長江水源 水災 天災と人禍  
萬里長城 「一片散砂」 腐つた鯛  
長江氾濫 秦始皇と孫逸仙 支那とは何ぞや

◇  
展望は登高に如くはない。

三蘇の生地、蜀は眉州に近く娥眉の山頂を極めた者は、遙か西藏高原の彼方に、世界の屋根パミールの廂が、北緯二十八度の盛夏炎熱の下にも、白衣を脱がず、棚引く雲霧の如き淡い光の彷彿するを認むるであらう。光の淡きは、距離の遠きが爲であり、白雪に蔽はれたるは、山の高きが故である。

娥眉は海拔一萬幾百尺と云はれるが、夏日は山頂猶ほ耕種するに比すれば、彼の雪山が如何に高きかは、略々推知するに足るであらう。

名は實の賓と云ふが、誰人も雪なき雪山を見る事は出来ぬ。地球から仰ぐ月亮の如うに、峨眉から遠望する雪山の、夢のやうな淡い姿は、永劫の神祕を抱いて塵寰に超出する。泰山や、廬山とは質を異にしたミステックな展望である。

◇  
雪國の奥地では、三四月の交、南が吹き出すと、雪が融けて河川が氾濫する。雪どけの水と



云つて年により増度に差異はあるが、季節的に必ずやつて来るのと同じ理屈で、盛夏の炎熱に炙られて、世界の屋根の千古の氷雪が融け出すと、其の廂の下に水源網を張つてゐる揚子江が増水するのは、必然の勢である。勿論雪山の故のみではない、長江は長く、且つ支流灌域が広い。武漢に降雨がなくとも、上流支流に大雨があれば、本流亦た増水せざるを得ないではないか。



揚子江は本流三千五百哩、流域面積七十五萬方哩、十二省に亘ると號稱される。上海から漢口迄六百哩だから、パミールの廂から滴る雪どけの水が漢口迄流れるに、ザット三千哩、平均流水時速三哩として、一日七十二哩、四十餘日を要する計算である。其處で日本では昨日の雨が今日氾濫するが、支那では先月の降雨が今頃流れて来る。支那なるが故に雨迄間抜けてゐると云ふ譯ではなく、境域が廣く、河江が長いからだ。だから武漢が數十日の旱天、百幾度の炎暑に身悶えてゐる事には些も頓着なく、長江は悠々滔々、連日増水して、終に武漢三鎮を濁流の裡に覆没する。

自分の踏へてゐる雪が融けて、目の前で増水するのは、實驗的で看易いが、三千哩もの彼方の事が數十日の時間の経過を俟たねば顯れぬと云ふことになると、吾々の經驗は、原因と結果との必然的連繫を理解することが困難となるから、其處で神祕を藉りて来て、未解の部分埋めなければならぬ。「没法子」は其處から生れる。



太古は茫乎として明かでないが、堯の時代に「湯々たる洪水、天に蹈り、浩々として山陵を懷襲し」たので、堯は禹の父鯀を登用して治水に努めたが、九年にして尙ほ効果がなかつたので舜は更に禹を登用して、父業を繼がしめた。彼は十三年間九州を週巡して、治水の効を收たと傳へられてゐるから、父子二代、實に二十餘年の日子を要した譯であり、又「禹之功爲大、披九山、通九澤、決九河、定九州」などある處から推して、其の工程規模の豪大さが推測され、話半分としても、先頃長江の大水等は、まだ／＼足元にも寄付けぬものがある。

支那史は古い、大水の歴史も亦た古い。春秋二百四十年に、大水が六七回記録されてゐるが、「傳」がないので、其の狀を詳にしない。通鑑に至つては、大水は勿論枚舉に遑がない。要之併

し慌てる事はない、慌てゝも無益である。三千五百哩の水源が、千古の白雪に蔽はれてゐるバミールの廂の下に在る限り、復た週期的に大水がやつて来て、日本の本土程もの地域を一洗に流して了ふであらう。事後の救済は或程度可能であつても、災患の豫防回避は古來浚法子であり今後も亦た然であらう。

◇

長江流域許ではない、支那全體が今年水攻めに遭つてゐる。河南河北山東は云ふ迄もなく福建廣東から雲南に至る迄頻々として水災の惨害を訴へてをり、其の廣度と深度とは殆んど想像に餘あるものがある。

併し支那で災害を云ひ出せば際限のない話ではある。

最近四五年に就いて見ても、民國十六年夏以來西北支那（黃河流域）は三年間引續き旱魃に見舞はれ、民國十八年春河南鄭州でさへ、女兒二十歳迄は年齢一歳につき銀一元の割合でも、もはや買手が無くなつたと云はれてゐたし、開封では交渉署の陣科長が記者の質問に對し、産業技師が茄子と南瓜の産額を報告するやうな平靜な態度で「某々縣では飢饉の爲め毎日二百人

(6)

宛餓死する」と云ふ極めて事務的な報告をしたものである。天災許ではない。翌十九年には馮閻の西北聯合軍と蔣の中央軍とが支那内亂史には未曾有の大戦闘を續け、所謂中原に十數萬の軍民が其の屍を曝したことであり、本年六月には福建省の北部建寧泰寧一帶で共匪の爲めに屠戮された人民の屍は三日間の作業も尙ほ收容し切れぬ程多かつたと云ふことが責任者から報告されてをり、又江西境に近い湖南の平江、瀏陽地方では共匪及官兵の爲めに殺害された人民の總數實に三十九萬五千餘名に達したと云ふ説が世界の聽聞を驚かすに至つたのである。

雨らねば旱魃、雨れば大水、其の相の手に内亂、流賊共匪だと云ふ。天災と人禍と交互に而して永劫に斷續する。

(7)

かう云ふ所で屍の一々に感傷的な涙を拭ひ悲痛な面持をしてゐたからとて、如何なると云ふものか「浚法子」ではないか。だから河南の陳君のように人間の生命と云ふものを芋か大根のやうに極めて軽く方付けて了ふ外には方法がないのだ。

かういふ支那である、長江が一夜にして武漢を覆没したからとて、些も慌てることはない。同じやうに銀貨が半落したからとて四億民衆の經濟生活がどうなると云ふものでもない。況ん

や經濟機構の根幹が動搖するやうな心配をやだ。

元來支那には國家がない、國家生活がない。政治にしる經濟にしる全體としては始めから機構も組織も統制もないのだ。

一匹の蚯蚓のように如何に年甲を経ても到底龍に迄進化し得ない代りに、頭にしろ尾にしる、何の一部分を傷けられても、傷けられたまゝに永遠に生きて行き得る奇怪なる存在である。此の意味では支那は世界で最も弱く且つ最も強い。



長江と共に、支那で大がよりで長いものに長城と云ふがある。一口に萬里と號稱するが、先づ六千支里位の處であらう。六支里一里として、一千里、二千五百哩だ。住宅に塼をまはすつもの、國の垣である。中華と外族、文化人と野蠻人、富裕と貧乏、旦那とルンペンを區別する境界であり、物持ちの盜賊除けでもある。

支那人の住居を看よ。一間一間に仕切があり、二三四間が一棟となつて、他の棟から獨立する、三四棟が塼で圍はれて、一の院子となり、數院を巢鴨監獄程の高い塼で圍つたのが、初めて一

軒の家である。監獄の塼に圍まれた家屋の集團が、又た壁をめぐらすと、城市即ち縣城省城となる。四百餘州萬千の城市をひとまとめにして、ちよつと許り垣根を周らして見たのが、即ち長城萬里だ。それは國の塼である。

支那で城とは、通常垣のことで、千代田城、大阪城等の日本のシロとは譯が異ふ。小は僅か一の部屋から一國の大に至る迄、一つ一つ垣を築いて、自分を護らねば安心の出來ぬのが支那人である。これ程支那人が個人としても、團體としても、各々の單位に於て、個人主義的であることを、有力に實證するものはない。

孫逸仙が「三民主義」で中國人は「一片の散沙である」とて其の團結力の缺乏を嘆じてゐるのも之が爲めだ。支那は長城と東海の盆に盛られた四萬々粒の「沙子」である。この四億粒を一塊のコンクリートに凝結せしめる爲めには、政治生活に於ける民族意識の「セメント」と經濟生活に於ける利害連繫の「水」とを必要とするが、此の二要素の完備は支那にとつて河清百年の感がないこともない。五族共和がコンクリートに於ける永久の龜裂を作つてをり、交通の敏活を阻害する地理的要素と、強烈なる個人の經濟的生活力が他との連帶の必要を稀薄にする

からだ。支那の強さは個人の生活力に於てあり、其の弱さは全體としての凝結力の缺乏にあるとも謂ひ得ると思ふ。

富裕——文弱——防衛——個人主義——功利——我儘……個人でも、國家でも、傾向は同じである。

三等國から一等國に、次いで世界三大強國に飛躍した日本は、自ら富強を以て任じ、彼の宣傳するが如く、支那を所謂帝國主義蹄鐵下の弱少民族と目してゐるやうであるが、看やうによつては、却て其の逆で、今日の滿蒙係争の如きも、町人日本が横暴地主の裏門で喚いてゐるやうな皮肉な漫畫に看えぬことはないではない。



腐つても鯛と云ふが、腐つて了つては枯券も面目もあつたものではない。最早鯛の持つ威嚴も無い代り、亦責任もない。鯛や雜魚のやうに自由であり得る。

其處で革命政府の外交部長は「一切の不平等條約を廢棄する」とか何とか世界を喰つた宣言を發する、慌てるのは腹の出來てをらぬ理論外交だけである。

北平に遊ぶ日本人は其の階級の如何を不問、八大阜の素見と共に琉璃廠の骨董素見を忘れぬであらう、而して其の掛値の法外に、支那の雄大さを味得ることが出来るであらう。如何に大道商人と云つても日本では掛値にも一定の限度があり、下手に値切つたりすると御客も叩きのめされる危険がある。其の頭で支那の縁日商人に對しては勝敗を論ずることを須ひぬではないか。百圓と云ふのだから先づ五十圓は値けてやらねばなるまい——其處で外交々渉は五十と百の間に折衝決定されて了ふ。外交部長、一寸ソツポを向いてベロリ赤い舌三千丈、其の舌の先を看よ！ 六尺禪の上に西洋服を着込んで日本が神妙に坐つてゐるではないか。國際場裡に「張開眼睛說瞎話」で通つてゐる支那である。管を巻いてゐる醉漢に生面目に打て合ふ奴が愚である。

鯛としては支那は腐つてゐるが、腐つてゐるが故に面目と枯券を顧慮する必要がなくなる、其處に無頼が尻をまくる強さがある。支那にとつて其の弱さが同時に強さなのである。



今夏の長江氾濫は、云ふ迄もなく、雪どけ降雨等による増水に原因するが、武漢が其の最大

の影響を蒙つたのは、長江の爲めに閘門の用をつとめる洞庭其他上流の沼湖と、本流との連絡に何等かの變化が出来た爲めに、其の安全瓣作用が減退したこと、數年前蕭耀南に依つて武漢下流百八十支里に築かれた樊堤口が、水流を阻碍したこと等によると云はれるが、支那人の或る方面では、所謂國民革命が其の主要工作として城市の城壁を無暗に破壊した爲めに、洪水から城市を保護することが出来ず、終に其の慘害を蒙るに至つたと云つて、反革命的怨言を放つてゐる者もあるが、支那の歴史的事實に照して、大いに首肯し得るものがある。

歴史に據ると、城壁を周らした都市は、其れ自體一の國であつたやうに理解される、往昔は勿論であるが人口稠密な今日に於ても、都城は其の裡に種々の設備と原料とがあり、或る程度迄は自給自足出来るやうに出来てゐる。で城壁は外敵侵入の防止に備へられたと共に、自然の齋す災禍から人間生活を防護するにも、役立つて來たのであつた。



城壁が水害を防禦すると云ふ理屈から、支那が大水に備ふるに尤もよい方法が、唯だ一つある。其は長江を防ぐに長城を以てすることだ。宜昌下流上海迄九百五十哩の兩岸に築堤すると

して、長城を其儘切取つて來れば十分事が足るのである。處が今日の支那は、長城を創る力を持たぬ、東洋の文化國支那には、現代科學文明の効果が極めて鮮い。精詳な測量師も、工程師も要らぬ。數理を超越した阿呆と篋棒とが支那では昔の如く今も大なる偉力であり得る。

支那は王道と云ふ特殊な文化、王業と云ふ特殊な文明を有つた。此等は併し帝王の所産所業であるから、帝王が解消された今日の支那では、最早王道も王業も存立し得ない。阿房宮も長城も帝王の業績である。帝王を失つた支那は、同時に長城を築く力をも失つたのである。

此の意味に於て長江の水災を防救する途は、秦始皇を待望するに如くはない。文化昌明の二十世紀に於てさへ、理想家孫中山よりも洪憲袁世凱に、より多く支那は期待する事が出来たであらう。

議論は已に業に盡されてゐる、曰く立憲制、聯省自治、合議制、委員制、交通政策、實業振興、教育普及、幣制改革等々。併し二二が四の算法は、支那では往々にして齟齬を來す、科學が無力であるのではない、宏大幽遠な地理歴史の兩面に亘る支那の傳統的特異性が、現代科學の適用に便利なる状態を拒否するからである。半世紀一度の長江水災を防救するにさへ、三民

主義に依頼するよりは、秦始皇の出現を待望する事が、支那にとって何程合理的であるか、同じやうに支那の此の特異性に重大なる變移が起きぬ限り、支那自身の建直ほしは、小孩のまゝごとのやうな「西洋」式「革命」によつてゐては却つて日暮道遠の憾があり、寧ろ彼自身三千年來の傳統に立返へる方がより捷徑でないであらうか。



支那とは何ぞや？ 支那は支那也矣！

駆出の西洋程若くもなく、九十里の信濃川が一番長いと云ふ日本程小さくもない所の支那は自ら特異な存在でなければならぬ。

## 二、支那の稱呼について

中華民國

日本政府の取定め

中華民國遺民章炳麟

支那内學院 チヨン鬚と辮髮 國號と通稱

中國

「中國」の意味 抽象的道德的意義 「中國」

の具體的地域 「中國」の自家撞着 中國と

非中國 「中華民國」——「中國」——「國民」

支那

「支那」の源流 自稱と他稱 「支那」は卑稱

ではない 「先生」「大將」「中國人」と倭奴

支那内學院の「支那」美稱論

## 「中華民國」

一  
昨年春であつたか、支那政府は日本に對して「支那」と云ふ詞の使用につき取締方を要求した。支那は今日既に「中華民國共和國」として立派に國際上認められてゐるにも不拘、日本が尙ほ支那と呼ぶのは卑稱であるから不都合だと云ふのである。

當時日本の一流新聞で之が爲めに社説を掲げたものがあり、別に二三意見も發表されたが、要は支那は卑稱でない、西洋人の China は即ち東洋人の支那であると云ふ意味に歸結される。之に對して留日支那學生の本國政府支持の抗辯が新聞に投書され、其が又各支那紙に翻譯轉載されると云ふ次第で、支那に關係を有つ者の聽聞を不尠賑はしたのであつた。

其後日本政府は十月三十一日の閣議に於て「支那國の國號に關しては國內又は第三國との間に用ふる邦語公文書に於ては中華民國の稱呼を用ふることを原則とする」ことに決定したといふことであり、支那紙が此の報道を鬼の首でも取つたやうに披露したので「支那」論辨は一應

結着を告げたのである。

## 二

中華民國共和國は現在支那の國號であるから其を所名の通り呼稱するにつき何人も異議のあり得やう筈がない。唯我々の日常生活に於て此の七字を正確に發語することは誠に其の煩に堪へぬ。其處で彼自身も通常單に中國と略稱する。既に略稱ならば、中國、中華、民國、均しく可也矣、支那亦不可あらむやだ。然し「中國」は日本にも此の名稱があるので尤も紛らはしく、中華は國の名稱として落着かぬ感があり、結局民國が比較的無難といふことになる。處が此の民國たるや僅に二十年の歴史しか有たぬ。二十歳の中華民國を然ふ呼ぶに異存なしとして、然らば中華民國紀元前を如何に呼稱すべきか、問題は其處に繋つてゐると思ふ。

現在支那を中華民國と云つても其は一九一二年突然天から降り地から湧いたものではなく、黃帝堯舜以來五千年、支那の歴史的傳統の所産であるから、今日二十一歳以上の支那人は皆中華民國では呼び切れぬ或る時代を持つて居る筈である。昨春來日支の「支那」論辨に於て双方共此の歴史的觀點に觸れなかつたのは看過することの出來ぬ大きな錯誤で、結局水掛け論に終

つたのも之が爲めだが、現代日本のジャーナリズム支那論では其以上は期待すべくもない。

二十年の中華民國を最後の一小部分とする五千年の支那を取扱ふ者にとつて、別に一個の「支那」の辨なきを得ない所以である。

## 三

一九一二年辛亥革命によつて支那では大清帝國が滅亡して中華民國と號稱する共和國が成立した。此の共和國は併し僅か二十年の歴史に於てさへ袁世凱の洪憲帝制、張勳の三日復辟を出現した位であるから、中華民國將來の命脈については何人も保證の限ではあるまいが、今此の中華民國共和國が今日の如く將來も永劫に存続するものと假定する、否存続せねばならぬと信ずる。然し二十年以前に於ては支那史の何處にも中華民國は存在しなかつた。

甚しきは目前に中華民國の存在を否定してゐる章炳麟の如きがある。辛亥革命の元勳であり現代支那國學の第一人者たる彼が民國十七年、前の大總統黎元洪の靈に贈つた輓聯には自ら中華民國遺民と署してゐる。太炎老人によれば其時以來中華民國は滅亡してゐる。だから彼の前半生は清國人であり、後、中華民國人となり、今は中華民國遺民である。



今は大中華民國首都南京は半邊街に支那内學院と云ふのがある。民國八年沈子培、陳伯嚴、章炳麟、熊希齡、梁啓超、葉恭綽等當代支那の碩學名流後援の下に歐陽漸、蒯壽樞、梅光羲等が時の政府の認可を得て設立した一種の佛學研究所であるが、此の一派は其が最も適當な稱呼であると信じて自ら「支那」と名付けてゐる。

現在の中華民國に於てさへも其の本國人にして、中華民國人と自稱することを肯かぬ章太炎一流、支那と自稱することに誇を有つ支那内學院一派がある。況や中華民國紀元前に開眼せば呼稱問題は更に複雑とならざるを得ない。

支那は易姓の國であつた。日本は三千年皇統一系世界無比だ。支那は四千年易姓幾十朝、亦世界無比だ。此の世界無比の特徴が所有する事物に於て、日本を單純に、支那を複雑にする。チヨン鬘がオールバックになつても日本人には變りはないと考へる單純な日本人の常識は、辨髮が剪去されても清國人には變りはなからうと云ふ獨り合點に陥り易い。だから東京の中心某理髮店に今でも「清國人耳そうじ」の招牌が掲げられても行人は何等其の不都合を怪しまぬのである。

中華民國は支那の一時代の特定の國號である。此の意味では宋、元、明、清と何等擇ぶ所が

ない。吾々は中華民國を爾呼ぶに些も躊躇する者ではないが、支那固有の複雑性がそれだけでは呼び切れぬ部分を残す事實を認めざるを得ない。支那の王朝變革は常に二十幾朝に止らぬ、或時には數國數十國、更に數百國さへが互に交錯起伏する。趙の馬服君は「且つ古は四海の内分れて萬國と爲る……今、古の萬國を爲すものを取りて、分つて以て戰國七と爲す」と云つてゐるではないか。其を各の國號によつて名稱することは殆んど不可能であり、又無用の煩雜でもある。そこで必要が自然に所有する國號を超越する普遍的な名稱——通稱の發生を促した。自稱「中國」、他稱「支那」は此の必然的要求の所産である。

要之中華民國は國號であるが、「中國」及「支那」は通稱である。國號は時間と空間との制限を受けるが、通稱は其を超刻し従て又國號の存在に抵觸せざるは勿論、國號を其の内に包藏し得る廣さを有つものである。だから昨年十一月一日の支那紙が、前日の日本政府閣議の決定を報道して「從此中華不支那」と云つても其「不支那」は極く狭い範圍にしか通用されないであらうことを諒解して貰はねばならぬ。

古來支那は「中國」と自稱して來たが其は支那歴史の如何なる時代の國號でもない。

中國と云ふ詞が何時代から使用されたかは此處に考究する暇はないが、詩經大雅民勞詩に「惠此中國」の句が四出してゐるのが恐らく文獻に現れた最も古いものゝ一であらう。左傳には莊公三十一年の條に「……凡諸侯有四夷之功、則獻于王以警于夷、中國則否、不相遺俘。」とあり史記漢書以下の史書に至つては中國の二字は頻出殆んど送迎に暇なしだ。

抑中國とは中なる國である。中とは四方之中也だ。だから物理的に諸國の中央に位する國と云ふのであるが、抽象的には禮教文化が優越し從て中央に臨御して四夷を統率する權利と義務とを有すると云ふ道德的意義を此の「中」字は含蓄するもので、此の道德的意義が地理的位置の關係よりは遙に重要なものと考へられてゐる。

從て字義が通れば必ずしも中國の二字に膠着する要はなく、中華、中夏、華夏、諸夏又は單

に中、華、夏と云ひ或は中原、中土、中州（此三者は地理上の土地に重きを置く場合が多い。特に宋史明史に多用されてゐるのは中國の地理上の本據所謂中原を占領してゐた非中國、遼金元との關係多端なるによる）神州等とも稱せられたもので、總て中國の別稱であつて特定國家を指稱する國號ではなかつたのである。

國號ではなく通稱である意味では「中國」は「支那」と同等であるが、此の幾種の別稱代稱の存在が許されてゐる事實は「中國」の稱呼としての獨自性を奮ふもので、名稱としての價値が甚しく微弱なものとなつて了ふ。

此等「中國」一連の名稱は自然的に發生したのではなく、悉く先人によつて作爲されたものである。其の一々が深奥幽玄なる意味を含蓄する漢字と云ふ藝術的特殊な工具に依頼してゐる事が、かくも多數の非科學的の名稱を生んだ所以であらうと思ふ。

「中國」の抽象的意義は公子成が趙武靈王と胡服を議する一條を引用するに如くはない。

臣（公子成）聞、中國者、蓋聰明徇智之所居也。萬物財用之所聚也。賢聖之所教也。仁義之所施也。詩書禮樂之所用也。異敏技能之所試也。遠方之觀赴也。蠻夷之所義行也。今

王舎此、而服遠方之服、變古之教、易古之道、逆人之心、而佛學者、離中國。故臣願王圖之也。 戰國策卷六武靈王 史記趙世家第十三

これに據れば苟も右の如き資格をさへ有すれば地理的位置は必ずしも問ふ所ではなく、河北河南、江北江南、山左山右、江東江西、閩越、巴蜀、都て中國であり得る。

恰も「國都」と云ふに似てゐる。西安洛陽を問はぬ。昨日北京の國都が今日南京に遷り、明日又廣東武漢等に易ることを些も妨げない。一は普通名詞であるが、他は固有名詞であるからだ。國號は固有であるが「中國」は否だ。

二

中國は文化の中心地であるとするが、實際上如何なる地理的區域を指稱するかと云ふに、之は極めて含糊摸稜、判然たる區劃がないが、史書の記録によつて略其範圍を推測することは出来る。

一體支那は如何なる時代に於ても其の領域が判然した事が無い、中華民國と雖も亦然だ。吾々は、只最近の事例として外蒙、呼倫貝爾と中華民國との關係を想起するだけで充分であらう。

詩經民勞詩に據れば「惠此中國」は其の第三章には「惠此京師」とある。京師は首都即ち天子の都であり、此處では周の國都である。此の區域を稍擴張せば、天子の都を中心とする國土即ち天子の國が中國である。然るに群雄が四方に割據して所謂「戰國」時代を出現するに至り、初めから國境と云ふものの判然せぬ周國は徒らに天子の虚位を擁するのみで、其の國土國勢は益四方の蠶食を受け終に滅亡するに至つたが、周を襲ぐべき強力な天子、天子の國が永い間出現しなかつた爲めに天子も中國も當時から既に抽象的名詞に墮した觀がある。

要之、民勞詩の中國は之を京師と云ふも差支なき程度の都城と其の近郊位の小區域であつたことが想像されるし、史記匈奴列傳「申侯怒而與犬戎共攻殺周幽王于驪山之下……而居涇渭之間侵暴中國……於是戎狄居于陸渾、東至於衛、侵盜中國……」によれば當時の中國は僅に陝西山西河南の黄河に沿ふた小部分を包攝したに過ぎない。(民勞之詩は序に召穆公が厲王を刺るなりとあり、厲王は西紀前八七八年に即位し、幽王の死は厲王の即位に晩ること約百八年である。)尤も漢揚雄「太玄」の「建不拔之策、舉中國、徙之長安……」を唐顏師古は「中國謂京師」と注してゐるから、「中國」は全然京師の同義語であると解しても差支はない。

戰國策には「中國」の詞が十數個所に散見する。當時從横の士が天下の形勢を案じて利害得失を衝り、謀略の長短を論じたものだけあつて、之によつて吾々は當時の「中國」の地理的區域を較々具體的に彷彿することが出来るであらう。

義渠(西戎)君之魏、公孫衍謂義渠君曰、「道遠、臣不得復過矣。請謁事情。」義渠君曰、「願聞之。」對曰、「中國無事於秦、則秦且燒燔獲君之國。中國爲有事於秦、則秦且輕便重幣而事君之國也。」義渠君曰、「謹聞令。」居無幾何、五國(韓魏趙燕齊)伐秦。陳軫謂秦王曰、「義渠君蠻夷之賢君、王不如賂之以撫其心」

戰國策卷三秦惠文君

非以此時也。成君(燕相國)之功、除君之害、秦卒有他事而從齊、齊趙合、其讎君必深矣。

……誠能亡齊、封君於河南爲萬乘、達途於中國、南與陶爲隣

且王攻楚之日、四國(齊趙韓魏)必悉起應王。……齊人南面、泗北必舉。此皆平原四達膏腴之地也。而王使之(魏齊)獨攻。王破楚、以肥韓魏於中國、而勁齊。

昔者中山之地方五百里、趙獨擅之。功名立、利附焉。天下莫能害。今韓魏、中國之處、而天下之樞也。王若欲霸必親中國而以爲天下樞、以威楚趙。

同卷三秦昭王

今又劫趙魏、疏中國、割衛之東野、兼魏之河南、絕趙之東陽、則趙魏亦危矣。趙魏危則非齊之利也。韓魏趙楚之志、恐秦兼天下而臣其君。故專兵一志、以逆秦。三國之於秦、壤界而患急齊不與秦壤界、而患緩。是以天下之勢、不得不事齊也。故秦得齊、則權重於中國。趙魏楚得齊、則足以敵秦。

同卷四齊王建

張子曰、「彼鄭周之女、粉白墨黑、立於衢閭、非知而見之者、以爲神。」楚王曰、「楚僻陋之國也。未嘗見中國之女如此其美也。寡人見之、獨何爲不好色也。」

同卷五楚懷王

天下事秦、秦王受負海之國(齊)、合負親之交(趙)、以據中國、而求利於三晉、是秦之一舉也。

同卷六趙惠文王

且夫宋、中國膏腴之地、鄰民之所處也。與其得百里於燕、不如得十里於宋。同卷九燕昭王  
以上の援例に據つても中國の地理的界域は必ずしも判然せぬが大約周韓魏趙燕齊等と觀て差支なからう。地圖を案するに之等は略今日の兩河兩山地方に相當する。秦楚は通例中國からは除外されてゐるが、漢人の居住地である限り、廣義では中國に包含されて、所謂蠻夷等の外族からは區別されるが、又極端に其の範圍を狭め、天子たる周又は周及び鄭、韓魏若しくは趙魏

等のみを中國とし、又宋を中國として燕から區別する等廣狹長短、必ずしも其の範圍は一致しない。

史記には世家吳太伯に「余讀春秋古文、乃知中國之廣、與荆蠻句吳兄弟也」齊太公に「秦穆公辟遠、不與中國會盟、楚成王初收荆蠻有之、夷狄自置、唯獨齊爲中國會盟」等とあり、漢書武帝記六では臣瓚は「瀨瀟也。吳、越謂之瀨、中國謂之頊」と註してゐることにより、當時吳越を秦楚と共に明に中國から區別してゐたことが理解される。（臣瓚が傳へらるゝ如く晉の傳瓚だとせば約千五百年前である）

漢唐諸國の領土が開拓されると共に禮教が所謂化外の民に及び、黃河流域に育まれた漢人文化の領域も漸次擴大され、殆んど今日の二十幾行省の廣さに迄及んだのであるが、元來中國は國號でないから特定國の領土と「中國」の地理的區域とは必ずしも一致せず、否一致せざるを常とし、其が國の階級、文化の程度を表象する自尊的稱號である結果として、外屬者には此の稱呼を許さず、今日の東北（滿洲内蒙）西北（綏甘新蒙）西南（蜀滇黔湖廣）東南（江浙閩越）地方の大部分は、最近迄支那歴史の永い期間「中國」からは除外されてゐたのである。

中古以來漢人の中國は陝西山西河南河北を其の主要根據地としてゐたが、五胡蜂起以降北朝、遼、金、元、清に至る迄、非中國人の中國を掩有占據せるもの、實に前後八九百年の久しきに亘り、元は歐羅巴をも震撼し亞細亞の大部分を掩有して實に三百年の社稷を維持したのであつた。併し此等の非中國——外族を中國人は中國から嚴密に區別してゐる。宋史の「金有必亡之形、宜靜以觀變」明史の「元主中國百年」等は之が例證とするに足るものであるが、明史は其の外國例傳の裡に「日本」等と共に「韃靼」傳を設け「韃靼即蒙古、故元後也」と謂ひ、元を日本並の外國に取扱つてゐるのは注目に値する。

明史に據れば明が中國であり、元も日本も非中國——外國であるとふのであるが、日本から觀れば元明の中國、非中國の如何に不拘、均しく是れ支那である。而且蒙古を外國とする明を中國と呼び、蒙古を其の一族とする共和五族をも亦中國と呼ばねばならぬとせば「中國」は直に自家撞着するであらう。

三

中國は野蠻人から文明人を區別する對稱であるが、其の文明は漢人によつて創造維持された

爲めに、此の稱呼は同時に又外族から漢人を區別するものでもある。

惠比中國、以綏四方、詩經大雅

凡諸侯有四夷之功則獻于王、以警于夷、中國則否、左傳莊公三十一年

我狄豹狼不可厭也、諸夏親暱不可棄也、左傳閔公元年

廣中國、滅胡之本也、史記主父列傳

南海東西數千里、頗有中國人相輔、此亦一州之主也、可以立國、史記南越尉佗列傳

秦徙中縣之民南方三郡、使與百粵雜處（如淳曰中縣之民中國縣民也）、漢書高帝記第一下

是時漢方南誅西越、東擊朝鮮、北逐匈奴、西伐大宛、中國多事、漢書萬石君列傳

今宣遣使吊問則四夷聞之、咸服中國之仁義、漢書蕭望之列傳

混一華戎、北史魏本記第二

馮道對耶律德光則言、此時百姓佛出救不得、惟皇帝救得。論者曰一言而免中國之人夷滅、通鑑

金有必亡之形、中國宜靜觀變、宋史喬行簡列傳

安巴堅既立、後值中國多故、漢人歸之者衆、遼史

謂宰相曰、元主中國百年、朕與卿等父母皆賴其生養、明史太祖二

西南諸部自古及今、莫不朝貢中國、明史四川太司列傳洪武敕諭

「中國」の二字は史漢以降支那史にはあまりに多く到底列舉に勝へぬが右二三の援例によつても「中國」が蠻夷戎狄、邊方、四夷等非中國に對する自尊的稱呼であることを理解するに十分であらう。

中國が非中國の對稱であると云ふことは、「中國」の特定名稱としての價值を喪失するものであることは言を俟たぬ。

で中國の意味はこう歸納して差支なからう。(一)地理上諸國の中央に位置し (二)禮教文化の優れた (三)漢人の國であり、邊方、野蠻人、外族から自らを區別する相對的稱呼であるとかう云ふ含蓄を以て周の厲王以來二千八百餘年間、漢人即中國人によつて、此の詞は沿用されて來たのである。

中華民國は漢滿蒙藏回の五族共和だと云ふが、形式は兎に角實際には一向共和してゐない。

蒙古が獨立狀態に在るは周知の事實であり、甘肅では馬廷賢を首領とする回教徒の漢人大虐殺が、有史以來の大慘禍としてツイ數日前（本年二月）の新聞を驚かしてゐる。

兎も角然し五族共和と云ふことにして置かう。傳統に従へば五族の内漢族が即ち中國で他の四族は非中國——外族——野蠻人である。辛亥革命の如き、實は中國人の中國を奪還する運動、漢人が滿人に代て四族に君臨する運動であつた。だから共和五族を中華民國と呼ぶのはいゝが中國と呼ぶには呼び切れぬものを感じる。

此頃鼻息の荒い東北の青年等は自分等が河北山東移民の子孫であることを忘れて、動もすれば西南（湘湖等）の同胞を「南蠻子」など、卑稱するし、北平地方の都會人は西北關外の田舎者を「韃子」など、云ひたがり、廣東では今でも中部地方支那人を唐人と云ふ者があると聞くが、此等は皆「中國」傳統から脱け切れぬ例證とするに足るものである。

明に外國籍と銘を打たれてゐる金日碑（匈奴）阿史那忠（突厥）尉遲敬德（于闐）は勿論、拓拔瑤（鮮卑）勿必烈（蒙古）玄燁（清康熙）等を始とし安祿山（胡）曾一本（蠻）等も亦「中國」には値しない。

現代人に就て視れば溥儀、劉哲（滿）馬福祥、白崇禧、（回）白雲梯、恩克巴圖、克興額（蒙）羅桑堅贊（藏）等を中華民國と呼び得ても、中國と呼ぶには尙ほ間隔あるを覺える。

吾々は以上の總てを、黃帝堯舜孔老……孫中山蔣中正から伍朝樞、陳友仁、而して「中華民國遺民」章炳麟、「支那人」歐陽漸に至る迄、一切を綜合一束に呼び得る一の稱呼を要求する。今日支那は普通中國、中國人と自稱し、特別の場合の外は中華民國、——人とは云はない。而且其の政府をば「國民」政府と自稱し單に政府とは云はぬ。普通對外的には稀に中國政府と稱するが、中華民國政府とは殆んど云はぬ。

孫逸仙に率ゐられて廣東の一隅に偏在してゐた國民政府は「北伐の成功」によつて兎に角一個の統一政府に迄成長した譯であるが、同じく國民政府でも袁に對しては廣東、武漢に對抗しては南京政府と云はれ、張作霖の北京に對しては廣東、南京又は中央等と稱せられたものである。

要之、「國民」と云ふは「以黨治國」を標榜する黨國一如の現在支那では、全國民の支持を有つ——正統なる——國民黨の——と云ふ意味に外ならぬであらうが、意味の如何に不拘、其の

發生を想像し得る「非國民」政府の對稱である。かう云ふ名稱の普及は支那が國家としての要素を具備してをらぬこと、彼獨特の複雑性に歸因するものと思ふ。

既に「中華民國」がある。而して其の國及國人は之を「中國」と呼び其の政府は之を「國民」と稱す。此處にも亦統一普遍的な名稱を要求せざるを得ざる大なる缺陷がある。

「中華民國」と云ふ稱呼は民國の國號であるが、民國が二十年の歴史しか有たぬ必然の結果として、時間的歴史的には通用せぬ數千年の期間をもつものであり、「中國」と云ふ稱呼は本來固有のものではなく、之と併行する中華以下許多の同義稱呼の存在を許すものであり、又非中國——外族——野蠻に對する自稱としての歴史的傳統を有つ爲めに、空間的地理的に通用せぬ廣大な地域を残すものであるから、均しく全一整個の支那を呼稱するには適當ではないのである。

### 「支那」

最早結論に達した。中華民國も中國も支那の稱呼としては適切でないことが明になつたが

「支那」は前二者の缺陷を完全にカバーする。

學者の考證によれば「支那」は秦の始皇帝が支那を統一して勢威を四境に振つた當時、接壤の外國が秦の國號を其儘呼稱したのに始まり、轉訛して支那、Chinaとなり中央亞細亞、印度、波斯から歐羅巴に傳つたもので、西紀第一世紀希臘人の著書の裡にはチン(Thin)シネー(Sinae)又はチネー(Thinae)等の稱呼を發見することが出来ること云ふ。

秦の國號を外國が其儘チンと呼稱し其のチンは文字を離れ、耳口によつて音を承傳したもので、元來字義を超越した單純なる名稱として二千年來外國人に沿用されたものであると云ふことを注意すべきだ。既に音の承傳であるから、後來チナ、チネー、支那、China等の訛音が發したのも何等怪しむに足らぬ。

佛典の至那、支那、振那、振旦、(以下チニスタンの訛音)震旦、振丹、眞丹等も亦總て同一原音の轉訛で、文字は偶々其音を標記する爲めに借用された符號に過ぎない。だからチン、チナ一連の稱呼は來本一個のものであり、斷じて別名でも代稱でもない。處が中國、中華一連の稱呼は原と字義によつて作爲されたもので、個々獨立に並列せる名稱であると共に、更に幾



多別稱の作爲が許され得る性質のものである。前一系列の音稱は自然發生的であり絶對的であるが、後一系列の義稱は創造作爲的であり相對的であると云ふ比較は、稱呼としての價値に自ら輕重の差異を決定するであらう。

二

抑々「支那の辨」は自稱と他稱の相違から起つてゐるものと思はれるが、彼が中國と自稱する事が彼の自由であるが如く、日本が支那と他稱することも亦許さるべき自由でなければならぬ。而且支那が過去に於て易姓國であつた爲めに種々の國號稱呼があり、現在でも中華民國、中國、國民(政府)等々其の煩雜な名稱には外國人たる者、到處堪え得るものではない。事實現在の支那が如何に自稱してゐるかを知つてゐる日本人は極めて僅少であり、大部分の者は中華民國の成立にさへ關心してをらぬ。支那は日本に故障を待込む前に先づ自ら其の稱呼を統一——「合理化」する必要があるであらうか。

彼は日本の「支那」の使用に抗議してゐるが「支那」の代りに何を稱呼すべきかは明示して居らぬ。自稱する如く他稱して貰ひ度いのであらふが、日本には彼の自稱が明瞭でなく、明瞭

になつても其の數の多いのに辟易する。にも不拘彼が日本の合理的な自由に抗議する所以は恐らく「支那」は卑稱であるとの獨斷に因るものであらう。

自稱中國が非中國に對する尊稱であつた爲めに、意味の明瞭でない他稱支那を快く受納れないと云ふことも一應考へられる事であるが、凡そ事物の名稱は本來尊卑を超越する。日本はイギリスをイギリスと呼ぶ如く支那を支那と呼ぶ。決して卑稱ではない、少くとも「支那」に於て尊卑を意識してをらぬ。

但同一名稱でも之を呼稱する者の心情によつて尊卑の意味と調子とが異つて來る事は、日本語の「先生」「大將」に於て尤もよき例を見出すが、併し尊卑は本來名稱其のものゝ關する所ではない。(支那語では會て北京晨報の時評に「我、們、貴、國、人、只、會、打、吵、鬧……」等)。

大正十三年の夏であつたか大倉商業主催の支那事情講演會で、松井講師から「中國人——ちよんくわいん  
よんこれ——だから、ちゃんころは卑稱でない」と云ふ説明を聽かされた記憶があるが、之は語源考としては首肯し得ても「……だから卑稱ではない」は獨斷のやうに思はれる。魏志倭人傳の倭は説文に據れば順和の貌であるから日本の美稱であると云ふ説を是認するとしても、今

日支那の新聞雜誌に散見する倭奴倭鬼は、だから美稱であると云つても、日本人を満足させるに足らぬと同様である。

東京留學中に生れた子供に江戸と命名した支那人があるやうに、支那に興味と好意を有つ某日本人が其の子供に支那と命名してゐる事實があるが、此は日本人の「支那」が何等卑意を含むものでない事を実證するに足るものである。

三

抑支那人の特姓が然るか、恐らくは亦漢字の有つ藝術的特異性が然らしむるのであらふ、兎に角支那人は文字を尊重する、文字の意義に拘泥する、爲めに逆に字義に叩頭して其の支配に甘んじ穿鑿に墮し、牽強附會に失する場合がないでもない。

支那内學院の歐陽漸に「支那とは文明の美稱である」の一大論篇がある。(支那時報第三卷第四號)

支那は梵語であつて、具には支那泥舍と云ふものを省略して支那と云ふたのである。之を譯すれば名付けて漢國と爲し、或は唐と云ふも、實は神州の總稱である。之を義譯せば有思維

(思慮あるの謂)又は能計作(能く計畫するの謂)と云ふも、其實文物の邦と云ふ意味を聲明するのである。……云々

彼は右の書出して長々と説明を加へてゐるが、要するに其の所説は獨斷から出發してゐるやうだ。

吾々は「支那」は秦の國號が中央亞細亞、印度、波斯に傳つたもので、其後佛典及佛教徒によつて、今度は「支那」の稱呼が逆コースをとつて支那本土へ入つたものであるから、秦チンの音が梵語では支那に轉訛したものであらふことは推測に難くない。

彼は玄應及慧苑の音義を援用して梵語「支那」は譯して漢國又は唐國であると云つてゐるが其が本來神州の總稱であり美稱であると云ふ意味については些も説明しない。

梵語支那は漢又は唐を指稱する。漢唐は「衣冠文物の國、優美至極の神州」である。故に支那は「神州」を意味する。之が彼の論法である。彼は「支那」を説明せずして漢唐を説明する、其は所詮「中國」を説明するものに外ならぬ。

本國人の九分迄中國と自稱する中で、彼が統率する佛教研究所に「支那内學院」と名付けた

のは、只其が「文物の美稱である」からである。「支那」を「惡支那」と對稱してゐる彼は、亦自大思想に拘はれてゐる者で、野蠻に對稱して「中國」を自稱する者と、其の心術に於ては毫も變る所がない。惟彼は中國に替ふるに支那の二字を以てしただけ却て廻道をしてゐる。かくて彼は「支那」を「中國」と同等の相對的稱呼に逆引卸した。其は「支那」を誣ゆるものであり、稱呼として固有する獨自絕對性を破壊し其の尊嚴を不當に傷けるものである。

「支那」美稱論は卑稱論と共に取るに足らぬが、此處では惟本國人にも美稱論あることを注意すればいい。

「支那」は其の語源を詢ねても、現行の事實を視ても斷じて輕侮の稱でないことは明瞭である。

繰返して言ふが日本は中華民國を中華民國と、中國を中國と呼ぼう。惟中華民國、中國では、呼び切れぬ部分があるので、不得已「支那」を呼ぶのであつて、之が爲めに中華民國及中國人の大國大國人たる所以を些も傷けるものではない事を斷言する。(昭和六年二月)

### 三、天下と國家

天下——封建疆域 國家——國際境域 中華民國  
と天下 縱横家——説客——食客 辯舌外交 尋  
常六年生の大 臣 戦争と宣傳 中華と野蠻 「以  
逸待勞」 「遠交近攻」 「世界大同」

一  
茲に天下と云ふは支那を廣さとする封建境域を意味し、世界と云ふは地球の表面を廣さとする國際境域を意味する。

支那の歴史を一口には易姓二十幾朝と云つて了ふが實際はそう簡單には行かない。同時に幾個かの勢力が敵對抗争した時代が多く、其の間に屢々外族が交錯して非常に複雑な關係が展開されてゐる。周の武王が殷紂を亡ぼしてから今日迄三千年であるが、此の間支那が一の朝家によつて統一されてゐた期間と云ふものは前後を通じ千四百年を出まいと思ふ。爾餘の千六七百年間と云ふものは、諸勢力又は幾朝家の對立時代で、統一勢力の所在が不明又は未確定の期間であるから、支那は國としてよりは天下として、より多くの歴史を経たと云ひ得ると思ふ。

二  
春秋戰國は天下としての支那が典型的な局面を展開した時代で、春秋二百四十二年實に百二十國が興亡起伏したのであつた。漢に踵いでは三國五胡十六國があり、唐宋の間には五代が興亡する。一朝家としての宋は三百二十年の社稷を維持したが、半は遼金元との對立時代であ

り、南宋百五十年は全然中原から逐はれて、江東に僅に其の餘喘を保つたに過ぎない。

西紀一九一二年清朝の没落に次いで中華民國と云ふ名稱だけは、世界中で一番立派な共和國が成立したが、實際は清の統一が破れて、もう一度天下に逆戻りをしたと云ふ方が適切であらう。袁の北京政府と孫中山の廣東軍政府との對立、舊軍閥の北京政府と國民黨の廣東又は南京政府の對立は民國が依然として天下である事を実證する。只中華民國紀元前と違ふのは南北政府が各々のダイナステイでないと云ふ點にあるが、關係は之が爲め更に複雑となり、政府首領の交替毎に大動搖を來し、依然朝家の興亡に似た擾亂を繰返へすのである。かく共和を期待した五族革命が却て共争を結果した爲めに、革命の新規時直しが策せられ、兎に角一昨年夏、國民黨による支那の統一が一應完成した譯であるが、さて出來上つて見ると此の統一政府、案外蔣宋ダイナステイになりさうだ。其處で三晋の長老、「けしからぬ」と啖呵を切ると遼東の張公子、仲を割つて「まあ〜」。依然「天下」を脱することが出來ない。

### 三

支那が三千年來、一の國としてよりは、天下としての歴史をより多く經驗した事から、外交

と戦争とが一の關連に於て尤も特色ある發達を遂げてゐる。二百四十年興亡百二十國と云へば二年毎に一つの國が起伏する割合になるが、かく複雑多面な國際關係の下では武力による統一は非常な困難があり、假令其の力ありとしても戦争の煩擾痛苦に堪へない。算盤に合はぬビジネスは斷じてやらぬ功利的な支那人の特性も加つて、自然可及的戦争を回避する方法が案出されねばならぬ。

最近十年來の世界が國際聯盟軍縮會議等で戦争の縮少に努力してゐる如うに、天下支那ではクリスト誕生以前既に會盟なる名稱の下に攻防同盟、不戰盟約、領域協定等が今日の世界以上手際よく取扱はれ、支那獨特の外交ブローカーが輩出した。曰く縱橫家、曰く説客、曰く食客。支那人が先天的に辯舌に長じてゐるか否かは此處では問ふを要しない。「天下」では辯舌の効果が認められ、故に需要され、故に發達した。

戰國の孟嘗、平原、信陵、春申諸公の下に養はれた食客だけでも一萬人を越したと云ふから其の隆盛想見すべしだ。

辯舌外交の先輩としては鄭の子産あたりから數へるのが順序であらうが、其の雄は何と云つ

ても蘇張を宗とする縦横家を推さねばならぬ。併し彼等縦横家の手管は騙詐、欺瞞、詭辯、權謀、奇計に充たされ、彼自身の算盤に合はす爲めには往々にして主に背き、國を賣り、友を陥るゝも敢て辭する處ではない。實に賣國外交は二十世紀支那の專賣ではなく、中華民國紀元前二千二百年來の傳統である。

かくて堂々たる天下の諸侯が三寸の舌端にまくし立てられ「寡人謹んで社稷を奉じて以て從はん」と平身低頭する。其處で蘇秦は六國の相印を、犀首は五國の相印を帯びて顯榮王者を凌ぎ、張儀は秦の爲めに諸侯を連衡して天下を睥睨する。甘茂の孫、甘羅に至つては十二歳にして秦始皇の全權大使として趙王を説服し、還つて上卿に封ぜらるゝに至つた。二十五歳にして英國大宰相を羸得たウイリアム・ピットも三舍を避けねばなるまい。

十二と云へば尋常五六年生だ、そんな小便小僧が一國の大臣に成り済ますと云ふことは、吾々の常識では嘶にもならない。

志操や節義が通用せず、詭辯利害が幅を利かせ、賣國宰相と尋常五年生の大臣とが、嘶としてではなく、嚴然たる事實として青史に輝いてゐるとは、何と素晴らしいではないか。吾々は

かう言ふ特異な點にこそ支那の眞面目を窺知し得ると思ふ。

四

程度の差はあつても質に於ては現代支那を春秋戰國に比擬しても大した不都合は無からう。遊説の士だの食客だのと云ふケチな名稱はないが、政客と呼ばれる策士連が、實力者の間に介在して舌端と謀略とによつて、逆に彼等の力を牽制使驅すること比々往昔の如く然りである。

平生は軍權將領の幕下に參議とか秘書とか云つてゴロ／＼してゐる連中、一度天下の風雲搖けば忽ち袂を拂て起つ。曰く「代表」。外交使節だ。馮が河南で反蔣運動を策すると、敵味方灰色の大小代表が百泉に押掛け、閻が一度三晋の故都に不平を鳴せば、太原の宿屋は忽ち大入満員だ。廣西事件の李濟琛の説得に任じた吳老稚暉は、最近一年間南京の爲めに馮閻を説くべく電報書翰を飛ばした事十數回に及び、親ら河南山西北平に乗出したことも五六回を下るまい。彼自身は蔣代表とも國府代表とも云はぬが、事實は宛然天下遊説の棟梁である。

五

支那にとつて支那を一つの國家單位とする新らしい國際世界の出現は阿片戦争からは八十八

年、日清戦役からは三十五年の歴史である。

「天下」は支那を廣さとする國際境域であつたが、「世界」は地球の全面に迄擴大された。面白いのは此の世界に對する支那の態度が、彼自身の天下傳統を其儘適用せんとするに在る。其は天下が三千年來の歴史を有つに比し世界の出現は支那にとつては僅か五六十年の歴史しかない當然の結果でもあらう。

支那では必ず外交が戦争に先行し、並行する爲めに、兩者のケジメが判然せぬ。閻が蔣と將棋を差す、河南山東線に歩を世べると蔣も負けずに歩を進ませる。鐵砲を打たぬ前に將棋は一先づ休戦の状態となり、所謂宣傳、電報戦が始まり、二週間も氣長く文句を並べ罵り威し合つてゐる間にブローカーが策動して、天下の形勢は自ら勝敗の數を決定して了ふ。最早や將棋は王手を差す必要はない。閻は振り上げた拳骨で、何時か彼自身の頭を搔いてゐる。戦は勝つにありと云ふ一本槍は支那の戦争道には合はない、利害を説くにあり、不服を納得さすにある。文句を十二分に言ひ合はぬ内に干戈を動かすことは戦争儀禮に反するのでもあらう。

千九百年も前に漢の息夫翁が謂つてゐるではないか、「所謂上兵伐謀、其次伐交者也」と。兵

革を用ひざるものが策の上乗であり、其の次は外交連結して敵を援ける者は間諜を放つて離間せしむるやう宣傳外交をなすべしと謂ふのである。

民國十七年の首かと記憶するが、奉軍が山西軍を京漢線に沿ふて石家庄に近く追ひ詰めたことがある。奉軍に完全に包圍された、涿州城は戦術の上では大砲の二發も打ち込めば、即座に開城するのだが、奉軍敢てせず、數十日の後、力終に支へず降服の已むなきに立至つたが、其間奉軍の招降使、涿州人民代表等の數次の往還があり、一發の鐵砲も打たずに城の明渡は完了した。(時の涿州守將は、旅長傳作儀で、今の天津衛戍司令)そう云ふ支那へ外國が出兵して二十何時間に満足なる回答を與へよとか何とか野暮な要求を出し、時間が経過せば何の假借もなくドカン／＼と大砲を打込んだりするの、支那には如何にも野蠻に見えるにちがひない。野蠻とは「中華」らしくないことだ。中華は、先聖の遺風を尊崇し機械文明を蔑視する。で濟南事件にしても日本は十數名の居留民が虐殺されたと云ふので大いに憤慨するが、支那は日本の出兵を以て野蠻人の暴虐として國を擧げて喚き立てる。掛引も魂膽もあらうが、大體日本と支那とは戦争に對する考へ方がまるで違ふやうに思はれる。

昨年末東支鐵道の紛糾で遂に露支國交斷絶し、北滿では砲火を交ゆるに至つたが、國民政府外交部長の對露策戦は、新聞の報ずる處に依れば「以逸待勞」である。露軍が遙に國境に辿り付いた處を待ち構へて叩き付けやうと云ふのである。逸を以て勞を待つ。如何さま漢唐が慣用した匈奴突厥防禦策其儘だ。果然數日を出でずして叩く筈の露軍に逆に叩かれ、滿洲里海拉爾と將棋倒に潰滅して、韓族長弟光は陣没し、遼寧外交全權蔡運升が「城下の盟」を誓はねばならぬことゝなつたなどは、國際「世界」場裡に於ける「天下」傳統の無力を暴露して餘あるものがある。

## 六

「一舉兩虎の功を收む」る方策は陳軫が秦惠王に建策した處であり、「遠交近攻」は范雎が秦昭王に説いたに始まる。共に西紀前三世紀の事に屬するが、爾來天下支那に襲用された外交公式であり、往々にして今日の國際世界にも慣用されんとする。惟世界は「天下」に比し其の境域が擴大された許でなく、其の質をも異にしてゐる爲めに「縱橫」外交、世界を煙に巻くにはまだ足らぬ處があるらし。

民國八年のパリ講和會議、十年のワシントン會議で當時まだ三十代の王、顧等青年外交家が世界列強を向に廻はして三千年來試鍊を経た蘇張の辯を振つたが、辯舌の雄麗なるに反し、效果の擧らなかつたのは之が爲めだ。併し支那にとつて偶然な幸は武力外交が漸次世界から影を潜めつゝあること、及び支那に同情することの好きな日本が率先して關稅會議には關稅自主を、司法制度調査委員會の報告には領事裁判權撤廢を、原則として認めて以來、一九二六年英國の對支新自由政策の宣言となり、二七年首、米國及英國第二回の對支政策宣言となり、列強が各の立場から勝手に對支策を宣明することゝなつた爲めに、支那を秦とする列國の合縱が完全に破れた事である。これで支那自身は依然「天下」状態の下に低迷してゐるから、秦の霸業は固より問題にもならぬが、一時世界の視聽を驚かした國際管理論等がもう一度燃え上る心配は當分なくなつたやうだ。

## 七

要之支那は昔も今も天下である。而して其の支那を一の單位とする國際世界の出現に對しても「天下」の傳統を以て臨むことを止めない。



國民革命の指導原理は孫中山の三民主義に盡されてゐるが、其の三民主義は「世界大同」を終局の宏願とする。「大道之行也、天下無公、……是謂大同」は小戴禮運篇にある孔子の言である。此處で支那は古今と東西を超越する。天下と世界が再び一つの混沌に還へる。  
現代支那諸想の由來する所、茫々として遠きを想ふ。(昭和五年三月)

#### 四、現代支那の封建的諸相

「大公報」の社説——モリントンアサモリントン莫名其妙莫名其苦 地理的還  
境と歴史的傳統——特性 支那の交通通信 社會  
的聯繫の缺如 三民主義革命 漢楚と蔣馮 魚朝  
恩と楊宇霆

北支那新聞界で、一頭地を抜いてゐるものに、天津の大公報と云ふのがある。論調が比較的公正であり、徒らな空論はやらすに、實際的な力強さを有つてゐる其の社説は大公の名に背かぬものであるが、中に就て同紙の本年一月四日の社説が面白い。

……今日の中國人が、時局の動搖によつて受ける煩悶痛苦といふものは、他の如何なる國人も経験したことはないものである。蓋し如何なる國家も、其の時局の變化は、皆な或る程度迄は推測が可能である。白を主張するものは黒とは云はぬし、黒を主張する者は絶対に白は主張せぬから、時局が黑白何れかの一派に歸することによつて、其の將來が如何動くかを豫知し得るからである。處が、我が中國では、時局の變化は絶対に不可測であるばかりでなく、變化其のものが、頗る明瞭でない。白を主張する者が時に黒であり、黒と云ふ者が時に白である。白と白とが、時に分裂するかと見ると、黒と白とが提携だと云ふ。再三提携した者が、再三分裂し、再三分裂した者が、時に又た再三提携する。表面分裂してゐる者が裏面で提携し、表面提携せる者が時に裏面で分裂する。今日樽俎の間に談笑する者、明日は干戈を操つて相見え、既に干戈を操つたかと思ふと、又た樽俎寛談と來る。出來ないと云ふ事の

無い代はりに、出来上がると云ふ事もない。だから、一事件が起ると、表面に若干の裏面があり、裏にも亦た若干の表がある。今日は今日の表裏があり、明日は又た明日の表面裏面がある。只だ表面だけを知つて裏面を知らねば、又た表の若干を知つても、其の全部を知らねば、又た今日の表裏を知つても、明日の其れを知らねば……結局何處迄で行つても、推測が不可能だから、事件の變化が、明瞭になると云ふ事がなく判断の仕様が無い。かゝる時局の下に生活する人民は、全く朝夕を測ることが出来ぬ。青天白日の下、輒ち狂風驟雨の來襲に驚かされ、垂危援命の秋、又た起死回生の望が生ずる。忽ち悲、忽ち喜、モリシチイアオ莫名其妙、モリシチイナ莫名其苦……

で、かゝる謂はれなき「莫名其妙」な時局を報導する新聞記者の奔命は、全く徒勞であると嘆聲を發してゐる。

實際最近僅か一年間の時局に觀ても、蔣馮閻唐以下、大小將領の中の何れの一人の踪跡を逐うても、結局は不可測以外に、如何なる結論をも握ることが出来ないのは事實だ。併し此の莫明其妙な現象は、千九百三十年に突然出現したのではなく、幾千年來の支那の歴史が曾てあ

りし如く、偶々今も此處で渦を巻いてゐるに過ぎない。只さう觀る事に依てのみ吾人は此眼前の現象を理解し、解釋することが出来ると思ふ。

二

或る特定の社會は、其れが生活する疆域の地理的制約と共に、其の社會生活の連續、即ち歴史の制約をも受けるもので、之等の外的條件が甲を乙と區別する特性を附與するものであると思ふ。日本と云ふ細長い島國の有つ種々の條件——氣候、風土、地震、森林等々が日本に木造家屋の發達を促したものであらうし、疊にはキモノと下駄とが最も便利であることを、吾々は知つてゐる。

君が襦袢を脊廣服に着換へたからと云つて、俄かに歐米人と同様な自然なる態度と心持で握手や接吻が出来ぬと云ふのは、君の瞳が、鼻が、腿が彼の如く碧く、高く、長くないからではなく、日本と云ふ疆域の上に積み上げられた二千六百年の歴史的傳統が、生み出した君であるからである。一言にして云へば、日本人が他の如何なる國人とも異つた傳統を有つからである。若し環境や制度が人を規定すると云ふならば、其れに變化の無い限り、人にも亦た變化が起

き得ないであらうことを推斷することが出来ると思ふ。

今、地理的環境に就いて観るに、黄帝開國以來今日迄、支那の地理的諸條件は、大體に於て全く變化してをらぬと言つていい。只だ最近四五十年來、歐米から輸入された機械文明の發達による交通通信機關の現代化によつて、人爲的に支那の地理的條件は、幾分改善されてゐるが、此等の文明が支那に與へてゐる影響に至つては、極めて微々たるものである。

現在では幹線鐵道として、長江と長城とを連絡する津浦、京奉京漢の兩線が、大體平行して南北に走つてゐる以外は皆な地方鐵道に過ぎない。

漢口を中繼として、北平から廣州に達する爲めには（約千五百哩）京漢粵漢兩線を利用して、粵漢の中段約三百哩が未完成な爲めに、十八九日を要するし、上海南京から四川成都に達する爲めには（水陸約千九百哩）長江可航時期に於ても、二十五六日を要する。

これ單に速度を示したに過ぎぬが、運輸能力に至つては更に低劣である。最近の事實に徴すれば京漢を直通する特急車なるものは、毎週僅に二回であり漢口以南は、三百哩の陸行が、非常な危険と不便とを伴ふ爲めに粵漢の聯絡は固より容易ではない。だから北、中支那の廣東に

行く者は、普通天津又は上海から海路を利用するのであるが、此の場合でも、北平から廣州迄十日以上を要するであらう。滬寧成都間は重慶以西が、水陸共に非常な難行で陸行は總て人の肩に依らねばならぬから、大量運搬は殆んど問題にならない。

更に兵亂匪亂の爲めに、平原では汽車、江海では汽船が、運轉の中止を餘儀なくされることは、世間周知の事實である。若し夫れ新疆、甘肅、雲貴に言及するならば、固より同日の談では無い。

北平成都間の郵便は、普通三十日を要し、小包は二ヶ月を要する。昨年十一月末北平の國立地質調査所から、地質調査及測量の爲めに派遣された一人の有爲な青年科學者が、雲南で彼の擔荷夫から金品強奪の目的で殺害された事件があつたが、彼の死が特急電報で雲南から北平に達するに實に十二日を要したのである。これは千九百二十八年、コリヤーが彼自身の體軀を驅つて、世界を一週した時間の二分の一強に相當する。

民國十七年、革命軍の北上、北京政府没落の前後數週間に亘つて、京奉、津浦、京漢、京綏諸線が同時に不通となり、當時二百萬の人口を擁してゐた北京が、直隸平原の眞只中に取殘さ

れた事があつたが、其處に住む五人餘の外國人が、不安と不便との爲めに狼狽した以外、一般市民が混亂を惹起するが如き如何なる影響をも受けなかつた事實は、殆んど驚異に値するものである。

昨冬以來、ツイ數日前迄、中原の雜色軍の動搖の爲めに、南北を連絡する只一つの幹線鐵道津浦線が不通になつた位では、北平がビクともしなかつたのは云ふ迄もない、

北平だけに就て言へば、昨年十月末、人力車夫が電車を襲うて數十臺を破壊した爲めに、全城の電車が數週間停頓したが、北平人の受けた痛痒は、一匹の蚊が彼の頭に止つた程度のものに過ぎなかつた。

### 三

此等の事實は、支那の地理的條件が、極めて僅かしか機械文明の惠澤を受けてをらぬ事を明にするものであり、より一層重要な事は、支那を一の全體と觀る時、其の社會的——經濟上政治上の連繫と云ふものが、極めて薄弱で殆んど零に近い事を実證してゐる點である。

東京市の電車を、又は日本全國の鐵道を、僅か一日だけ停止することによつて、非常な混亂

を起すであらう日本人又は東京市民の常識を以てしては、到底支那の現象が理解されぬのは、此の社會環境の相違に起因するものが多いと思ふ。

此の社會的連繫が極めて薄いと云ふ事から、又た種々な奇怪な現象が生まれる。南京の統一政府に御構ひなく、大小將領が各自の地盤に據つて、勝手氣儘をやつてゐるし、露西亞が北滿で飛行機や爆彈を以て暴れまはつても、南京は案外平靜である。

河南山西をも加へた西北の大飢饉は、もう三年越になるが、國としての救濟方法は殆んど講ぜられてゐないと云つて宜い。只だもはや子女を賣らうとしても買手がない、鴉が飢えて、鐵砲を打たれぬのに空から獨り手に落ちて來る、關中道中、人相食む……等の記事が誇張はあらうが徒らに毎日の新聞面を埋めてゐるに過ぎない。

現在の支那が機械文明の惠澤を受けてゐる程度が、如何に少いにしろ、兎に角、電燈、電話汽車、汽船の無かつた時代に比すれば、五十年來の發達は相當素晴らしいものである。一尺玉の煙花を三つも打上げると、一個中隊が潰走するやうな時代は、既に業に過去である。自動車も飛行機もラヂオもある。而して遠き將來、然り——支那最初の機關車ロケット・オヴ・チャイ

ナが、唐山で運轉されて以來、正さに五十年である。此の間に支那の造り上げた鐵道は約五千哩（便宜上東三省のものは京奉線だけを加算）であるが、今後二倍の速度を以て鐵道が敷設されるものと假定し、平均二十五年間に、五千哩を増設する計算にしても、十萬哩が完成する爲めに、彼れ此れ五百年を要する——遠き將來、五百年もの將來には孫中山の十萬哩鐵道計畫も實現して、大いに面目を一新する時機も來るであらう。

茲で注意せねばならぬ事は、假令今後の支那が、廣く機械文明を彼等の生活に取納れたとしても、支那の特性の變化に與へる力は、極めて薄弱且つ緩慢であるであらうと云ふ事である。

今日では機械文明の惠澤は萬國共通である。一の民族を理解する爲めには、他民族との共通點は相殺しなければならぬから、萬國共通の機械文明は、當然無條件に相殺される。相殺し切れぬものが彼の特性である。特性を把握せずして、彼を理解することは困難であらう。

支那の如き、五千年の古い歴史を有ち尤も特色ある文化——思想、制度を有つ民族にとつては、特に然うである。此處では新思想の流入さへも、非常に困難である。其れを其の儘に受け容るべく、餘りに傳統、社會事情が違ふからだ。其處でマルクスや、レニンの影響にも不拘「支

那獨創」——支那人一般には通用しないと云ふ意味に於ては「孫中山獨創」——の三民主義と云ふ「國民革命」の方略が發案されたし、國民革命の進展に功績のあつたポロデン等を、途中から放逐すると云ふやうな皮肉な喜劇も演ぜられたのである。

で共和革命が燒直ほされて、國民革命となつたからと云つて、對外國觀の變つた點——國民革命を意義付ける重要な點ではある——を措いては、五色旗が青天白日旗に變つた程に明瞭には國情は變らぬ。少くとも彼の有つ特性は、依然として變はり榮えがせぬ。

四

西紀前二百年頃の事である。漢王劉邦は當時の諸侯韓信彭越と協同して、楚王項羽を攻撃する約束をしたが、韓彭期日が來ても一向に約束を履行しない。元來膽玉の小さい劉邦は思案の揚句張子房の建策を用ひ、彼等に廣大な地盤の提供を約束したものである。すると彼等は掌を反へすが如く、兵を漢王に合せ遂に項王を垓下に破つた。

地勢からは、却て逆だが、蔣主席を漢王、馮玉祥を楚王とせば、差し詰め閻・張・何・陳其他の雜色軍を韓彭に比擬することが出來ようか。又た韓復榘、石友三等の向背進止に至つては更

に逆踏すべからずであるが、其の態度の豹變が、決して義理に一貫したものでない事は、餘りに明白な事實である。

買収によつて向背を三四にすることは、漢に始まつた譯でなく、春秋時代からの公式で爾來二千六百年、統一が弛るみ、群雄が割據する時代には、必ず起る現象である。

一九二八年、北京の張大元帥が奉天落の途次、皇姑屯で嘶のやうな奇想天外な最期を遂げた年の暮である。一夕、奉天は東三省總司令府から、電話があつたので、楊宇霆、常蔭槐は自動車で驅付けた。張公子は徐ろに口を開いて、世界中で一番六ヶ敷し相談を持ち掛けた。「外でもないが、其の君等の命を貰はねばならぬので……」。「イヤ御易い御用で」と、二人が謂つたか否かは知る限りでないが、十數分の後に、無残に射殺された二つの屍が、庭前に横つたのである、翌日屍は各遺族に引渡され、丁重にも數萬元の喪葬費まで賜はつた。

西紀七百七十年、唐大曆五年の三月、睿宗は或る意圖の下に、禁中に貴近を招いて酒宴を張つた。寵任並ぶ者なき魚朝恩が列席しない筈はない。宴後睿宗は朝恩を禁中に止め、左右をして擒へて殺せしめ、遺族には自殺であると稱して、其屍を引渡し、喪葬費六百萬錢を下賜された。

れた。

二十世紀が八世紀と違ふ點は、電話と自動車とピストルと云ふ文明の利器が使用され、銅錢が銀元に代つただけである。

## 五

世界の大事と云ふ漠然とした潮流に乗せられ、新支那の形式的方面の推移を逐ふに急にして幾千年來の歴史的傳統を顧慮するに迫らず、文化系統も、社會事情も、全然違ふ頭で練られたイデオロギーを持ち來つて、支那を解釋せんとする試みは、恐らく失敗に終るであらう。

「支那とは何ぞや」の課題に對しては、「支那は支那なり」と云ふより以上に、適切な答案は得られない。さうして、この答案は、支那の歴史的傳統をもう一度検討する以外には、理解の方法が無いやうに考へられる。(昭和五年四月)

五、女 男 平 等



女子の男装 漢口市長の細君 西北軍の女子軍  
女學校の軍訓 政界の女流 最初の女縣事 男  
女平等主義の新民法 法文と實際 男女共學 密  
司の優越 職業婦人 「女招待」 國民會議代表選  
舉に對する婦女團體の請願 北平女師大學生の宣  
言

「女子と小人」 司馬相如と卓文君の戀愛結婚

畜妾制 則天武后 山陰公主

明の正徳中、中原を横行した流賊劉兄弟、齊彥名、趙瘋子等を産み尙武勇俠を以て鳴る河北  
文安に住む友人の報道によると、北伐革命後男女平等思想が頗に擡頭し、此の剛健質實な郷村  
にも社會運動のポスターが現はれるに至つたが、此處では男女平等では最早満足出來ず、之に  
代ふるに「女男平等」の新語が發明されたとある。

女男平等。

何と示唆に富む詞であらう。此の一詞の裡に吾々は現代支那青年の思想及運動の傾向及び深  
さ(或は淺さ)傳統的民性をさへ味ふことが出来るやうに思ふ。

共産黨と合作した國民黨左翼の武漢政府が倒れ、唐生智が幅を利かせてゐた頃である。漢口  
から上海への汽船南陽丸の食堂で唐生智の壓迫から逃出し、窃に下航の途中にあつた現任漢口  
市長劉文島君は食後の徒然に同卓の船客の爲めに一場の笑話を語つた。

過日某日本人が武昌の軍營に自分を訪ねて來た時、多忙の爲め暫く秘書を代見させた、秘  
書は軍服を着ピストルを腰に正規の軍装をしてゐたのだから、自分が秘書に代つて面會した處

が、其の日本人が今の秘書のことを「こんな眉目秀麗な美少年が軍務に服することが出来るのか」と質問したから「否、少年ではなく、自分の妻である」と説明をしたが、却々彼は其を信じないのです云々。

其は民國十六年（昭和二年）十二月四日の事で、黄興の遺子一歐君も同船してゐた。劉君は日本士官學校の出身で後佛國に留學した文武兼修の紳士、細君も佛國出身のまだうら若い麗人であるとは彼自身の説明である。

十七年夏、革命軍が北平に乗込み皇姑屯の悲劇を大團圓として所謂北伐革命が一段落を告ぐるや、馮玉祥の西北軍に屬する武裝した娘子軍が北京の大街を肩で風を切り乍ら濶歩したもののだが、彼等の數人は入浴の爲めに暴力を以て某錢湯を占領し（北京では一の錢湯が男女兩浴槽を設備することが許されず、現に女湯は只一軒）男客に締出しを喰はしたと云ふやうな珍劇もあり、一時は北京の大男の心膽を寒からしめたものである。

十八年の春、馮玉祥の本據河南開封では例の藍布洋式男裝の女子を街上に散見することは珍らしくなかつたし、農村自治訓練處の學生は男女共、同一服裝であり一樣の學校生活と訓練と

を強要されてゐたのであるが、女子の斷髪は男裝より遙に早く普及されてゐたので、新來者にとつては此處の學生の男女識別には特別の注意を必要としたものである。

南京政府の統治後、大學専門學校には強制的に軍事訓練を課することとなり、日本の軍教の如く現役將校が之を擔當し一定の學生軍服も規定されたが、時潮に投合してか、青年の好奇心を煽つてか、日本とは反對に一般學生に受けられ、清華や燕京の如きブルジョア子弟の多い大學では軍服が非常に吟味されて、本者の士官や將校のものより遙に上等のものである許でなく其の様式が酷似せる爲め識別が困難となり、到々軍隊から抗議が持込まれるに至るが、當時の軍服大學生はモダン・ボーイの最も氣取つたタイプとして青年女子の人氣を呼び一時の風尙となつた。

北平大學の女子師範學院の學生が矢張り同様な軍裝で軍事訓練を受け、山西軍參謀總長で時の北平市長だつた張蔭梧の檢閲を受けたりしたのも、其頃のことである。

以上は主として形の上に顯れた男女同裝の諸例であるが、此等は未だ軍政期を脱け切らぬ所謂國民革命の破壊工作の過渡期に於ける軍事的威力に刺戟された好奇の一時の風尙で、必ずし

も男女平等思想の顯現ではなく、むしろ形式に拘はれ皮想に趨り易い支那人性の片鱗と見る方が妥當かも知れない。



政治的方面では孫中山未亡人宋慶齡、汪精衛の陳璧君、馮玉祥の李德全、故廖仲愷の何香凝、蔣中正の宋美齡、張學良の于鳳至それから故郭松齡の潘淑秀等は誰でも知つてゐる女流の錚々であり、皆夫君との關係に於て相當な役割を演じてゐる。併し一個の女性として、男子との對立に於て果して幾許の氣を吐き得るか。彼等に比すれば鄭毓秀が李石曾等の援引に負ふ所ありとするも、兎に角學問と革命工作の功勳とによつて國民政府に重要な地位を築き上げたのは尙ほ異色とすべきであらう。

民國十五年(大正五年)初夏、北京西郊香山の甘露旅館に於て漫遊中の内田康哉伯、江口定條氏等の爲めに歡迎の宴が開かれた。趙爾巽、寶孫琦、熊希齡諸元老、時の總理顏惠慶、芳澤公使を始めとし日支朝野の名流四十餘名を前にして、唯一人の女性朱其慧が主人役として堂々たる歡迎の辭を述べ、一座の男性を壓倒したものである。彼女は夫君熊希齡と共に北京に於ける

社會事業界の重鎮であるが今では數人の孫女を擁してゐるから年老ひたる「新しき女」の代表と目すべきであらう。(彼女は昭和六年八月下旬物故した)。

近頃中國最初の女縣知事として日本にも紹介された郭鳳鳴は、國民政府統治後民國十七年冬であつたか、河北省で行れた最初の縣知事資格試験に應じた女性七人の一人で、應募六百餘名の内、初試中試後試の三試験を見事パスした百餘名の中只一人の女性である。

合格者は其後一年間訓政學院で地方行政官として訓練を受け知事に缺遺のあり次第補任される事になつてゐたが、其後の政局の變化等に禍され實際知事の要職にあり付いた者は、そう澤山はなかつたらしい。女士も亦知事の現職に就く機會を恵れず、今は候補知事の資格のまゝ天津市黨部婦女指導員に就任せる傍、天津婦女文化促進會を組織して自ら其の幹事に納まり、婦女界の新進として女權の伸張に専念してゐる。(一月廿九日の新聞によると郭女子は市黨部には婦女指導委員の辭職を、促進會には二ヶ月の休暇を申出た。表面は妊娠七ヶ月を理由としてゐるが實際は婦女運動に對する社會の理解同情がないのと、婦女の自覺が足らぬ爲めに婦女運動の效果に疑を持つに至り嫌氣がさしたからだと傳へられてゐる。)

支那の國民革命は大が、よりな水平運動である。對外的には不平等條約の撤廢を、對内的には封建的階級の打破と共に男女の平等を要求するものである。だから革命の進行中貪官汚吏土豪劣紳の名目で法外の制裁を受けたものが尠くなく、又上流家庭の子女にして遺産繼承の訴訟を起すもの、女子から離婚の請求をなすもの等、紛々として傳統的社會制度に大きな動搖を與へ、政府は暫定規則を設けて一時の急に應じてゐたが、最近國民政府も稍安定するに至り、昨年十二月十二日新民法五編を公布し、親族繼承二編には大いに男女平等主義を取入れ法規の上に之を確定するに至つた。

立法院長胡漢民が十二月下旬同院の記念週に於て、親族繼承二編中の家族制度規定の意義についてなせる演説によつて、吾々は男女平等主義の立法精神を窺ふことが出来る。

一、未成年子女に對する父母の權利義務を規定して其の權利に制限を加へ、一般的に子女を父母から解放する。

父母は未成年の子女に對して保護及教養の義務があるが、其の權利を濫用する時は親族會議が之を糾正するか裁判所に請求して其の權利の一部又は全部を停止することが出来る。

未成年子女の特有財産は父又は母が管理すべく、子女の利益に非れば之を處分する事が出来ない。

成年(二十歳)に達したる家族、又は未成年なるも已に結婚せる者は父母と分居することを請求する事が出来る。

一、成年男女は結婚の絶對自由が保證される。

未成年者の結婚は法定代理人の同意を必要とするも、正當の理由なくして同意せざる時は親族會議の決定を請求することが出来る。

一、男女の性別による一切の制限を排除する。

出嫁と否とに不拘、女子も父母遺産の繼承權を確保される。妻の制限行爲能力者たることを否認する。

離婚條件は男女同等となし、夫妻双方共貞操を守る義務があり、妻子の財産獨立權を認め、單獨的夫權の存在を否認して父母は共同して其の親權を行使するものとし、其他種々の權利義務につき親等の相等しきものは男女の性別によつて何等軒輊する處がない。等々。

之は大清律例の(一)祖父母父母存命中は子孫は分財別居するを許さず(二)結婚(嫁娶)は祖父母父母之を決定す(三)夫は妻に對して「七出之條」等の理由を以て離婚し得るが妻は夫に對して如何なる場合も離婚を請求することを得ず、等の男尊女卑的宗法家族制度の根幹を完全に顛覆するもので、妻子は家庭から、女は男から解放され、男女平等が國法によつて確保される事となつたもので、此の意味では正しく革命的新民法ではある。

尤も數千年の傳統を有つ社會慣習は政治形式の變革などとは異ひ、そう短兵急には變移し得るものではない、だから新民法の公布とは全然別個の事實として新政府の大官や將軍が舊家庭制度の裡に立籠り、公然第何夫人の存在等が許されてゐるとしても、遽に咎める事を要しない支那である。(九月物故した國民政府某最高官吏が六人の妾を養つてゐた事實が報告されてゐる)



支那の男女平等思想は云ふ迄もなく歐米留學生の實踐的モデルと共に輸入されたもので、傳統的思想及制度からは著しく縁遠いものであつたが、辛亥(政治)革命、國民(社會)革命の二回に亘る陶冶を經、時潮に押されて加速度的發展を遂げ、此の二十幾年の間に於て支那式の特徴

と色調とを帯びて來たのも亦自然の成行である。

大學専門學校高級中學等が男女共學を實行したのは既に十餘年の歴史があり、女子の大學教授、中學教員、女學校長等、婦人が男子と同等の地位に進出して來てゐる例が少くない。北支那でも最も保守的と看做されてゐる山西省では女子には女學校長の地位すら開放されなかつたので、社會的活動を志す女子は北平か南京かへ乗出す外は無いと、民國十七年太原で脾肉を嘆じてゐた劉英荷女士(東京女高師出身)の如きも、民國十九年には自ら山西省に於ける唯一最初の女學校長に就任するに至つたし、十九年春北京大學の學生辯論競演大會に於て、十人の男性辯士と共に壇上に送られた紀女士は、豫選決勝共最高點を得、遂に優勝トロフィを獲得して、女性の爲めに萬丈の氣を吐いた。(紀女士の演説は滿洲問題を取扱つたものである。——中國には滿洲と云ふ所はない。日本が中國行省の一部たる東三省を做ら「滿洲」と呼ぶは中國の主權を侮蔑するものであり、帝國主義侵略を掩蔽せんとする偽稱的詐術であるから、吾々は迂闊にだまされぬやう注意せねばならぬ——) 民國十六年の冬であつた。中學の男女共學は風義上面白からぬ事件等が発生して教育上支障を來さぬかとの質問に對する杭州の省立中學某教師の回答はこうである。

過去の経験からは其の懸念は無駄である、恐らく双方の自重によるのであらうが一般に女性が高くとまり、男性同輩をあまり相手にしない。だから學生間には問題は起らぬが、女生と男教員との間には交渉が起き勝であり、現に戀愛問題を引起した事實も一二ある。

少數の女性が多數の男性に伍して却て自ら優越を感じ社會も亦其を怪しまぬと云ふことは吾々に理解し難い點であるが、元來男女平等の思想と實踐とが主として留米學生等によつて移入された關係や、かゝる事實は支那歴史に於ては破天荒な事柄に屬する爲め、自他共に此等女性を尊敬すべき先驅者として取扱はねばならぬと云ふ社會的考慮が自然に女尊的空氣を醸成したものであらう。

此頃の大學生は同輩を呼ぶに一般に蜜司——蜜司塔を用ひる。而して娼集する多くのミスターの内に少數の蜜司(蜜司は女性の代名詞に用ひられマダムをさへ區別しない場合が多い。)が「皇后」の如く昂揚する。其は「力」の優越に依つてミスターがミスを庇護するものではなく、ミスの優越に對してミスターが媚を送るに似てゐる、其は男女平等以上のもの、女男平等である。



開港場の外國商館には、早くから極少數の支那女性が職業を得てゐたらしいが、彼等の生活は

支那社會とは没交渉であるから、支那女性の開放運動には何等の地位をも有たぬものである。

革命政府部内に最高ではあるが虚しき名目を擁する前掲少數の特殊女性、官吏及女教師、女生等を除いた狹義な職業婦人に至つては、其の進出は到底未だ問題になり得ない。

北京では王府井大街を挟んで東安市場前に五一五公司と云ふ小規模な百貨店があつた。之は賣子は勿論、支配人、會計係等一切の經營を女性の手で運行しようとする支那としては驚異すべき試みであつたが、一般社會の理解が足らなかつた爲め、經營面白からず十六年の末に倒閉の止むなきに立至つた。

國民政府の統治後又女子の社會進出が促進され、其の時潮を看取した慧眼な商賣人はマネキンとして女子を使用するの得策なるを覺り、北平第一の盛場東安市場の中興樓、前門の同福居等比較的ハイカラな飯館に數名の「女招待」が現はれ、彼等の未熟なサービスにも不拘、全市の人氣を煽り相當の客足を奪つた爲め「女招待」は茶館、飯館、旅館等到る處に雨後の春筍の如く出現したので、市政府は風紀の紊亂を慮り遂に當分女招待雇傭申請に對する許可を停止す

るに至つた程である。

尤も彼等の急速な進出が一般社會の氣持とびつたりせぬ處のあるのと、木偶ガールとしてのマネキンの効果はあつてもサーヴィスの未熟が客の満足を買ふに足らぬこと等から見て「女招待」の職業圏を確立するにはまだく相當の距離あるやうに考へられる。

假令又日本に於けるが如く、支那全土の飯館、茶館、旅館が悉く女招待になつたとしても其自體は男女平等に幾何の意義を齎すものでもない、家庭から解放されても今度は社會の新らしい桎梏に拘へられて了ふ、其は當然將來の婦女解放運動のより深酷なる對象として残されるからだ。



形式に墮し易い支那人の通有性は男女平等を單に女男平等と言換へるだけで満足しようとする傾きがあるので、文字の上では相當普及してゐても社會に於ける女子の實際的進出は極めて堅實味を缺き、力強さがないやうに考へられる。

本年元旦國民政府は五月五日に招集さるべき國民會議の代表選舉法を公布したが女子に就ては何等の規定がない。

立法者の見解に依れば男女は當然同等の權利を享有するものであるから、女子の爲めに特に規定を設くる必要を認めないのである。然るに例の候補知縣郭鳳鳴、王佳文、噶維華等を幹事とする天津の婦女文化促進會は市黨部に對して次の如き請願書を提出した。

……乃頃查中央頒布國民會議代表選舉法中、無婦女代表之明文規定、窃維中央對於婦女代表、不明文規定者、蓋將婦女與男子同等看待、任何團體之中、婦女皆可被選爲代表、尊視女權、蔑以復加、顧中國社會、以男子爲中心者、已數千年之先、加以在革命過程中、戰事迭起社會不寧、諸事發展、均蒙影響、致使十餘年來之婦女運動、仍未有顯著之成績、迄今大多數婦女仍在男子支配之下、論社會地位、既不能與男子抗衡、論活動能力、尤不能與男子角爭、以如此之婦女、混合於男子之中、共同選舉、將見國民會議席上無一女子、即有之亦極居少數此爲理勢之必然者、則不獨與中央重視女權之初意大相逕庭、而國民會議之結果、亦必因無婦女代表之參加、減低其功效、屬會在此種認識之下、深知於代表選舉法中、非有明文之規定、則不能選舉婦女代表、非有婦女代表之參加、則國民會議不能有最圓滿之成績……云々

(此の請願は政府の允許する所とならなかつたが國民會議には全國を通じ四名の女性が選舉された。)

又民國十八年(昭和三年)八月の事であるが、北大教授朱希祖氏は、男女の教育は平等である

べきだから、女師大學は男師大學に合併し女子も男子と同等の教育を受くべきであると云ふ意味の意見を高唱した處、女師大學々生會は却て憤慨し、全國教育界及各新聞社に宛て左の如き男女教育の平等宣言を通電したものである。

……吾等同學は夙に國民政府が法律上經濟上教育上社會上に男女平等の原則を確認して女權の發展を助長し、女子教育に對しても決して譚言によつて見解を二にする事なきを知つてゐる。惟然し中國は數千年來男性中心の因襲により、今日革命過程に在つても、仍ほ積弊を破除し得ない者がある。是を以て吾校同學等は履霜堅氷の旨に本いて突火徙薪の謀をなし豫め陳訴して態度を表明し、海内人士の注意を請ふ次第である。吾校同學は各大學の改組方法に就ては毫も具體的意見はない、惟大學院に希望する所は、改組の際に必ず男女教育平等の原則に根據し、あらゆる施設は男女兩校をして同等の地位に置かれる様にされたいと云ふ事である。若し名を改組に藉りて併吞を實行し、或は表面整理と稱して其實摧殘を爲し、女子教育をして改組によつて毀損を受けしむる様な事あらば、吾校同學は常に固有の精神に基き我國二億萬女子の教育の前途の爲めに奮闘し斷じて一切の不平等待遇を承認しない。……云々

之等は現在社會に於ける男女の地位を如實に説明してゐるもので、一方では「女男平等」で強がり言つてゐながら、他面自らの弱點を暴露して其の保護を哀願してゐるのは皮肉な矛盾であると共に、他のあらゆる言ひ分に見るが如き支那人らしい機會主義的な蟲のよささへ看取される。

確否は保證の限でないが、何香凝女士の最後の武器は泣くことであり、女士にすねられると國民政府の最高幹部も大抵陥落する外はないと云ふ。革命の貴い犠牲となつた廖仲愷氏の面子に免ずると云ふ心持もあらうが、結局「泣く子には勝たれぬ」のである。此の奥の手は併し男女の「力」の懸隔を益大きくすることにこそ効あれ、斷じて之が平等を促進する所以でない。

總じて現代支那の、男女平等の一般に叫ばれてゐるにも不拘其の實績の振はぬのは、恐らく此の男子の女子に對する敬遠にも基因するのであらう。

「女子と小人」を併稱した數千年來の儒教思想が、まだ革命支那の何處かに潜在してゐて、表面の粉飾は兎も角、男子の大部分が無意識に保有してゐる所の小人に對する君子大人の態度——野放しにした所で女子に何が出来るものとか云ふ見くびつた心持——が偶々男女平等運動に一



の排け口を與へてゐるものゝやうにも考へられる。

此の點では女男平等も案外心細い次第だが、兎に角政治、教育、家庭、其他凡ゆる方面に男女平等の原則が法律を以て保證されてゐるのは、其處に建てられる女權建築が何であらうと、基礎工事だけは完成してゐるものと見て差支なからう。

最後に歴史を一瞥しよう。

支那の歴史では女子の解放に關する何等の記録がない。只一つ史記(漢書)の司馬相如傳に卓文君との戀愛結婚の始末が相當詳細に敘述されてゐるが、太史公も班孟堅も相如の詩賦は論評してゐるが、彼の戀愛行爲には片言雙語も言及してをらぬので、史班兩氏の個人的及同時代の戀愛結婚觀につき何ものをも窺ふことの出來ぬのは千載の遺憾である。

然し歴史實錄に據れば、文君の出奔、相如との飄落が當時の社會に對する百パーセントの反逆にも不拘、結局社會も卓王孫も敗北して彼等の光輝ある戀愛の勝利に結着してゐると云ふことは二千載の下、微笑を禁じ得ざらしむるものがある。

今人作家郭沫若が戯曲「叛逆の女性」なる三部作に「卓文君」を拉し來つたのは眞に故ある哉だ。郭君の三部作は他に「王昭君」「弄妾」の二部があるが、前者では主人公は昭君よりも畫匠毛延壽の貪婪と不正の犠牲となつて朔北に身を沈めようとする昭君を救はんが爲めに、其の父に叛く毛延壽の娘淑姫を主役とするもので、此の點は史實に根據しない純然たる創作である。後者は弟弄政の「名譽」の爲めに姉妾が悲壯な最後を遂げると云ふ史實を取扱つたものであるが、「叛逆の女性」としては何れも其の迫力に乏しい。當代一流の作家が扱つた代表的な叛逆の女性が僅々此の三者に過ぎない事實を見ても婦女解放に關して如何に支那が少ししか史料を有たぬかを推量するに足ると思ふ。

「烈女傳」の如きに至ては僅に辯通、棄嬰二傳の稍異類なるを除いては要するに良妻賢母、烈女節婦の典型で男女の不平等をこそ實證するに足るが、凡そ婦女解放とは相背馳するものゝみである。

支那では古から「女子と小人」と併稱されてゐる程女はものゝ數にもされてゐない。易には「在中飽無攸遂」等とあり、婦人は家庭に在つて食膳を整へ主人の命に従つてのみ行動すべく

独自の行爲が許されないことになつてゐる。史記五帝本記の「嫫祖爲黃帝正妃」の索隱には皇帝立四妃象后妃四星とあり、堯は娥皇女英の二女を舜に妻はしたとか、天子一娶九女夏殷之制也等とあるところから見れば多妻制は歴史と共に始まつてゐたもので後世は終に宮女千百を以て數ふるに至つた。

宗法社會が自然に一夫多妻制を導き、蓄妾が一般社會の慣行となつた爲めに女子に對する男子の絶對的優越が制度付けられて了つた。

「史記外戚世家」に「衛子夫立つて皇后となるや、后の弟衛青字仲卿、大將軍を以て封ぜられて長平侯となり」衛氏の權勢並ぶ者がなく、天下之を歌て曰く「男を生むも喜ぶ無く、女を生むも怒る勿れ、獨り衛子夫の天下に覇たるを見ずや」云々とあるを見ても如何に一般に女子がものゝ數にもされてゐなかつたかを反證するに餘あるものがある。

尤も歷朝を通じ最高權力を把握した女子は男子の場合の如く其の慾を恣にしたものもないではない。北齊、武成の後、胡氏は太后となつてから二人の男子を比丘尼に變裝させて常に傍に侍せしめたと云はれてゐるが、變裝させた處にまだ世間を憚る心持がある。

唐の則天武后に至つては重臣懷義や易之を始めとして數人の面首(男妾)を公然蓄へてゐるが人主としての絶對最高の權力から看れば何等怪しむに足らぬ事でもある。惟最も驚嘆に値するものは、宋の廢帝子業(紀元四六五年)の姉、山陰公主である。宋書廢帝紀には

帝姉山陰公主淫恣過渡、謂帝曰妾與陛下雖男女有殊、俱托體先帝、陛下後宮數百、而妾惟駙馬一人、事不平均一何至此、帝置面首左右三十人、公主又以吏部郎褚淵貌美、就帝請以自侍備見逼迫十餘日、淵誓死不回、乃得免云々

帝が後宮數百人あるのに、自分が唯一人の駙馬(皇帝の女婿)に満足せねばならぬとは何たる「不平均」であるかと詰問し、到々男妾三十人をせしめたなどは實に古今無双、一九三一年革命支那のモダンガールも後へに瞠乎たらざるを得ないであらう。(六年二月二十日)

六、同文同種吟味

「日支親善」

同種の問題

同 文

文章——言語——文學——文化

パン 饅頭 うどん 言行二途

仁

沈氏の新解

大義滅親

王莽 則天武后

忠

逢丑父 荀息 解揚 魯仲連

屈原と肉弾

楚と日本

結

現在支那の巨頭 形式と實踐 不同文化

日 支 親 善

日支親善と云ふ詞は最近二十數年來日支兩國人士、殊に日本人によつて使ひ古ひされ、今や使用に堪へぬ程摺り減らされた感がある。

親善でなければならぬ、親善であり度いとは兩國の要望である、要望ではあるが曾て其の實  
が擧つたことがない、否最近は事毎に此の要望は不親善なる事實によつて裏切られてゐる。

親善の要望は不親善なる事實から生れたのである。何も中日兩國に限つた譯ではない、親善  
なる關係は世界の何國との間にも要望さるべきものだ、其が特に支那にのみ高調されたのは不  
親善なる事實に日本が惱されてゐるからだ。「親善」によつて相手をすかし、他面第三國に乗ぜ  
られる危険を防がうと云ふ焦慮と腹が見透かされてさもしい。然う云ふさもしい意圖を粉飾す  
るに「同文同種」はうつつつけの道具であつた。

普通人種學上からは支那と日本とは同種族ではないとされてゐるが、印度人の如く黒く、歐  
羅巴人の如く白くない點で此等の人種から區別され、均しく其の皮膚が黄色であることから、

常識的に黄色人種と總稱されてゐる。

日本で普通東洋と云へば歴史も地理も印度及支那との間に介在する諸國をも抱含する習慣であるが、カラーから看れば印度及其他と日支とは非常に異ふ。で大雑把に東洋人として西洋から區別し、黄色人種として白色及黒色人から區別する程度では、支那と日本とを同種と云つても常識的理解では差支ないと思ふ。

題して「同文同種」としたが、日支の「同文」と「同種」との二個の吟味を企圖しやうと云ふのではなく、茲には只「同文」についてのみ聊か吟味して見たいと思ふのである。

日本民族の源流についてさへ未だ定説が無い現状であるから、人種の問題は到底専門學者の研究に俟つ外はなく、且つ「同文」は有歴史記録以後の關係であるが「同種」は主として其以前であるから、此の場合同文の吟味は必ずしも人種の其と關連せしむることを必要としない。惟同文同種の四字が普通一の成語として世に行はれてゐるから便宜上此の四字を其儘此處に引用したまでである。

## 同 文

今日の世界に於て「同文」と云ふ關係は單に日支のみに限らず歐米にも多數ある。

英米兩國の如きは文字通り同文同語同種であるから日支の大雜把な同文同種などは到底足下にも寄り付けぬものがある。只等しく漢字國であると云ふ點で日本と支那とは他の如何なる國よりも特異な關係にあるものである。

一體支那の文字即ち漢字は世界の文字の内でも最も特色あるものと考へられてゐる。

日本の假名にしる歐米のアルファベットにしる皆標音符號で其の個々は何等の意味を有たぬものであるが漢字は全然其の趣を異にする。

漢字の構成は所謂六書と云ふ極めて複雑な關係に據るもので簡單には説明し兼ねるが、其の個々が獨立に特定の形象と意義とを有つてをり、即ち形義文字であると云ふ事が他の文字と根本的に區別される特徴で、文字は言語とは併行的な存在として各自別個の領域を有つてゐるのである。だから外國では語文を區別する必要がなく、同文は即同語であり得るが、支那では語文の一致する範圍は極めて狭く、數千年來大體語文は二個の併行的存在であつたから、同文即同語は成立たなかつた。況や日支に於てをやだ。

日支が同文だからと云つて誰も支那語と日本語とが同じであると考へる者はない、云ふ迄もなく全然別個なものである。だから頼山陽は漢文家である爲めに支那語を知る必要はない。「日本外史」は書いた者が日本人であり、書かれてゐる内容が日本の歴史であつても文章は漢文即ち支那文で、斷じて日本文ではない。「Fandito」を書いた者が日本人であり、書かれてゐるものが武士道であつても、其が英語で書かれてゐる以上英文であつて日本文ではないのと同じ事である。

日本文化は其の啓蒙時代から最近の開國に至る迄大體に於て大陸からの漢字文化によつて育まれて來たと云ふ關係から、古事記日本書記以下日本上代の主要な文獻記録は漢文と云ふ形式を採るを普通とし、其の漢文が日本獨特の發達をさへ示すに至つた。だから日本文化の發展途上に於て、又日支の文化聯繫に於て、漢文が最も主要な而して效果的な契機であつたと云ふことは歴々たる事實で、何人も之を否定する事は出來ぬのであるが、所詮其が漢文であつて日本文ではないと云ふ事實も亦確然分別さるべき筈であらう。

要之漢文即支那文と日本文とは異ふ、だから文章に就ては日支同文は成立たぬと思ふ。惟日

本文は漢字を借用してゐるに過ぎない。然らば日支「同文」の文は文章を意味するものではなく漢文字と解さるべきであらう。然し支那では語と文とが二個のものであり、其の文に使用される漢字の一部分を日本が借用してゐると云ふ程度のものであつて見れば、何も事々しく同文々々と高唱する程の事ではないやうにも考へられる。



「同文」が同文章でもなく、同言語では更になく、僅に同文字であると云ふこと、又其の文字も極めて限られたる數と範圍とに於て日本が其を借用してゐると云ふ關係に過ぎないと云ふ事が解つた。其の漢字は然し三千年來支那文化、換言すれば經書典籍の記録、儒教傳承の工具として今日に及び其の文化を日本も亦攝取してゐるが故に、同文は必然、同文化迄進展せざるを得ない關係に在る。其の文化は儒教思想を主潮とするが故に、一轉して同精神所謂東洋精神を意味することゝなるであらう。此處で始めて同文は最後にして、而して最も重要な理解に到達する。で同文同種とは、日支が種に於ては均しく黄色であり、生活が所謂東洋精神——儒教思潮によつて、指導規定され發展すると云ふ意味に理解されるものであると思ふ。

西洋の文化乃至文明を物質的、科學的乃至機械的と云ふに對し、東洋の其を精神的と對稱することは妥當な區別であるかも知れない。唯此處に一つの疑義を有つのは、日支の二個が西洋に對して同じく東洋であつても、所謂「東洋精神」と云ふ一つの詞の裡に包攝して同一の取扱を受くべく、日本と支那とはあまりに距離のある精神文化、生活傳統を固有すると云ふ事實である。

阿片戰爭によつて所謂禮教の神州、文化の中國が紅毛人によつて鼎の輕重を問はれて以來、先進文明國の所謂帝國主義的侵略の鐵蹄下に孫中山の「次殖民地」的境遇の慘苦を痛切に體驗した支那は、歐洲大戰後の世界的大動搖に刺戟され、俄然三民主義的國民革命の道程に躍進して來たので、政治的乃至經濟的提携では最早や日支協調の御題目は其の効力を失つたこと、一面西洋文化、物質文明は歐洲大戰と云ふ形態を以て其の行詰を暴露し、人類救済の資格試験に決定的敗北をしたと云ふ一般の見解とが兩々相俟つて、「同文同種」が一轉して東洋精神東方文化と云ふ詞に迄飛躍し、其が日支親善の新らしい契機として強調されることになつた。

大正十二年、出淵汪榮寶協定の成立により、日本の外務省に文化事業部なる一のビジネスが添加されたことも亦新語の流行に力を與へたに相違ない。

西洋に對して東洋精神と總稱するのは或は差支なからうが、其の東洋は日本精神と支那精神(若し云ひ得れば)とに嚴密に區別さるべきであると思ふ。

支那と日本とは異ふ、だから支那人と日本人とは異ふ。

孔孟の言行を記録した文獻は同一であつても、異ふ民族、社會は當然之が解釋を異にし、之が生活に現はるゝ形式を異にする。だから等しく儒教でも日本と支那とでは極端に相異なる精神と表現形態とを各獨創するに至つたのである。

西洋のパンと、支那の饅頭と、日本の饅頭と、均しく麥を材料とするが故に、パンと饅頭と饅頭とは等しいと云はゞ、勿論妄斷の譏を免れぬであらう。米から麥を區別するのはよい、饅頭と饅頭が同じく麥粉であると云ふ理由で混淆さるべきでないと思ふのだ。専門學者の所謂東洋精神、倫理、支那哲學等の解説は云はゞ麥粉の分析であるから、其が縱令如何に正確且つ精密であるにしても終に饅頭の全約を窺ふには尙ほ及ばざるものが残るであらう。同一の麥粉で

も異ふ民族の精神乃至文化と云ふ料理過程を巡る場合は、甲に饅頭であるものが乙には饅頭と云ふ形態で顯はれ、形態の相異のみでなく其の持味にも大きな距離が出来る。饅頭は饅頭として味得するでなければ支那の眞固の持味と云ふものは到底理解出来るものではないと思ふ。

以下圓い饅頭の持味が細長い饅頭のそれと如何に異ふかと云ふ二三の事實を引例して日支「同文」に一の疑義を提供して見度い。圓いのと細長いのと、何方が甘美いかは自ら別個の問題である。



一體支那人は文句が多い、子曰々々、あまりに某々曰が多過ぎる。是は然し必ずしも「曰つた」事に重きを置いてゐるのではなく、一個の竹簡には二十字内外しか刻めぬと云ふが如き往昔の技術的條件に制限された必然の要求から、最も簡潔勁直な問答式を採つたものであらうとの推測は恐らく大過ないであらう。

實際、「曰つた」事によつて何を「爲した」かを推測判断するに大した困難はなかつたし、孔孟以下許多の聖賢君子は彼自身の「曰つた」如く恐らく「爲した」であらうことも想像に難く

ない。唯然し「曰」は所詮「曰」で「爲」ではないから此の問答式は形式主義に墮し易く、從て實踐躬行の迫力を缺き、言行二途の併行的存在を些も不都合とせぬと云ふ結果を導いてゐるやうに考へられる。で支那では言詞と實踐との不一致が三千年來比較的 naturally 併存し、往昔の如く今日もあると云ふ事實は最も注目し値する點かと思ふ。

愍直な日本人は木偶の如く噤黙してはゐるが、孔孟一流の所謂聖賢の言に隨喜し、彼等の「曰ふ」を通り實踐躬行しようと努めるのを看ても、饅頭と饅頭との相異の一斑を想見し得るであらう。

大正十三年文化事業部が招待した支那學生の一團體が澁澤邸に茶菓に招かれたことがある。論語講話で有名な主人翁が同文同種の誼を深めようと云ふ心盡して輪語を援用した懇切な歡迎辭を述べたに對し、學生の代表が主人翁の言はるゝ通り我々は共通の精神文化、東洋道德を有つてゐるが、差詰め其の儒教精神に則つて例の二十一ヶ條を取消して貰ひ度いものだと堂々(へい)逆捻を酬ひたものである。主人翁の期待に反して座が白け切つたことは傍觀に禁へぬものがあつた。



昨年春、東光書院の學監が北平に來遊された。泰西物質文明の中毒症に悩む現代世界人類の救済は東洋精神文化に頼る外はない、其處で此の共通の精神文化を有つ日支が提携して東方文化宣揚の一大精神運動を起さねばならぬ、是れ實に天賦の使命である。此の人類救済の宏願に關して支那名流の賛助を得たいと云ふのが東光先生支那漫遊唯一の使命であつた。一日同道して時の河北教育廳長、現北平大學總長沈尹默氏を訪ひ會談時餘に及んだ。

子曰克己復禮爲仁、一日克己復禮天下歸仁焉とか何とか云ふ論語の講義から始まり儒教精神の宣揚を高調した身動きも出来ぬ程四角張つた東光先生の所論に對し、沈先生は却々だけた應酬である。

支那料理の内でも貴國人の珍重されるものに杏仁湯と云ふものがあるが杏仁の仁は種のことであり、桃仁と云へば矢張り桃のたねのことである。

北平の俗語に「麻木不仁」と云ふのがあるが神経が麻痺すると一切の感覺を失ふ意味で此の仁は「靈妙なる能」である。

小指の端位の杏のたねも、之に培へば立派な大木となり無限無數に實を結ぶであらう。

仁は宇宙創造の胚種である、其は無限且つ永遠に發展する性能を固有する。

仁は生命の連続である。甲乙丙一切の萬物を一の中樞に連結する宇宙の神經である……「生々不已」「日日新又日新」是れ仁の作用である。

支那は今日革命の過程に在る、今日の破壊は明日のよりよき建設の爲めだ。革命——生命の發展——即仁ではないのか。今頃骨董を昇ぎ出すことは止めて貰はう、其は却て不仁ではないのか。革命の過程と雖も我々の生活が正しき道德に據らねばならぬことは言を俟たぬ、盗や偽やは如何なる社會及時代に於ても認容されるものではない、必ずしも孔孟を煩はさずだ。否、孔孟をかつぐことは其が單に古いと云ふだけの理由でも現代支那民衆の輿望に反するであらう……。

沈氏は聰明にして高邁な學者である。蔡子民の校長時代から引續き十數年北京大學で「詩」を講じてゐた國學者で、政治家であるよりは、より多く詩人であると定評されてゐる彼から、此の仁の解説を聴くことの出來たのは種々の意味で興味深いものであつた。

右手に木劍左手は懷畢丸、羊羹色の紋付羽織の下で、ホウ齒の足駄がコンクリート歩道をカランコロン……日本の東洋精神の一面のスケッチである。これを日本精神と云ふのはいゝ、支那も一緒にして「東洋」と云ふべくあまりに本質的差違を感じる。

### 大義 滅親

扶風の功曹申屠剛、直言を以て對策して曰く「臣聞く……今聖主（漢孝平皇帝）始めて襁褓を免る。位に即きて以來至親分離し、外戚杜隔し恩通するを得ず。且つ漢家の制、英賢に任ずと雖も、猶ほ姻戚を援き親疎相錯り、間隙を杜塞す。誠に宗廟を安んじ、社稷を重んずる所以なり……」莽（王莽）太后をして詔を下さしめて曰く「剛が言ふ所は僻徑妄説にして大義に違背す」と。罷めて田里に歸へらしむ。（通鑑三十五卷）

姻戚を援き親疎間隙を杜塞するが如きは大義に違背する、大義は親を滅すべきものであるとは、此の場合野望を遂げんと企む王莽にとつては誑向きの辭柄である。

莽は劉氏を篡はんが爲めに此の聖賢の教訓を挾持したばかりでなく、彼自身に就ても亦之を實行してゐる。即ち彼は**大義の爲め**ではなく却て**無道の爲めに親を滅してゐる**のである。

紅陽侯王立は莽の尊屬（叔父）なり、平河侯王仁は素より剛直なり、莽皆太皇太后の詔を以て使を遣はして迫守し、自殺せしむ……。

初め莽の長子宇、莽が衛氏を隔絶するを非とし、久しくして後禍を受けんことを恐れ、即ち私に衛竇と書を通し、衛后に教へて上書して恩を謝し、因て丁傅の舊惡を陳じ、京師に至るを得んことを冀はしむ。……章いへらく、莽は諫むべからず、而れども鬼神を好む、變怪を爲して以て之を驚懼せしむ可しと。章因て類を推して説き政を衛氏に歸せしめんとす。宇即ち婦の兄呂寬をして夜血を持して莽の第の門に洒がしむ。吏之を發覺す。莽宇を執へて獄に送る、宇藥を飲みて死す。宇の妻焉子を懷みて獄に繋がる、産むを俟ちて後亦之を殺す。（通鑑三十六卷）

清の趙翼は此の事實を以て「此れ未だ攝に居らざる以前『**大義滅親**』の説に托して名を立つるなり」と評してゐる。

王莽は自ら其の叔父、其の長子を殺し遂に北海の蓬萌をして「三綱絶えたり、去らんずば禍將に人に及ばんとす」と嘆ぜしむるに至つた。

盜にも三分の理と云ひ、理屈は如何にも付く。天人共に許さざる惡逆無道を粉飾する爲めに此の場合王莽にとつては聖教は天下の珍什寶器である。曰く「大義滅親」。

之に對して「公周公の位に居り、成王の主を輔けて管蔡の誅を行ひ、親を親しむを以て尊を尊ぶを害はず、朕甚だ之を嘉す」と御追従の詔を下さねばならなかつた太后は悲慘である。太后の悲慘のみには止まらぬ、儒教——東洋精神文化の悲慘である、否、支那の悲慘である。

趙翼に據れば、唐の則天武后は「千古未有の忍人」である。王侯相將にして彼女の毒手に斃れた者のみでも數十百人、其の親子孫を殺せしもの數人、天理人道に背逆するものはより甚しきはな。

太子宏は即ち后（武后）の親子にして立ちて備貳となり、賢德天下に聞ゆ。其の蕭淑妃の女の掖庭に幽せらるゝ者の出で嫁せんことを請ひしを以て遂に之を惡み、又其の聰睿にして己に便ならざるを以て竟に之を酖して死す。宏既に死して其の弟賢を立てゝ太子と爲す。亦後の親子なり、又忌に觸るゝを以てして人をして其陰事を發かしむ。高宗其罪を薄くせん

欲す。后曰く「大義親を滅す。赦す可からず」と。乃ち廢して庶人となし、巴州に流す、後又邱神勳を遣はして通りて之を殺し、並に其子光順を殺す。僅に一子守禮亦宮中に幽せられ屢々扶せらる——(廿二史劄記卷九)

以上は偶大義滅親の四字が歴史に顯はれた部分であるが、此の外、義、公義等の美名が無道、不義の事實を隱蔽する一種のカムフラージュとして用ひられた場合は枚擧に遑がない。

### 忠

忠が義、信等と共に東洋道德の重要な根幹ことをなすは云ふ迄もない事であり、忠の顯現である具體的行爲が支那青史に陸離たる光輝を放つてゐる事實も非常に多い。但支那と日本とは同じく忠でも之が顯現の形態が相異なる事實が少なくないと思ふ。

支那史を讀む者は所謂聖賢の「言」を以て、史實として記録された「行」を解釋すべく、もう一度東洋精神——道德を反芻味得する爲めに屢々巻を擱いて低迷思索しなければならぬ必要を経験するであらう。

儒教の聖典と云へば所謂四書五經に止を刺す。二千數百年來權力者及智識者によつて正統な

教理として支持普及され、苟も字を識る程の者は猫も杓子も讀まねばならぬものとされてゐるから、此四書五經を聖典とする儒教が支那精神の主潮をなしてゐると看ても大過はなからう。それ程の聖典であるから漢儒の糟粕を舐むる日本の學者が金科玉條として珍重するのは言ふまでもない。

其の五經の一に春秋左氏傳がある。春秋は原來史實の記録であるが、之に王法を寓し褒貶を寄せたもので、所謂大義名分の史實的論評としての價值が、史書としてのそれ以上に強調された爲めに、終に名教の聖典として後世の準則——人を量る基本的標準と看做されるに至つた。だから吾々は中華三千年の史實を讀解する爲めに、其の尺度たる二百四十二年間の「春秋」を檢討しなければならぬのである。

左傳成公三年に、齊侯が晉魯衛曹の聯合軍との戰に敗れたので、從者逢丑父と互に服裝を換へて丑父を齊侯に仕立て、自らは從者に假裝して車を驅つたが、到々晉の將韓厥に追付かれる。韓厥は固より齊侯と丑父とが其の地位を易へてゐることは知らぬから、齊侯になりすました丑父は從者を裝ふてゐる齊公を逃れしめんが爲めに、車を下りて水を汲んでくるやうに言付け

る。これで齊公はうまく逃げ了せたが丑父は捕へられて終ふと云ふ一條がある。

此處迄は丑父の行爲は大いに日本人の心情にアツピールするが、其の後がドウも胃の腑に落着かぬ感である。

逢丑父、公と位を易ひ將に華泉に及ぼんとす……故に車を推すこと能はずして（韓厥に）及ぼる。……丑父、公をして下りて華泉に行き飲を取らしむ。鄭の周父佐車に御となり……齊侯を載せて以て免かる。韓厥丑父を（捕へて）獻す。郤獻子（晉の將軍）將に之を戮せんとす。（丑父呼んで曰く「今より其君に代りて、患に任ずる者無からん。此に（君に代りし者）一あるに將に戮することを爲さんとするか」郤子曰く「人、死を以て其の君を免れしむるを難からざるに、我之を戮するは不祥なり。之を赦して、以て君に事ふる者を勸めん」と。乃ち之を免す。

史記には齊太公世家に同一事件を次のやうに記述してゐる。

丑父、齊公の得られんことを恐れ、乃ち處を易へ、頃公右となる、車木に挂りて止まる。晉の小將韓厥、齊侯の車前に伏して曰く「寡君、臣をして魯衛を救はしむ。之に戯ると。丑父

頃公をして下りて飲を取らしむ。因つて(頃公)亡脱して去りて其軍に入るを得たり。晋の卻克、丑父を殺さんと欲す。丑父曰く「君の死の代りて、僂せられなば後の人臣、其君に忠なる者無からん」と。克之を舍す。丑父遂に亡げて齊に歸るを得たり。

自ら「俺は忠臣である、忠臣の生命が保證されぬやうならば、將來忠臣の志願者が無くなるぞ！」世にも笑止な言草であり、「言はれて見れば尤だ。否、忠臣を殺すなどは縁起でもない」と。日本人には誠に解し難い應答である。

忠の値段が幾錢幾厘迄も正確に算盤に計量される程功利的である。此處では大根、蕪と共に忠も一種の商品に墮し、其の値段は明に生命の其よりも廉い。如何なる高價な道德も生命には替へられぬ、「生命あつてのもの種」だ。生命のみが價値の基準である。其處で道德の絶對性が失くなり、形式に墮して「徳」の固有すべき權威が消滅する。これは「支那精神」の重要な特徴の一であると思ふ。

だから算盤に合はぬ忠は美德ではなく「愚」として却つて世人嘲笑の對象とされて了ふ。荀息の殉忠の如きは其の最もよき事例であらう。

荀息の事跡は左傳僖公九年にも、史記晋世家にも見はれ、其の記述も大同小異であるが此處には史記の簡明を採ることにしたい。

獻公亦病み、復た歸還す、病甚だし。乃ち荀息に謂つて曰く「吾、奚齊を以て後と爲さんとすも、年少く諸侯大臣服せず、恐らくは亂起らん。子能く之を立てんか」。荀息曰く「能くせん」。獻公曰く「何を以てか驗と爲す」。對へて曰く「死者をして復た生かしむるとも、生者慙ぢざらん、之を驗と謂ふ」と。於是遂に奚齊を荀息に屬す。

荀息相と爲り、國政を主る。秋九月獻公卒す。里克、重耳(後の文公)を納れんと欲し、三公子の徒を以て亂を作さんとし(先づ)荀息に謂つて曰く「三怨將に起らんとし、秦、晋之を輔く、子將に如何せんとする」。荀息曰く「吾は先君の言に負く可からず」と。十月里克奚齊を喪次に殺す……荀息將に之に死せんとす。或ひと曰く「奚齊の弟悼子を立て、之に傳たるに如かず」と。荀息悼子を立て、而して獻公を葬る。十一月里克悼子を朝に弑す。荀息之に死す。

荀息は先君に對する然諾を重んじ、終に一死以て其の所言を實にしたのである。然るに史氏は左氏に倣ふて荀息が獻公に與へた言質は事勢に聞きが故であり、惟だ言を食まざるを以て重しとなすが如きは愚の骨頂である、前言の失をとり返へし得ないのは玉の玼を磨き祛る以上の難事であるとする。

君子曰く「詩に所謂「白圭の玷けたるは猶ほ磨くべし。斯の言の玷けたるは治む可からず」とは、其れ荀息の謂か。其の言に負かず」と。(史記)

昏昧な獻公に従つて奚齊の後を引受けたのは、或は荀息の不明であるかも知れないが、主従の關係に於ては亦實に已を得ざる場合もある。彼の死は書齋先生所謂「君子」の批評を受くべくあまりに其の心境は同情すべきものがあり、其の行爲は悲壯ではないであらうか。

其の辭、重耳の托すべきなきを見て、敢て死せず其の母と共に踪跡を絶つて終つた、介子推の如きが大いに君子の推賞を博してゐる(左傳僖公二十四年)が如きは矢張り日本人には解り難い心情の一である。



晋來りて鄭を伐つ、其の晋に反きて楚に親しめるを以てなり。楚莊王宋を伐つ、宋急を晋に告ぐ、晋の景公兵を發して宋を救はんと欲す。(晋の大夫)伯宗晋君を諫めて曰く「天方に楚を開く、未だ伐つ可からず」と。乃ち壯士を求め解揚を得たり。(以上左傳宣公元年にも見ゆ)楚を誣き宋をして(楚に)降るなからしめんとす。(解揚)鄭に返る、鄭楚と親しみ乃ち解揚を執へて楚に獻す。楚王厚く賜ひ、與に約し(解揚をして)其言を反せしめ、宋をして趣かに降らしめんとし、三度要して乃ち許す。於是楚、解揚を樓車に登らせ宋に呼ばはらしめしに、揚遂に其約に負きて晋君の命を致し、曰く「晋方に國兵を悉し以て宋を救はんとす。宋急なりと雖も慎みて楚に降るなかれ。晋の兵今至らん」と。楚の莊王大に怒り之を殺さんとす。解揚曰く「君は能く命を制するを義となし、臣は能く命を承くるを信となす。吾が君の命を受けて以て出づ。死する有るとも隕す無し」と。莊王曰く「若の我に許し、已にして之に背きしは其の信安に在る」。解揚曰く「王に許し、所以は以て吾が君の命を成さんと欲したればなり」と。將に死せんとし、顧みて楚の軍に謂つて曰く、「人臣たるもの、忠を盡して、死を得たる者を忘るゝ無かれ」と。楚王の諸弟皆諫めしかば王之を赦して歸へらしむ。

晋之を併して上卿となす。(史記鄭世家)

逢父の如く解揚も亦安價に「忠」をかり得た。日本では多くの場合死——最高の犠牲を支拂ふ事によつて、始めて忠が生きているのであるが、支那では其が逆に忠なるが故に生命の安全が保證される場合が多い、解揚の如きは生命の保證のみならず晋に歸へつてから大臣に任ぜられてゐる。損のない取引である。荀息のやうに日本人に似た慈直だけではいけない、機智縦横生死の境に處して三寸の舌端能く敵を煙に巻く程の口辯の才が無ければ「忠」のフラインプレーは期待出来ないのが支那である。面白い對照だと思ふ。勿論支那の忠が悉く口才の忠である譯ではなく、義を成し忠を盡す爲めに「歸するが如く」死に就いてゐる事例も少くない、只其等の多くが所謂「君子」に顧られず社會の同情を博し得ないのが普通である。

日本人が好んで引合に出ず魯仲連、諸葛亮、岳飛、文天祥、方孝儒等の如き、固より一代の智勇忠信たるに相違ないが、吾々は動もすれば彼等の「言詞」の壯絶に魅惑されて無條件に祭り上げたがる弊がある。

班孟堅が「古今人表」に於て歴史に現はれたる重なる人物を、上上聖人より下下愚人に至る

迄九等に分類してゐるのは最も後人の興趣をそゝるものであるが、魯仲連は其處では伯夷叔齊、顔淵、子思、孟子、屈原等と共に上中の仁人に列入されてゐる。

史記列傳には魯連曰く「……秦即し肆に帝と爲り返つて政を天下に爲さば、連は東海を蹈りて死せんのみ、吾は之が民と爲るに忍びず」二十年の後「吾、富貴にして人に屈せんよりは寧ろ貧賤にして世を輕んじ志を肆にせん」等、其の言詞の雄壯なる日本の道學先生をして跪拜せしむるには十二分の宣傳價値はある。彼亦支那人一流の口舌の雄だ。一度舌鋒を振へば天下無敵、以て秦の軍を退かしめ、燕の將を自殺せしめて聊城抜かる。彼は機智縦横舌端風發の豪傑ではあるが、徳人を化する底の聖賢とは考へられぬ。

日本人は諸葛亮や文天祥の行跡を探究せずとも出師表や正氣歌に無條件に慟哭する純情を有つ。漢字の有つ形義と漢文の有つ韻律とは、何がなし東洋人に通る一種獨特の魅力があるものと見える。坊主に於ける經文の如く、經書は儒學先生の聖典であり一種の信仰をさへ湧かしめる。

此の意味では支那人はアヘン吸煙によつて肉體的中毒症を起す數千年以前、其の精神は既に

儒教の阿片中毒を起してゐたやうだ。アヘンが必ずしも悪いのではない、之を精神作興の氣付劑とせば、以て日本精神を創造發展せしむるに足り、投藥を誤れば遂に精神的中毒症狀を引起すに至ると云ふのみ。

### 屈原と肉彈

夫の離騷を看よ、悲愁憂國の血涙が凝て珠玉となり、切々肺腑を刺して讀了に禁へざらしむるものがある。奸臣の讒により誤られて遂に湖江の間に謫配さるゝこと前後十有九年(?)待ちあぐんだ楚王の勘氣終に直ほらず、悲愁憂悶の餘いみじくも自ら此濁濁の塵世と絶縁して了つた。この詩の如き神秘的悲劇こそ萬古流芳、彼の藝術に永遠の生命を賦へてゐるのだ。

淮南王安の離騷傳に「屈平之作離騷、蓋自怨生也。國風好色而不淫、小雅怨誹而不亂。若離騷者可謂兼之矣」とあり、國風小雅以上だと激賞してゐる如く實際古今の絶唱、千古の傑作であるに違なからう。惟彼の幽麗典雅な詞藻、婉轉曲折な筆致の裡にも吾々は反復丁寧な繰言の連續、自己辯解のまわりくどさに無關心であり得ない。支那料理の微妙な持味と共に、獨特のコツテリとした執拗さがあるやうである。茶漬にお新香、さつさと搔き込んでしまふ簡勁直截な

日本趣味とは少し違ふのを發見する。放蕩な夫に嫌はれた女房の有つヒステリックな佛なしとしない。併し流石は屈子である。所言の通り遂に「石ころを懐いて」汨羅に投じてしまつた。流風餘韻湖江と共に長し。

北京大學の有名な史學教授が文學史の講筵で屈原を説明するのに日本を引合に出したことがある。

彼は屈原を以て一世の愛國家であるとする。

愛國の熱情は發して「國殤」となり人心の振作に偉大なる効果があつた。——屈原之歌詩深入乎楚人之心。所謂「帶長劍兮挾秦弓、首身離兮心不懲。」故楚之亡也。百姓爲王負芻語曰「楚雖三戶、亡秦必楚」後陳吳發難、劉項亡秦、皆楚人也。歌詩之感人心可謂神矣——日本人は異常な熱血漢である、愛情のクライマックスに於ては往々にして「心中」と云ふ世界無類の形式を擇ぶ程超理性的であり詩的である。此の熱情が、君國の爲めに發すれば乃ち凝結して天下無敵の肉彈となり、此の肉彈が夫の難攻不落の旅順を陥れたのである、正に「神」



功と謂ふべきだ。

由來楚は感情的であり、屈子は其の代表的典型である。日本人も亦感情的であり、「心中」と「肉弾」は其の精華である、屈子の愛國の熱情は、實に肉弾を鑄出する日本人の其に酷似する。此の老教授は二十年前日本に四五年間遊學したことがあり、屈子を賛仰するが如く愛國民日本を讚嘆して止まない。

熱情的、超理性的、詩的な點では屈原と日本人と似てゐると云ひ得るであらう、併し離騒と肉弾と其の具體的發顯の如何に懸隔することよ。二十年間も執拗に回りくどく繰言を並べる根氣と聰明とは日本人の最も少く有合はすものだ。假令其の根氣と聰明ありとするも離騒の如き傑れた藝術を偽り出す技巧は原より缺くる處であらう。

### 結

一口に東洋文化と云つても日本と支那とが其の精神文化を如何に異にしてゐるかは右二三の引例でも略推測が出来ると思ふ。かゝる史實は際限無く引例することが出来るが、究局「支那と日本とは異ふ」と云ふ結論に到達することは同じであらう。

日支文化の相違は「支那民族性」の研究に俟つを最も適當とするが、其は他の機會に譲り今は單に史書通讀に際し心付きたるもの一二をノートして置くに止めた。

此處には極めてクラシカルなものを引用したが、支那は此のクラシックによつて數千年間歴史の陶冶を経て來てゐるから、其が古典的であればある程支那人性の見透を正確になし得る標準と見て差支あるまい。其は後人が倣はねばならぬ先人の御手本である。事實支那史は數千年來此の經史典籍を連綿として踏襲反覆する。だから吾々はこのクラシックだけを吟味し姑く堯舜から蔣中正迄の支那史を丹念に枚擧する煩雜を省略しても大して不都合はないと思ふ。

夫の馮玉祥を看よ。其の主(?)段琪瑞、吳佩孚に背いた彼は、今度は子飼ひの股肱韓復榘、石友三に背かれ、其の韓は又屢々蔣に背かんとし、石は屢々背き現に背いてゐる。而して背かれたるも背きたるも段、吳、馮、韓、石、蔣と各が其の生命の安全を維持してゐる許でなく、各の地盤に據て豪勢な羽振を見せてゐると云ふことは、支那ならではの觀れぬ素晴らしい展望でないであらうか。

王莽、武后が「大義滅親」を以て其の忍虐非行を理由付けてゐる如く、馮も亦其の屢次の倒

戈裏切を正當付けるに些も不自由を感じぬ。自ら周武王の倒戈に比擬して三千載の下革命の神を以て任ずるに躊躇しない。動もすれば理論に徹せんとする國民革命左派の首領汪精衛の如きでさへ武漢、太原、北平、廣東と僅々三四年の間、轉々分離合作、些も凝滞する所がない。巧妙な操縦士の高等飛行の如く左曲すると見れば乍ち右折し、昇るが如くして乍ち降り、落るが如くして復た止まる。正に天空無礙、手に汗を握る觀客のみ徒らに氣骨を疲らすとは何たる皮肉であらう。

又之を稗史小説に觀てもよい、近世白話文學の双壁として當今學者の推賞措かざる水滸傳、紅樓夢の如きも、其處に登場する人物の行跡と云ふものは日本の講談ものとは著しく其の色彩を異にする。

水滸は宋の中葉河朔を横行した盜賊宋江等三十六人の實録を影子として官場の腐敗横暴と、民間の之に對する反抗と任俠とを經緯に織込んだもので、一般に武俠傳と看られてゐるが、我々日本人の義俠觀念にアピールするものが極めて少い。

紅樓は家庭生活の地に男女關係を點綴したもので、あの浩瀚複雑な規構と入念纖細な描寫に

も不拘、唯一つの「忠」僕型をさへ發見することが出來ないのである。然いふものが一般社會に存在しないし、假令あつたにした處で一般社會から價值と興味とを認められないからであらう。



昔から法典とか制度とか云ふものが支那程形式が完備してゐたものも少いが、又此の完備せる形式が支那程少く實行されたものも少いと一般に考へられてゐる。此の見解は直ちに道德的規律に就いても適用さるべきであらう。「知恥近乎勇」「殺身成仁」「士可殺不可辱」等々、聰明にして洗練された雄辯が聖訓格言として孔孟以來「典籍」に溢れてゐる。文章はいくらもある、生涯を傾けても讀みきれぬ程源々として盡きない。惟其が支那では實行されなかつただけだ。形式の完備と實踐の缺如とを支那の諸法規制度の上には認むる者も、道德的規律の上には敢て言及せぬかに見える。道德律自體の價值を云爲するのではない、只其が實踐されたか否かについて開眼すべきだと思ふ。

「阿片吸飲すべからず」と文獻にあるからと云つて、誰も支那に吸煙者なしとは考へぬ。否、看板は「禁煙局」であるが其の下で阿片の「專賣」が官營されてゐることを知つてゐるであら

う。彼等が概して孔孟の如く雄辯であるからとて、四百餘洲が四萬々の聖人で埋つてゐるかの様に考へることの迷妄を誰も知てゐる。

我々は形式の完備と文章の華麗とに眩惑してはならない。



黄色いから同種であり、漢字を使用するから同文である。其以上に「同」義を推擴すると直ぐに「不同」に行當つて了ふのであるが、同文同種は、一切同等を、文、種の二端を以て代表せしむるかに習慣的に言做されてゐる爲めに、日支兩國は何等の努力も探究も須ひずに自ら完全に理解してゐるものであるとの自己陶醉に陥り易い。

兩國が最も相互に理解さるべくして事實は正に其の反對なるは、此の詞に拘はれてゐる爲めであらう。

吾々も亦日支兩國の親善を要望する、親善は相互の理解から出發しなければならぬ。敢て不同文化(社會)不同種(民族)を提唱して、所謂「日支親善」に新らしいスタートを見出さんとす所る以である。(昭和六年七月)

## 七、河南に於ける馮玉祥

- 一、緒
- 二、朝氣と暮氣 黨政一途 馮玉祥と閻錫山
- 三、服装の劃一 農村組織訓練所 國產品提唱
- 四、偶像孫中山實權者馮總司令
- 五、政治の一斑 獨裁專制 政綱
- 六、ポスターと標語 「河南」の強調 馮の願望 排日の強調 「革新樞聯」
- 七、軍隊訓練と救恤 勸勵會 「老百姓」の軍隊 「我們是爲取消不平等條約誓死拚命」 陳亡將士の救恤 烈士子女學校
- 八、社會政策施設 平民講演所 革命紀念館 農民招待所
- 九、民衆教育 平民教育處 開封婦女求知學校 圖書館 河南民衆課本
- 一〇、百 泉 蘇門山 植林
- 一一、袁世凱の墓 明孝陵と中山陵 袁墓と袁宅
- 一二、結 開封の風物 馮の人物 其の幕僚 北伐革命と北方支那人 蔣介石と馮玉祥

蔣の南京が中央政府とは云ふものゝ現に南京を否認する政府が廣東に成立してゐるし、張の東四省は形式は兎も角、實際は中央に對して獨立的存在である。

支那は依然として混沌状態に在る。旁觀者から云へば興味は此の混沌の裏に在る。此の興味ある支那に於て最も興味ある存在は馮玉祥でなければならぬ。

彼は今失意である。其の踪跡さへ明でないが、將來此の混沌に何等かの旋渦を捲起す最も大きな核心であるであらう。

本稿は昭和四年春河南遊歴の見聞録である。二年の間に馮も河南も混沌の裏に其の影を没した形であるが、彼の本質には恐らく變化はないであらう。

六年八月附記

一 緒

三月中旬から四月上旬にかけて十五六日間河南に遊んだ。陝西と共に河南は支那の中原である。一杯の黄土、一塊の瓦片にも歴史の滴が浸込んでゐる。初め桃の紅と柳の緑とを逐ひつゝ三千年興亡の跡を訪ねるつもりで出掛けたのであるが、一步河南境に入ると妙に慌しい空氣が冷やかに襲ひかゝつて追遠懐古的な悠暢な旅は出來さうにもない。

密偵、監視、禁足、護送、寫眞沒收等々、鄭州以西の旅は河南政府から、きつく禁止された

ので遂に洛陽へは行けず、開封鄭州の歸途、平漢鐵路に沿ふた新郷、彰徳に下車したに過ぎない。然し開封は河南の政治中心であり、所有る機關及び代表的諸施設は悉く此處に集中されてゐるから、單に開封を觀るだけでも新河南の理解には大して缺くる處はないであらう。

密偵の尾行は河南の名物であると説明した支那人の口吻から推すと、本國人も同様な監視は受けるものらしいが、濟南交渉解決前の事であり、何よりも湖南事件突發による軍隊の移動、馮の百泉から洛陽への出馬等に打つかつたので、特に彼等の神經を過敏ならしめたものらしい。

## 二 朝氣と暮氣

阿片、麻雀、賄賂等が醸成する頹廢的氛圍氣の裡に、亡び行く封建軍閥、腐敗官僚の姿を、支那人は形容して「暮氣」と云ひ、革命の道程、破壊、突撃に勇躍してゐる進取革新の氣象を「朝氣」と云つてゐる。

國都を南京に奪はれた北平は秋風落日の暮氣であり、南京の旭日昇天の氣運は正しく朝氣であらう。

所謂國民革命の建設道程に入つたと云ふ支那は全體としては朝氣であらうが、地方の情勢に

よつて其の程度を異にすることは、南京北京の對比によつても明瞭であるが、馮玉祥の新河南建設の策源地たる開封は朝氣の最なるもので、一步其の境に踏み込むものは何人も新奇なる空氣の充満に驚くであらう。

國民政府の憂患は地理的の全國統一が不完全であると云ふ點よりも、黨部と政府との圓滿なる協同に缺くる處ある點にあらう。

御膝下南京に於てさへも中央政府が市黨部の反對に懐まされたことは一再でなく、河北の如きに至つては諸勢力が錯雜せる爲めに、更に黨部に乘ぜらるゝ處が多く、張繼、李石曾を前にして公然打倒西山派、無政府派の仰山なポスターが、今も尙ほ都鄙の街額に散見される始末であるが、かゝる情勢の下にあつて只閩の山西と馮の河南とが黨政一致して、始んど完全なる統制の下に地方政治を運行してゐることは注目し得る。

閩の山西は民國肇立以來の歴史及び黄河が西南を劃り、恒山、太行の二山脈が北東を屏斷する天然の地形とが、自ら今日の山西を特徴付けるに至つたもので、太原が靜謐安泰の感は與へるが活氣に乏しく、消極的保守的なるに反し、河南黨政の一致團結は、馮玉祥獨特の統率力の

下に維持されるもので、苟も彼の意に満たぬものは一切假借せぬと云ふ力強い壓力が、息詰る程緊張せる空氣を迫出し、犇々として都鄙に浸透してゐるのを感じる。

現在の支那に於て「俺のものだ」と云ひ切る地盤を有つ者、山西の閻と河南の馮を措いてはない。均しく地味な北方支那人で江北支那の二大勢力であるが、山西の消極的、保守的なるに反し河南は積極的、草創的で、其の性格には極端に相背馳する一面を特有するから、馮を理解する爲めに、時に閻を引合に出すことは無用の業ではあるまい。

馮は天下の志を抱くもの、其の理想は大きい、生を大河長江の間に享け鹿を中原に逐ふ者、其の位の氣魄が無くて奈何する。

彼の河南經營は然云ふレンズを通して見ると一段の妙味がある。

### 三 服装の劃一

北伐革命後は官公署は勿論公共團體及び學校等迄一般に「機關」と云はれてゐるが、河南の各機關の吏員及び學生は、上は省政府主席大學校長より、下使丁に至る迄一様に藍布（藍色の綿布）で作つた洋装制服を着、同じ材料の烏打帽を被るのが原則とされてゐる。

軍隊の制服も總司令以下一兵卒に至る迄同様だが、藍色でなく鼠色であるので文官と區別される。此等の制服には位階を區別すべき何等の象徴もないが、只胸間に官職姓名を墨書した布（軍人は長方形、文官は三角形）を縫ひ付けてゐるので「貴姓」と云ふ套語や葉書程もある大きな名刺等を交換する手數を用ひず、相對すれば相手が何處の何者なるか一目瞭然である。

旅の恥かき棄てと云ふ心理は自分の身許が、旅では誰も知る者が無いと云ふ所から興る蟲のよい邪心であるが、河南のやうに名刺を胸元に縫ひ付けて置くことにすれば、荀子の性惡説を是認しても、其の弊害は或る程度迄防止し得ると云ふのもあらう、うまい思ひ付きである。只名札をぶら下げて歩く人間は、ナンバーを付けて駛る自動車と、急に隣同志になつたやうで服装の劃一と相俟ち生活と云ふものを無暗に枯淡にして終ふ。

開封城の東北隅には彼の有名な鐵塔に近く、中山大學、省黨部等と並んで一年間の訓練で農村指導者を養成すると云ふ農村組織訓練所があり、五百餘の男學生の外約五十の女生も收容してゐるが、其の女生は全部男生と同様、例の藍布の洋装制服で街道を濶歩してゐるのは殊に旅人をして瞠目せしむるものがある。此處の學生は男女服装を同じうするのみでなく軍隊に準じ

たる日常の起居も、凡て同等であり同じく毎週少くも四時間の軍事教練をも受ける。

馮は服装の劃一によつて上下の階級を打破した許りでなく、一部の女子を男装させることにより、新人の随喜渴仰する男女平等をば形の上では百パーセント迄實現し得た譯だ。

此の劃一された制服には其の腕に「我等は國産品を用ふべし」と印刷した白布を縫つたものが少くないが、其のポケットに万年筆の頭をのぞかせる程の者は、こんな野暮の裝飾品は付けてをらぬし、又付けてゐても都合によつては舶來品と雖も平氣で使用する、併しそれを自家撞着とは考へないことにする。

万年筆にした所が「毛筆だ！ そんな非科學的なものが又とあるか、然う云ふ舊習を打破するのが、革命ではないのか、革命は科學化を要求する……」言譯には窮する事を知らぬ支那人だ、日貨差押の反日會も新聞用紙が必要だとあれば紙類は大目に見るし、一日も早く濟南から撤兵せよと逼つた外交部長も、都合によつては今度は撤退を延期せよと來る。

河南とて支那に變りはない。

兎に角然し名札と一緒に主張をも胸倉にブラ下げてゐるのであるから、其の實行力は確かに

大きいと見て差支へなからう。

#### 四 偶像孫中山實權者馮總司令

中山門、中山大街、中山大學、中山圖書館、中山市場、中山公園、中山俱樂部、中山服、中山靴、中山時計……等々。河南に限つた譯ではないが此處は特に中山づくしが多い。主なる名稱に中山を冠するだけではなく、所謂機關の門壁は勿論、街上目星しい屋壁、墻壁には大抵中山の像がペンキで描かれてある。(建物を利用して標語や畫をペンキで大書することは馮の得意とする所)

偶像打破を其の「工作」の一とする支那の革命は今では却て孫中山を完全に偶像化して了つた。

中山の偶像は尙ほ恕すべし、最近滑稽なのは「黨」字の擬人化である、「黨」の字畫をわざ／＼人體の骨格に仕立て、其の骨格解剖圖のやうな人間が民衆の先頭に立つて、軍閥や帝國主義を突き刺すと云ふやうな圖が、南支には豈夫あるまいが、河南と云はず北方支那では到る處に散見する。

「以黨治國」とか「黨」の最高権とか云つても、其の黨が頭と手足があり飯も食ひ小便も垂れると云ふ人間に仕立てねば納得がいかなぬとは、訓政期の中華國民衆もチト心細い。

河南の中山張りは徹底してゐるが三民主義の標語ポスターは割合に少く、却つて馮總司令の誓詞が總理遺囑と並んで書かれてゐたり、單に「馮總司令曰く……」等とあるのも少くない。

馮の畫像も革命記念館を始め街上の門壁等到處に中山像と並べられてゐるが、かく地方の實権者が中山と並んで街頭に畫かれると云ふ圖は、南京北京は勿論、閩の山西でさへも見ることの出来ぬものである。

時には馮像に蔣閩の像がお付き合をしてゐるものもあるが、それが如何にも不自然で、馮玉祥萬能獨裁と云ふ周圍の空氣や佈置としつくりせぬのは強ち旅人のヒガ目ではあるまい。

河南では中山と馮總司令とが二個の尊像であるが、中山は既に死せる偶像であり、馮は生ける實権者である爲めに、彼の微笑を含んだ畫像や大書された誓詞や訓詞が、イヤに威壓的に民衆に響くのは勢ひ止むを得ぬ所である。だから此處では中山像や三民主義張りの標語と云ふものが如何にも、生氣を缺き、却つて馮の獨裁專制の擁護者として役立つかに見える。

國民黨の「天下爲公」に對し、閩は山西で「主張公道」を掲げてゐるが、馮には講釋せねば解らぬやうな抽象的文章は其の柄ではない。俺は人民に呼び掛ける、民衆利益の擁護者であると云ふ彼は、もう少し卑近な言葉使ひをする、「一文の錢も人民の膏血であるから、官吏は無駄費をしてはいかぬ……」

## 五 政治の一斑

閩が山西の王である以上に馮は河南の王である。

河南にも省政府があり其の委員があり主席があるが、政府は中央の意志に反しても馮の意に背く譯には行かない。彼の性格からしても、其の胸中に秘める天下の志を伸べんが爲めにも、合議制や委員制は最も愚劣な政治形式であるに違ひない。

彼は舊軍閥の如く獨裁專制であるが、其の施設は革命的であり、舊軍閥の遺習陋弊を悉く打破して、新規蒔き直ほしをやらうと云ふのであるから、それが過激にして新奇であるのは云ふまでもない。

革命は非常手段である。相談づくでは埒はあかない、武斷專制が要求される所以である。



河南は今馮によつて革命されてゐる「建設新河南」がそれだ、極言すれば河南にはまだ政治はなく革命の進行のみがある。

往年天下に論はれた鄭州を中心とする河南の淫風は、彼によつて根こそぎ吹き飛ばされ、私娼は影を潜め公娼は全廢された。僧侶尼姑は逐はれて、佛閣寺院は「民衆」の爲めの社會に開放された。「官公吏にして阿片を喫する者は銃殺す」とは禁煙局の佈告第一條であり、「青年の纏足女子と結婚するを禁ず」とは彰徳府の城壁に一里も先から讀める程に大書された河南政府の布告である。

近郊に百泉があるので有名な輝縣では、縣告示として「纏足女子の街上通行を禁止」してをり、唯一の民衆娛樂機關たる芝居小屋には省政府の布告が厳しく「好叫は演劇の妨害になるから以後は拍手のみにすべし」と貼られ、官署の應接間には馮の訓令「酒食の應酬を禁ず……」文化機關には「革命は寸陰を惜む、良友は其意を諒とせよ……」等が訪問者の注意を促す。總て先づかう云ふ調子で、人間らしい自由さが此處では小氣味よくも不自由にされてゐるが、誰も不平を云はぬのは馮の睨みがよく利いてゐるからであらう。

馮の政綱政策は各縣知事をして其の縣城や繁華な十字街等に立てさせてある石に刻した碑文を見るに如くはない。

「我等は斷じて貪官汚吏土豪劣紳を掃蕩驅逐する。我等は誓ふ、人民の爲めに最上級清廉な政府を建設し、水害を除去し水利を興し、道路の修築、植林、其の他各種の有益事業をなし、教育、讀書、識字に萬人が均等の機會を享けんことを期す。我等軍隊の訓練は人民の利益を謀ることを標準とするものであり、我等の軍隊は人民の武力である。民國十六年 馮玉祥」

爲政者が施政方針を石碑に刻することは、最近では閻に創つてゐるもので、山西では數年前から到る處「閻告示」の碑示を見ることが出來た。

馮が閻を模倣したか如何かは問ふ所でない、只馮のものが閻のよりは卑近具體的であり、従つて力強く響くのは争はれぬ所である。閻のが到底訓示であるに反し、馮のは文章も口語體で愚夫愚婦にも理解し易く、且つ動もすれば政黨が政權の代價として支拂ふべく民衆に約束する政策の口吻なしとせぬが、それにも拘らず矢張り言葉に壓力を失はぬのは最高の「力」を彼が

把握してゐるからである。

此の二言目には「人民の爲め」を云はねば納まらぬのを、余は馮玉祥臭と名付けるのであるが、此の馮臭こそ河南の空氣を特異なものにする重要な一要素である。但し依然税金の期前徴收が行はれてゐる許りでなく、或る名目の下に二重徴收さへもあると云ふことだから、人民の側からは俄に徳政を謳歌する譯には行かぬかも知れない。

## 六 ポスターと標語

革命支那は何處へ行つても三民主義張りのポスターで埋つてゐるので、「又か」と云ふ感が旅人をうんざりさせるが、三民主義以外のものは時と處とにより著しく其の趣を異にするもので、或る時期或る地方の傾向を知るには矢張り看過し得ないものである。

河南境に入つて目立つのは建物の墻壁が宣傳の爲めに大袈裟に塗りつぶされてゐることだ、而も其の宣傳の半は繪であることも珍らしい。非常に俗悪低級であるが、河南の民衆には此の邊が頃合なのであらう。

革命は固より書を楽しむ程の餘裕は有たぬ、否文章をひねくつたり書畫を賞玩すること自體

が封建的「暮氣」であり腐敗官僚式閑事であり反革命的だと云ふのである。字は意志表示の「工具」に過ぎないと云ふのが彼等の考方であるから、墻壁に書かれた標語宣傳文にして昔の楹聯に見るやうな秀麗な筆致はも早や期待することは出来ぬ。

中には支那人もコンナ字を書くかと疑はれる程亂暴なものもある。大體御大馮が書等には無頓着である。今は公衆的施設に開放された多くの樓閣や官署の大門には、日本人の字に見るやうなギョチない彼の題字が大きな扁額となつて赫々と、但し少しは面はゆげに掲げられてゐるが、それが田舎博覽會よろしく、ペンキで俄か化粧を施した周囲の安普請と却つてよく調和してゐるかに見える。

ポスター標語の内容は半ば三民主義の解説であるのは餘所と變らぬが、孫中山の主張を馮一流の見解を以て解釋敷衍し「打倒帝國主義」及び「取消不平等條約」の二大標語に歸結せしめてゐるもの以外は「人民の爲め」を標榜する彼自身の自家宣傳である。

「崇尚道德、誓雪國恥、破除迷信、購用國貨、勤修道路、多種樹木、戒除煙酒嫖賭、禁止女子纏足、……」等十二要項を河北其の他では「中國、人民十二要」としてゐるが、河南では「河南、人民」

としてある、かゝる瑣細な二字に於ても吾等は彼の特異性及び意圖を忖度することが出来る。表面は中央擁護と云つても腹の底では其の中央に五〇パーセントの輕蔑を有つてゐるに違ひない。「今に見てゐろ！」之が彼の意氣組だ。

だから人が國民と云つても彼は彼の河南が「天下」に迄擴大される前は「河南人民」と云はねば氣が済まぬのである。

支那は文章の國だと云ふ、動もすれば文章負けがして形式に墮して了ふ。孫逸仙は「民族主義」で支那民族の團結復興を熱論してゐるが、最後に「世界大同」と云ふ大見榮を切つてゐる爲めに、民族主義の熱潮が急に冷却退散しはせぬかと氣づかされる。民族を語る場合世界を口にせぬがよく、「河南」經略に没頭する間は暫く「國民」を保留するに若かない。

宣傳は元來實行と對峙するから、標語が文章になればなる程幽玄模糊となり實際問題とは愈々乖離するものだが、河南の標語は卑近素朴で具體的であるから形式化の心配は尠い。

馮の實利主義はポスター許りでなくあらゆる施政の上に看取することが出来る。

繪畫宣傳の代表的なものは、開封城外總司令部の影壁——三間に五間もあるものに畫れた濟

南事件に蔡公時が慘殺されてゐる圖であり、文字では省政府の影壁に大書された二十一ヶ條の摘録等を擧げる事が出来よう。「打倒帝國主義」も「取消不平等條約」もポスターの全體の傾向から日本に集中されてゐることが感ぜられる。

濟南事件以來全國的に反日會が跋扈した關係もあらうが、馮の反日傾向は他のより根強い根據を持つてゐることは彼半生の閱歷から見て想像に難くない。而且軍紀を振肅し精神的緊張を持續せしむるには敵愾心を燃焼させるに如くはない。是れ實に軍隊の訓練及統制の要訣である。彼が必要以上に排日を煽ふるのには其處に期するものがあるからであらう。

支那にはポスターや標語とは性質を異にするもので年聯と云ふものがあり、一に春聯ともいひ、日本の七五三繩のやうに新年には必ず無くてはならぬ一種の粧飾である。

元來桃象の變化したもので、宋の末期から始まつた一種優雅な風習であり、普通平和と幸福に因む目出度い辭句を綴り如何にも春風駘蕩和氣靄然たる氣分を表はす聯句を二條の紅紙に墨書し、門の兩側又は觀音開の門扉に貼つたりするのであるが、革命の道程に在る現代支那と相容れぬやうな、所謂暮氣沉々たる文句が其の儘沿用されてゐるのは心外だと云ふ譯で、北伐完

成後中央政府は全国的に舊曆と共に、之が使用を禁止したのであるが、河南では教育廳（當時廳長鄧翠英）の編審委員會は昨年末大馬力をかけて、極めて特色ある「革新楹聯」なるものを編輯し本年正月から之を實施してゐる。かゝる點まで干渉してゐるのは恐らく支那廣しと雖も河南だけかと思ふ。

「革新楹聯」には約千聯が輯録されてゐる、年聯には一般官署、工商、農村用を區別し對聯には國恥、娛樂（寄席、公園、茶亭、人民會場等に貼るもの）、黨義、公用（各官署用）等がある。かくて河南では年聯が革命標語と區別する必要なき迄に殺伐なものになつて了つた。

家居白日青天下

人在努力奮闘中

肅清殘餘軍閥普天同慶

打倒帝國主義大地皆春

天曉作革命事業

日暮讀黨義文章

瑞雪結成平等果

春風吹放自由花

努力奮闘救中國

臥薪嘗膽過新年

五權憲法救國時雨

三民主義濟民春風

（以上「通用年聯」より）

廢除廿一條款

認定五三仇人

條約依然不平等

海關那得享自由

小鬼西侵手段惡

大軍東討膽氣豪

當道駐番兵欺人太甚

內河奪航路謀我已深

（以上「國辱對聯」より）

却々豪氣なものだ、かう云ふ年聯が軒並に貼られてゐる河南の空氣が如何に新奇であるかは想像に餘りある。

## 七 軍隊訓練と救恤

迴想臺灣非我族版圖

試看滿蒙竟是誰家天下

要在亞東論盛衰

定與日本決雌雄

向洋鬼子求生徒遭白眼

與木履兒拚死纔能出頭

民氣何在

國謀歸來

「軍隊の訓練は人民の利益を標準とす」「我等の軍隊は人民の武力である」と馮は公言する。民國十五年であつたか彼は五原に於て其の全軍を率ゐて國民黨に入黨したが、其以前から彼は軍隊の精神的結束を固める爲めに獨特の教導訓練を怠らなかつた。

最近彼は軍隊に勸勵會なるものを興し、毎週日曜の午前に地方毎に開會集合し、當該地駐在軍の最高官長をして、孫中山の精神主義及馮の練軍講語を詳細に解釋させ、別に曾胡治兵語錄、(曾國藩、胡林翼) 中山治兵語錄(孫文)等を軍兵をして反復講誦させることにしてをり、毎日の操練にも必ず其の前後に長官から兵卒に對して訓話をすることになつてゐる。馮自身も機會ある毎に其の軍隊の爲めに講演をする。

御前達は何故に戰爭するか……不平等條約取消の爲めに。御前達は誰の軍隊か……「老百姓」の軍隊。御前達の父母は……老百姓。御前達の親戚知友は……老百姓

御前達は人民の爲めの軍隊、父母の爲めに戦ふ軍隊である。御父さんの爲め、御母さんの爲めに……兵卒はスツカリ感激して命の二つ迄も投げ出さうと云ふ氣になる。決して馮玉祥の爲めにとは云はぬ。

「人民の武力」は兩刃の劍だ、彼は今度は人民を顧て云ふ……御前達の軍隊だ、御前達の子弟が生命を賭してゐるのではないか、軍費が幾何要らうと當然御前達が負擔すべきだ……公言はせぬが然云ふ具合に曇り込まれるからには文句の言ひやうはない。

軍紀を振肅し志氣を鼓舞するには敵愾心を最上の策とする。「我們是爲取消不平等條約誓死拚命」とは彼の軍兵が胸間に縫付けてゐる標語、「亡國奴不如喪家之犬」は街上に見るボスター。

鄭州の日信洋行出張所の棉花プレス工場は馮軍百二十名の爲めに無理往生に占據されてゐるが、其處の住宅に頑張つてゐる二人の同胞は毎日の朝會に此の百二十名が「打倒帝國主義」「打倒日本」の叫を擧げるのを悲憤の涙を以て聞いてゐる。

最近の南京電報は賀耀祖が日本を假想敵國とする國防案を中央に提議したと傳へてゐるが、馮は賀を俟つ迄もなく數年前から或る意圖の下に其の軍隊を訓練してゐるのは事實らしい。

日本と一戦は免れざるべしと馮自身が眞面目に信じてゐるか如何かは固より憶斷の限りでないが、軍隊志氣の鼓舞結束鞏固を計る爲めに、國軍としての名分を明にし、打倒帝國主義の唯

一の對象として生々しい事件に關係ある日本が始終引合に出されてゐるのは否めぬ事實で、前に擧げた「國恥年聯」を看ても思半に過ぐるものがある。

或は愚であるかも知れない。然し吹き捲る風が萬丈黃塵を揚げて幾日も天日を昏くするやうな殺伐陰慘な天地の間で、所謂革命工作の爲めに一切の逸樂を犠牲に供してゐる彼等は、春よ櫻よと自己陶醉にメートルを擧げてゐる現代日本人と孰れか朝氣、孰れか暮氣。

河南には二個の新聞がある、一は「河南民報」と云ふ普通の新聞で、他は「革命軍人朝報」と云ふ軍隊の機關紙だ、此の軍人朝報には最近始んど毎號陣亡將士の救恤金給與の廣告が載てゐる、兵目百五十元から師長九百元に至る迄、階級と戦死事情とによつて金額の差十餘級に分かれ、受領すべき遺族の住所氏名が明記されてゐる。

公園には大抵陣亡將士の記念碑が建てられてをり、彰德府城の北郊では碧血崗と云ふ暫編第十四師の戦死者を葬つた立派な塋域があり、累々たる土饅頭には一卒の賤微に至る迄官位姓名を墨書した卒塔婆が洩れなく建てられてあるの看る。

或る日曜日の午後であつた。開封の中山公園——龍亭として知らるゝ汴京の宮趾に、三十名

許の癡兵が悠々として春日を楽しんでゐた、松葉杖にすがつた者も少くなかつたが何の一人も悲痛と不満の色を見せなかつたのは寧ろ不思議である、軍人に引率され不具者並に皆軍服を着てゐる處から見ると、癡兵院にでも收容され現任軍兵と同等の待遇を受けてゐるのであらうか。

烈士子女學校は陣亡將士の子弟を一切公費を以て教育する中等學校であり（學生男女約二百人）婦女求知學校は主として現任將士の家族に普通教育を授ける一種の平民學校であるが皆軍隊優遇の施設に外ならぬ。

陣亡將士の表彰、遺族及癡兵の優遇は軍隊の訓練とは楯の兩面、到底分離し得ないものである。天下を謀らんとする者の細心なる用意亦想ふべしか。

所謂西北五省及山東を通じ、彼の號令し得る軍隊はザット二十萬、地盤の膨脹に隨て收容改編した雜軍もあるが、大部分の中堅は二十年來彼と艱苦を共にし親しく手鹽に掛けて育て上げた生粹の「國民軍」だ。戦争だとなると泥繩式に浮浪漢を驅り出し、犬猫のやうに驅使する舊軍閥とは自ら同日の談ではない。

## 八 社會政策施設

淺草の仲見世を二倍に引伸ばし、遺幅を五六倍に擴大し、其の内に觀音堂を三つ五つ建てたやうなものが開封の盛り場、中山市場である。相國寺と云ふ名利を開放したもので、伽藍の佛像及其の附屬設備は悉く拂ひ退けられて新に實業館、革命記念館、平民講演所、美術陳列館、人民休息所等に充當され、附近の廣場には唯一の民衆娛樂たる芝居小屋寄席等がゴチャ／＼とあり、優に五六千人を容れると云ふ木造の現代式建物、「人民會場」もある。

實業館は國産獎勵の商品陳列所と云ふ譯で上海邊の國産品が出品の大部分を占め、人民休息所には支那各地の大新聞が一通り揃つてをり、革命や三民主義等に關する雑誌も少し並べられ新聞閱覽室と云ふ方がより適當と思はれる設備である。

平民講演所は毎日午前九時から正午、午後一時から五時迄各機關の講演隊、宣傳部の役員が交替に來てのべつ幕なしに講演をやる。演壇に蓄音機が据ゑてあるのは客寄せの太鼓代りを勤めるのであらう。二百人が掛けられるベンチの設備があるが何時行つて見ても大方塞つてゐるから面白い。所謂通俗講演で半は主義——三民主義であるが馮玉祥主義が織込まれるのは想像に難くない——の宣傳、半は「常識」と云はれるもので、地球は圓い、空氣はドンカものか知

つてゐるか、雨は降る風は吹く、如何して？と云ふやうなことから「蠅は動物界の帝國主義者で……」なんて云ふ念の入つた衛生講話もある。

一番興味のあるのは革命記念館だ、相國寺堂宇の内最も大きなのが充てられてをり、支那の革命に盡瘁せる志士仁人の遺像遺物を陳列して、一は以て彼等の偉功を彰はし一は以て後世を鼓舞しやうと云ふ趣向である。

先づ孫總理と馮將軍の一坪大の畫像が總理遺囑を中にして正面に鎮座する。石膏胸像の陳列は死亡者に限られてゐるが孫文、黃興、蔡鍔、陳其美、宋教仁以下大約三十許の石膏像が勿體らしく各硝子の箱に納められてゐるのはよいが、彼も此も皆同じやうな面貌なのは飽き足らぬ。其は此の雪のやうな眞白な石膏像の各に只だ瞳だけ眞黒な墨で畫かれてゐる故もあらう。支那には畫龍點睛と云ふ名句がある、彫龍點睛では語呂が悪い許でない、結果は全然失敗だ。「文章」打破を標榜する革命新人も何時の間にか「文章」に捉はれる。難哉因襲の打破。惠州の役に陣没した日本人山田良政氏の墨畫像や、日本服を着た秋瑾女史の寫眞等も目につく。大兵な胡景翼が愛用した別誂の大椅子等と共に、名譽の戦死を遂げた某一兵卒の鮮血に塗れた棉入

のスポン等も多数陳列されてゐる。

場内を賑はす爲か一人にして胸像、寫眞、畫像等の數種が重複せるも尠くなく、土匪頭目の晒首、土匪討伐、馮軍の戦況等を撮つた寫眞も多い。

さう云ふものゝ内に混つて支那最初の革命家と云ふ銘を打つて、商王湯成第二の革命家として周の武王の畫像が掛けられてゐるのは此處が馮の河南である丈に興味をひく。

河南は洛陽に近く黄河の右岸に孟津と云ふ所がある。三千年前武王が八百の諸侯を會盟して伐紂の軍を整へた所だ。周と中華民國河南省、湯成武王と馮玉祥、名分と革命、聯繫が無いやうでもあり有るやうでもある。

此の記念館でも毎日必ず一回の講演がある。四十歳格恰のよく胖へた婦人が館内の中央に立つらへた演壇に進んで「サテ皆さんこれから演説が……」と黄色い聲を張り上げると入場者は壇下に蝟集する、集つた所で講演者は此の婦人——胸間の名札によれば陳某——と替ると云ふ仕組で、講演所で蓄音機が務める役を此處では陳女史が引受ける。革命記念館だから話も革命に關するものゝみで十五分間位で済む。不平等條約、濟南事件等を幾回も引合に出した後「革

命尙ほ未だ成らず同志は須らく努力せねばならぬ」から暇があつたら一日に何遍でも此の黒腫の石膏像と棉入スポンと紙に書かれた墨畫像とを看に來いと云ふ譯である。

各官署門前の廣場は例外無く一般に開放され簡単な設備がある。開封の省政府前庭は其の代表的なもので、ブランコ、金棒、ベンチ、新聞貼示板、閱覽室、遊藝室、平民教育所、農民招待所、消費組合、人民接見所、人民相談所等がある。

河南の都鄙各地に見る平民公園中山公園等の施設も此の範圍を出るものではない。遊藝室には將棋が二三臺、胡琴や笛等も壁際にぶら下つてゐる。嫖賭が嚴禁されたので閑人は仕様ことなしに將棋でもさうと云ふことになる、面白くもない代りに害も無い。然し鄭州に居る只一人の日本人醫師の談によれば、公娼廢止以來花柳病患者が減少したと云ふ事だ。

田舎から出て來る百姓が兎角都會の商人に乗ぜられるのは可愛そうだと云ふので農民招待所が出来た譯だが、招待とあるからは無料で宿泊もさせるものであらう。どの程度迄實際利用されてゐるか不明だが、人民接見所、相談所等と共に看板だけの設備かも知れない。

新郷には建設局の經營で二個所の貧民住宅がある。一個所は軍隊に占居されてるが一個所は



約十家族の貧民を收容してゐる、勿論無料である。

軍隊の訓練と救恤の次に馮が最も心血を傾けてゐるのは人民の爲めの施設であつて、農民、平民、人民、老百姓と云ふ言葉は河南では非常にポピュラーなものだ。

### 九 民衆教育

開封省政府に隣る平民教育處に行つて見る。普通の小學校であるが小學校の授業が済むと各種の平民班が其の校舎で授業を始める。平民と云ふ言葉は使ひ様によつて意味を異にする場合もありドウも明確でないが、茲では無産階級を主とした一般人民（政府の職員や軍隊とは區別する）と云ふ位の處であらう。今迄字を學んだ事のない所謂成人無學者、それから家庭の事情——貧乏の爲めに小學校へ行けぬと云ふ兒童に、黨義（三民主義）の手ほどきをする外、手紙を書き新聞を読み、ソロバンが弾けると云ふ程度の教育を授けやうと云ふのが平民學校の趣旨である。

此處の平民部は婦女班、兒童班、工商徒班、勤務班に分れ程度の高い補習部には職業班も附設されてゐる。

職業班が男女同學であり婦女班が女生のみの外は全部男生で每班一日三時間の課業、婦女班

は午後三時から六時迄、勤務班は夜七時から九時迄、兒童班は人数が多いので更に晝夜二組に分れる。

學生は十二歳から五十歳迄の男女は誰でも入學が出来、婦女班で五十近い纏足の婆さんが斷髮天足の娘達と席を並べてゐるのは天下の奇觀である。工商徒班は一般商人の奉公人を、勤務班は各機關の使丁を收容するもので、後者には公信收發の手續をも課目の中に加へてゐる。

職業班が一年と年限を定めてゐる外は修了期間と云ふものなく、三四ヶ月毎に試験をして其の成績により隨時卒業者を定める。授業料は免除されるが學用品は自辨である。平民部の學生は全部を通じ約二百人。

成立僅かに一年に過ぎぬが成績良好と云ふので、最近開封には更に十個の模範平民學校が出来、將來は一小學校には必ず一平民學校を附設すると云ふ主義の下に追々郷村の隅々に迄擴める計畫である。

此の外宋門内には開封婦女求知學校と云ふのがあるが矢張り平民學校であつて、學生は主として軍政各機關の婦女子で現に約四百人を收容してゐる。

午前十時から午後三時迄で毎日四時間の課業である、同じく十二三から四五十歳に至る婦人のみ。丁度正午の休憩時に参観したが嬰兒に乳を含ませてゐるもの、自分の子供に粥を炊いてやつてゐるもの、日向で餓頭を頼張りながら御針をしてゐる者等却々大變である、かう云ふ人達の面倒を看ながら教育をも施して行かうと云ふのは一通の努力ではあるまい。校長は、誠冠怡女史燕京大學卒業後米國に留學されたと云ふことで多分基督教信者だが（其の關係で日本人の知人も少くないらしい）、校長室で女史自身が二人のお子さんをすかし乍ら十數名の婦人教職員を指揮してをられる。

學校以外の施設としては圖書館、閱報所、講演所等を擧げることが出来る。苟も樓門の使用に堪へるものは悉く圖書館にすると云ふのは馮の方針らしく、開封の鼓樓を始め鄭州、彰德等皆其の例に洩れない、北京の鼓樓が歴史圖書館として開放されたのも、十三年北京で所謂首都革命を斷行した彼の手に成るものである。

設備藏書に至ては圖書館と云ふべく貧弱ではあるが、數でこなすと云ふ主義で、一縣域にして數箇所を有つものが尠くなく、新聞雜誌の外黨義及革命に關する書籍は大抵備へてあり、民

衆教育——黨化と常識涵養とには先づ事缺かぬ程度と見てよからう。

『平民教育』は文學革命の進展に隨て最近數年來支那の教育界に全國的に勃興した新運動であり、決して河南の創始でも專賣でもないが、他所の平民教育は學校當局者又は中學以上の學生自身が其の自由意志によつて夜學班を設け、附近の無産者に本を教へてゐると云ふ單なる『識字運動』に過ぎず、特に教育理想と云ふべきものを有つてをらぬ。所が河南では普通教育と同じく政府が直接平民教育を經營管理してをり、河南としての一貫せる教育理想の上に主義の傳授も常識の附與もするので、單なる識字運動でないのは勿論、忠良なる國民黨員、聰明なる國民人の育成と云ふよりは寧ろ馮の河南に、より相應しき公民を造就するに在る。だから河南教育廳は最近其の行政區内の平民教育に使用する目的を以て、特に『河南民衆課本』なるもの三冊を編輯發行してゐるが、從來一般に使用されてゐた『千字課』本に比し地方色と馮臭の濃厚なる點に於て特色がある。彼が黨國一致の現在支那で何事にも河南々々と異を立てねば承知出來ぬのは決して奇を衒ふ譯ではない、彼は國民黨のヤリ方に満足が出来ないのだ、彼の天下經略は河南經營から始まる、自から特異な方略が無ければならぬのは之が爲めだ。

日本では政界の神籤は興津で引くことに相場が定つてゐるが、支那では洞ヶ峠に飛脚を立てることが流行する。百泉は最近迄馮玉祥が爲體の知れぬ病を養つてゐたので、急に天下に其名を馳するに至つた。

京漢線と道清鐵道との交叉點が新郷で、其の西北五里許に輝縣があり、百泉は輝縣の西北郊一里許の處に在る。蘇門山と云ふ高さ五十メートル許の形の良い緩かな丘があり、其の南麓に二丁に一丁位の池が石で砌み上げられ清澄玉を溶したやうな泉水が湧出する、即ち百泉である。蘇門山の背面二里許には巍峨たる太行山脈が立塞つて山右山左を劃し、眞に山清水秀、ホコリッばい河南には得難い勝景である。

晋の阮籍が此處に隠れた逸士孫公を訪ふた處、孫公が如何しても會はぬので籍は已むなく山を降ると俄に山嶺から鸞鳳の嘯く聲を聴いたと云ふので、今も頂に嘯臺と云ふがあり「長嘯一聲」と立派な書が題刻されてゐる。

洛陽天津橋畔、杜鵑の聲を聞き愁然として天下騷亂を豫言したので有名な宋の康節邵雍も此

處で半生の講學をしたので、百泉を圍む堂宇は邵夫子の祠堂が主要部分を占めてゐる。

明には、姚文獻、孫夏峯等も此處で學を講じてゐるので、百泉は其の勝景と共に學者講學の地として文人墨客の間には夙に知られてゐた。

馮が病を養つたと云ふ總司令行營は、北に蘇門山を負ひ泉池を前にして南面してゐる邵夫子の祠堂であるが、決して宏壯美麗なものではない。周圍には廟宇が老柏の間に隠見し、其處に衛兵が駐在する。正門には百泉公園と大書された立派な看板が掛けてあるが抜身の大刀を提げた番兵が、入念に誰何するので御世辭にも公園と云ふ氣持にはなれない、園内にも隨所に駐兵してゐるので時々誰何される。其は湖南事件の突發で密に馮が御輿を洛陽に移した第三日であつたが、この分では彼が此處に行營を置く間は民衆の自由遊覽は禁止するのであらう。

新郷百泉間には自動車道路も拓け電信電話も新設されたが、凡て軍政機關の専用で商民は人力車で往復する。恐らく會て一人の日本人をも見た事が無いであらう閑寂な輝縣にも傳單「打倒日本帝國主義」なんてのが心得顔に春光を浴びてゐる。

百泉には河南第一林場があり、園内で育てた苗を蘇門山から太行山麓に至る丘陵地に植林し

ようと云ふ計畫である。植林は道路の修築と共に特に馮の河南では兵工の主要事業で、開封の如き城内一半の荒地に直径二吋長六呎位の柳の丸太を坪をきに隈なく挿し込んであるのは開封新風景の一である。

太行之麓、蘇門之嶺、南面中原に對つて「長嘯一聲」する者、晋に孫公、今は馮公。彼は隱士、此は何人。

## 一一 袁世凱の墓

漢祚四百年の基を開いた高祖も後世他姓に墳墓を發かれるを恐れ、必ずしも宏壯の造營を必要としないことを注意してゐる。

昭和二年冬十二月、或る知名な日本人は南京城外荒廢せる明孝陵の西方紫金山腹に營まれてゐた中山陵を睹て嘆じて云ふ、「後世之が第二の孝陵たらずと誰が保證し得やう」と。

彰徳府城北安陽河畔に二ヶ年の日月を費して出來上つた洪憲袁世凱の墓は、僅々十年にして馮軍に蹂躪されて了つた。支那の人事風物、舊きも新しきも總じて旅人を感傷的にする、あまりに有爲轉變が急激深酷だからだ。

袁は周家口の南、項城の人であるが彰徳に住んでゐたので其の城外三十丁に宏大な邸宅があり、程遠からぬ處に安陽河を前に南面して墓が營まれてゐる。廣い參道の入口に袁林神道と刻した歪んだ石柱が砂塵にまみれてゐるのも哀れである。規模は歷朝王陵とは到底比較にならぬが、一個人たる袁家の營みとしては矢張り素晴らしいものに違ひない。

臺ぐるみ一塊の大理石から彫り抜いた七八尺大の馬、獅子、虎、武官、文官の石像が相對して前庭に並ぶ所は舊い形式其の儘であるが、武官が袁自身の大禮服姿をモデルにしたやうなのは時代の推移を物語つてゐる。

中央の碑亭には一丈許の石龜の背に樹てられた同じく一丈位の碑がある。袁の傳記でも刻したものらしいが今は一面にシツクイで塗りつぶされ、皮肉にも孫中山の像と遺囑とが書かれてゐる。

内庭は綠蔭朱柱のまだ新しい立派な堂宇が四面に連つてゐるが、之は馮の御得意で安陽第一平民工廠と云ふ建設局直營の一種の實業學校に充てられ、二十餘臺の織布機が据ゑられ五十餘名の徒弟が染織の實習をしてゐる。土饅頭の座は大理石やセメントで立派に疊み上げられ、其

處迄も自由に入れるが周圍に張られた鐵鎖や門扉の金具等が少し盗まれてゐる外別段の被害はない。

袁墓の東方七八丁に袁宅がある高さ二丈もある磚壁には要所に銃眼もあり、規模宏壯と相俟つて宛然一大城廓を成してゐる。正門には安陽第一平民公園、河南省立彰德高級中學の二大看板が掛つてゐるが、師團司令部が置いてあり數千の軍隊が駐屯してゐるらしく、警戒頗る嚴重で近傍に寄付くことさへも許されぬとは如何した譯か。

彼は「民衆の爲め」を標榜するが、其が動もすれば百泉や此處のやうに看板だけの公園となつて現れたりするのは、或る不純な企圖が潜んでゐるからか、それとも軍事上止むを得ぬとするのか。

馮の政策の一は富裕に捲き上げて貧困に施す、大多數を喜ばす爲めに極少數をいぢめる事だ。逆産の烙印を押されたが最後沒收は免れぬ。

孫中山が民生主義で主張する「節制資本」「平均地權」は此處では馮の、より革命的な手段によつて其の効果を擧げてゐる。袁は如何に最負目に見ても舊軍閥の總元締であり貪官汚吏の巨

る。五色革命から云つても共和國の敵だ、況や青白革命をや。昔なら遺産の沒收位では事は濟まぬ筈、安陽の流と共に悠久に祭祀を續け得べしとは漢高も危んだ處だ。然し一度は洪憲皇帝を潜した彼、亦一代の雄たるを失はぬ。冥して可也矣。

## 一一 結

夏秋は知らぬが春季三四月の開封は如何にも自然の恩恵に乏しい。第一眺望の限り山がない。黄河は北郊六七里に流れてゐても開封を潤ほすにはあまりに遠い。春先の強風は連日砂塵を吹揚げ、うらゝかな春の日曇も爲めに霞んだやうにどんよりする。

場末には土壇からソーダ及鹽を煮出す副業が盛に行はれてゐる程あつて、龍亭を中心とする開封北半の荒地は一面にソーダが白くふき出てゐる代りに一莖の青草も見ることが出来ぬし、亭前に連る二の大沼は泥溝のやうに濁つてゐて一匹の鱸も棲まぬと云ふことである。城外も只見る砂地で、吹き付けられる砂塵は自ら丘陵を成し三丈もある城墻を處々埋めかゝつてゐる。然云ふ綠草の一莖も生へぬ砂地には黒鐵の五寸釘を斜に糺ぎ合はしたやうな枝を有つ棗のみが枯木のやうに處々に立つ、松柏や槐は無いではないが極く稀であり、比較的多い楊柳も其の

嫩い緑の若芽にも拘らず、尙ほ此の陰惨殺伐な風景を潤ほすには足りない。開封新風景として紹介した彼の荒地に充滿する柳の挿木は、まだ枝も芽もないので徒に丸太棒の行列に過ぎない。かく自然の天恵から見放されたやうな開封の人民は、更に馮によつて其の生活から多くの人間らしい逸樂を封ぜられてゐる。彼等の生活は棄の木やうに黒づんでをり、觸らば刺しそつな嚴酷さがある。無味乾燥と云ふ言葉は開封の生活を形容する爲めにはまだ強みが足りないやうだ。此の乾燥無味な自然と生活にも拘らず、開封の街は新興の氣に満ちてゐる、新進氣鋭の青年が「新河南建設」に其の若き血潮を高鳴らしてゐる。

開封に二人の親友がゐる、甲は京兆の人、教養ある青年教育家で、南方人と共に三民主義革命が大嫌だと云ふ程保守的で、支那の所謂現狀に不滿を抱いてゐたが、數週前開封の某中學に赴任してからは珍らしくも馮の河南を謳歌し出した。「精勵謹嚴、規律整頓、此處のやうにならなければ支那は到底望がない、此處では仕事の負擔は多いが精神は却て爽快である」。

乙は昔ならば客卿、今は政客と呼ばれる、型で如才のない社交家だ、河南省政府主席韓復榘と同郷の關係で三ヶ月前から開封の某機關に相當の地位を與へられてゐる。彼は流石に無味乾燥

魁であるには弱音を吐いてゐたが、でも「仕事をするには之でなければいかぬ」等と負惜みでなく眞面目に附言することを忘れない。

馮の河南に於ける、ムソリニがレニンの政策を斷行してゐるやうな氣味なしとせぬ。軍隊の訓練及操作法、農村組織、民衆施設、逆産沒收、宗教否認等、河南の施政はロシア其儘で全然共産主義的だと云ふ者がある。

今日迄、所有る海口及河口から封鎖されてゐた彼が、裏口からロシアと通じたことは生存上止むを得ない方策であつた。久しきに亘つた此の關係が、彼をして多く露に學ばしめたのは否めぬ事實であるが、彼が思想上果して何程レニンの主義を信奉してゐるかは固より疑はしい。

會てはクリスチャン・ヂエネナルで持てはやされた彼であつた、宗旨は都合によつて何時でも更へやうではないか。成程河南の空氣は新奇であり遣方は過激であるが新奇と過激其自體は共產とは別ものだ。革命的だとは云へるが共産的と云ふには未だ資格が足りないと思ふ。

彼はムソリニではなくレニンでは更にない、矢張一個の支那人だ。其の形勢を觀れば秦が剛健な民氣を養つて徐に六國合縱崩解の機を窺ふが如く、其の行ふ所法禁嚴密で賦斂輕しとせぬ

が、諸制を更始一新して頗る社會政策的善政を加味せる點は漢王莽の初期に彷彿する。

彼は學問的教養を缺く、傘下には口八丁手八丁のヤリ手が多く、革新の氣眞に横溢せるものはあるが所謂人物が少く、總ての遣方に厚みがない、革命は其でもよいが政治は然く上すべりであつてはならぬ。だから所謂西北五省の如き田舎では通用しても、一度檜舞臺に上つては案外脆く野次り倒されるであらうとも云はれる。

併し二十年來鍛上げた苦勞人、時に應じ環境の推移に隨て變幻出沒し得る詐謀なしと誰が言へやう。

彼の當國の器量を認むる者でさへ、動もすれば態度の不公明と遣口の陰奸を指摘するが、之は彼の大切な身上でもあるのだ。彼は自ら奉ずるに極めて薄いやうに人を待つにも頗る嚴酷である。にも拘らず新銳の人が好んで彼の傘下に走るは、單に蓬々たる朝氣が彼等を誘惑する許でなく、其の材を其の處に用ひ、成績によつて拔擢すると云ふ彼の用人策にもよらうと説明する者がある。

土木技師は教育行政官よりは道路修築に、農學校出身者は派手な稅務局長よりは農場長とし

て其の手腕を試して見度いと云ふのが青年の心理であらうが、現代の支那には其の専門智識を實務の上に活用し得るもの果して幾人あらう、多くの青年が無味乾燥な開封で薄給に甘んずるのは實に之が爲めである。

北方支那人は國民革命軍の北伐完成を革命の成功とは見ずに南方人の北支那征服と感ずる。

江河を席捲して兎も角も萬里の長城に迄達した吳越の軍隊が、得意揚々たるに反し、北京も直隸も勝手に奪はれた北支那人が、喪心黙々たりしは事實である。蒙古や滿洲人は輕侮しても、直ぐには南支那に推服の出來ぬ彼等であるのだ。

同じく漢族と云つても日本と支那を並べて同文同種だと云ふ位にしか彼等には響かぬらし  
5。

中華三千年、天下を統一した者一人でも南方人があつたか。然う云つた愚痴っぽい自尊心が被革命被征服者の感情とからんで反南方的意識を煽り、動もすれば馮に對する厚意として顯はれぬでもない傾向はある。

同じく北支でも山西、東省があまり期待されぬのは地位と力量の差異によるのであらう。

才色財三備の新夫人を擁して、美滿なる生活無くんば人生意義無しとか何とか云つてゐる蒋介石と、兵卒と共に木綿の軍服に雨傘を背負ひトラックで北京に乗込んだりする馮玉祥、文化人と野武士、北と南、到底相容れることの出来ぬ存在らしい。

蔣閥固り一世の英俊であらう。然し彼等は、凡夫も天の時に恵まれ自ら勵勉息ますんば到達し得る境地で、偶々其の量が比較的大きいと云ふに止まり、質に於ては要するに「平凡」でありかけがへはいくらかもあるが、馮に至つては餘人の追隨模倣を許さぬ獨得の存在で、前二者とは大いに其の趣を異にしてゐる。この意味では彼は天才である。偉大なる「非凡」にあらずとするも一代の「奇傑」たるを失はぬであらう。(昭和四年四月二十日北平)

## 八、革命支那の三民主義教育



- 一、緒
- 二、所謂「黨化教育」
- 三、第一回全國教育會議
- 四、教育宗旨の確立
- 五、中華民國教育宗旨説明書
- 六、三民主義教育行政
  - 訓練主任及黨義教師 各級學校黨義教師檢定條例 各級學校黨義教師檢定委員會組織通則 各級學校黨義追加課程臨時通則 三民主義教科書審查規定 總理紀念週
- 七、三民主義教課書
  - 小學校初級用第一卷——第八卷(商務印書館) 小學校高級用第一卷——第四卷(同前) 其他の教課書 日本に關する部分 教課書の改訂
- 八、結

## 一、緒

三民主義は云ふ迄もなく支那國民革命の理論であり方略であり新支那造國の基本プランであるから、單に教育許りでなく所有する建國の序程は總て之に依據してゐるが、革命と云ふ青黃不接の過渡期を承け、之が成果を國家建設の上に健全に發展せしむる爲めには當然次代人の教育が重要な問題となる。

而且國民教育は時代性を要求するから、革命の過程に在る國家が其の國民に革命遂行に便宜なる教育を施すと云ふことは又當然でなければならぬ。

かくて北伐革命の成功と共に三民主義教育は今や支那全土(東三省は未し)廣く且つ深く行はるに至つた。

是時に當り新支那の側面觀として三民主義教育と云ふ特殊な事象を一瞥するは徒勞ではなからうと思ふ。

## 二、所謂「黨化教育」

三民主義教育と云ふ言葉が支那教育界のテクニクとなつたのは最近のことで、本年(昭和

三年)五月南京に開かれた全國教育會議に於て始めて其の名稱が確定されたものである、其迄は一般に「黨化教育」と云はれてゐた。

此の名稱に付ては全國教育會議で相當議論があつたが、結局黨化教育に代ふるに三民主義教育を以てすることに表決された。其の理由は(一)黨化教育の名稱は出所不明である、孫總理の著作にも國民黨大會の議決にも黨化の二字がない。(二)名稱を正しくせぬと解釋が自由となり三民主義的教育とは相反する結果とならぬとも限らぬ。(三)國民黨の主張は黨に依て國を建て三民主義を以て民を化するに在るから、其の教育方針は當然「三民主義の教育」とすべきである、等に歸着する。今後は黨化教育の四字は漸次教育界からは影を潜めるであらうが今の處では尙ほ依然廣く世間に行はれてゐるのである。

此の黨化教育の四字が教育界に現はれたのは民國十四年三月南京東南大學校長郭氏の免職問題に端を發するもので、當時「中華教育界」「現代評論」「中國青年」等の雜誌及時事新報に現はれたる此の問題に關聯せる評論には、皆「黨化教育」の四字が使用されてゐる。爾來「黨化教育」は東南大學問題とは關係なき一個獨立の特殊語として一時教育界論争の焦點となり、純理論派

の學者及雜誌「醒獅」に據れる所謂國家主義者が有力なる反對論を發表したものである。

現在支那の教育界に於ける最も勢力ある團體たる中華教育改進社の如きも、同年々會に於て憲法に規定さるべき教育章の草案を作り、其の第四條に「教育事業は宗教及政黨の外に超然たるべし、學校の課業時間に宗教或は黨綱を教授するを不得」と規定し、之に「學術及思想の自由を保障せんとする現代の趨勢に適應せんが爲めである」と云ふ説明を付してゐるが、之が恐らく當時の教育界に於ける最も一般的な見解であつたと思ふ。

之等の言論は多く各自の立場と見解とにより、單に「黨化教育」の可否を論評したに止まり、實際上の教育施設に於て「黨化」の事實を認むべきものに至ては、當時は僅に廣東の一隅に過ぎず、「黨化教育」問題を惹起した張本東南大學の如きも新勢力を背景とする校長が舊勢力に代つたと云ふに止まり、教育の「黨化」を意味する變更はなかつたのである。

かく支那全體としては「黨化教育」がまだ教育界の問題とならない時代から廣東では既に「黨化」の實施を斷行してゐた。民國十三年國民黨中央執行委員會は廣州特別市黨部の報告に基き(一)市の教育局職員は一ヶ月以内に國民黨に入黨すること、(二)暑中休暇後は市立學校々長は

必ず黨員の資格を有すべく、教職員採用には黨員を優先とすべし、等を議決し教育廳をして之が實施をなさしめてをり、十六年三月には黨化教育の實施員たる訓育主任に關する條例をも公布し、政府の力を以て其の實施を強請してゐる。

然し當時の所謂黨化教育は主として教育行政上の形式方面に重きを置き、教育其ものゝ内容に立入つては其の實施は十分でなかつたのであるが、十六年春國民政府教育行政委員會委員にして廣東教育廳長たりし許崇清が「教育方針草案」なるものを起草して、之を全國に配布し専門家の意見を徵求するや「教育の革命」が再び全國の注意を喚起するに至つた。

同草案には黨化教育と云ふ言詞は使はれてをらぬが、内容から見れば全然一個の革命教育論、黨化教育論と云て差支ない。其内で許崇清は（一）支那今後の教育政策は革命の一般政策と一致せしむること、（二）産業教育を重んじて學校を工場化し實社會との聯絡を密接にし、（三）政治教育に就ては實際運動と關聯せしめて生徒の創造力自治能力の培養に努むべきことを主張し、又左の如き十四個の綱領を列挙してゐる。

一、教育行政組織の改良及統一

- 二、義務教育の勵行及其教育費の國庫補助
- 三、中等學校の擴張及其設備、教學、訓練の改善
- 四、産業教育組織の建設
- 五、鄉村教育の改造
- 六、民衆教育事業の擴張
- 七、貧困兒童就學の補助
- 八、優良教師の養成
- 九、大學教育内容の充實
- 十、軍事訓練の實施
- 十一、宗教と教育の分離
- 十二、外國人經營學校の取締
- 十三、教課書偏重の陋習を革除し學校の社會化を勵行す
- 十四、學科課程の一元主義を打破す

許崇清によつて投ぜられたこの一石は全國に亘つて大なる波紋を書き、爾來「黨化教育」は全國の一般の問題となり賛否の議論が一時新聞雜誌を賑はしたが、北伐革命の進展と共に反對論は漸次影をひそめ、第二黨の存在を認めぬ革命政府の下に於ては自然「黨化教育」は絶對的な教育政策となつて了つた。

併し尙ほ人々の見解によつて「黨化教育」が意味する其の内容に至つては差異があつたが、本年五月南京に開かれたる全國教育會議は「黨化教育」の名稱を廢止すると共に、中華民國教育宗旨説明書を作製し、今後の中華民國教育宗旨は三民主義教育なりと云ふ大原則を確定するに至つた。

### 三、第一回全國教育會議

本會議は三民主義教育の實施、教育行政の統一、學制系統の整理、教育經費の保障、教育効果の増進を計る目的を以て本年五月十五日より約二週間中華民國大學院(文部省)によつて、南京に召集されたもので、全國二十四の省區代表四十名、南京上海二特別市代表二名、各機關の代表十二名、大學院選聘の専門家十八名、大學院職員及大學委員會委員中十四名、合計七十餘

名(内缺席四名)の議員により四百二件の議案が接受されてゐる。

本會議は議案審査の便宜上、(一)三民主義教育、(二)教育行政、(三)教育經費、(四)高等教育、(五)普通教育、(六)職業教育、(七)科學教育、(八)體育教育、(九)藝術教育、(十)社會教育、(十一)出版物、(十二)私立學校改進と云ふ十二組の審査委員會を設け、各組を通じ百件の成立案を通過した。

其の内三民主義教育に屬するものは、中華民國教育宗旨説明書、黨化教育の名稱を廢止し代ふるに三民主義教育を以てする案、三民主義實現の教育方針を確立する案、學生自治條例案、學生の民衆運動參加の標準案、組合運動を唱導して勞働生活を改善し民生主義實現を期する案等である。

本會議は最終日たる五月二十八日に「宣言」を發してゐるが、其の前半は後に述ぶる中華民國教育宗旨説明書と殆んど同様なもので、三民主義教育が中國の教育宗旨であることは寸毫も疑を容るべき餘地がないことを斷言し、教育行政及經費、普通、社會、高等、職業、科學、藝術、軍事の各教育及體育、出版物、私學等十項に亘つて簡明に之を説明し、最後に「之等各種

の議決をして實現する爲めには吾々微弱な力だけでは成功覺えないから一面黨部及政府の實施指導を請ふと同時に一面又全國民衆の共同努力に依頼せねばならぬ。現在國民革命の大功未だ成らざるに暴鄰侵壓し外患方に殷、我等は須らく奮起し黨部政府及全國民衆一致協力の下に努力を續けねばならぬ」と結んである。

大學院長蔡元培は自ら卑うして、本會議は言はゞ全國の道路を築造せんが爲めに技師を召集して之が設計を作つて見たもので會議の議決は草案の一部と見るべく、未だ國人の意を盡してゐるとは云へぬ譯だから必ず是非の議論があると思ふ。意見ある者は大學院へ建言さるべく、大學院は必ずしも成議に拘泥せず其の是なるものに従ふと云つてゐるが、本會議が洩れなく全國代表を召集してゐる以上、其の議決が實際には大なる權威を持つてゐるのは云ふ迄もない。

三民主義を支那教育の宗旨に確定したことは、教育に新紀元を劃するもので此の點は本會議を最も意義付けるものである。

#### 四、教育宗旨の確立

従來の教育宗旨なるものを觀るに清末には忠君、尊孔、尙公、尙武、尙貫。民國元年には「道

徳教育を主とし、軍國民教育實利教育を以て之を補ひ、更に藝術教育を以て其の道德を完成す」と云ひ、民國八年には「健全人格を養成し共和精神を發展す」と定めてある。

最近では民國十一年に公布された新學制系統改革令には、宗旨とは云つてないが教育の標準と云ふものを定め、(一)社會進化の需要に應ず、(二)平民教育の精神を發揮す、(三)個性の發展を謀る、(四)國民の經濟力に注意す、(五)職業教育を重んず、(六)教育の普及に努む、(七)必ずしも劃一とせず地方により十分伸縮の餘地を存す等の七項を擧げてゐるが、又以て當時の教育方針を窺ふに足るものである。

かく支那の教育宗旨なるものは民國成立以後に於ても幾度か重訂された許りでなく、總括的にして一貫せる主張方針がなく、之が實施に當つて據るべき範圍と準則とが極めて明確を缺いてゐる。而且時勢は非常なる變遷を來し國民革命、三民主義建國と云ふが如き國家再造の序程に入つたのであるから、此處で教育の根本的立直ほしを企圖すると云ふことは誠に當然の趨勢でなければならぬ。

今回の全國教育會議には全國教育の宗旨を確定すべしと云ふ九個の案が提出されたが、大會

は教育宗旨説明書起草委員會を組織し、朱家驊以下五人の起草委員を指定して姜琦、陳禮江、黃統等提出の原案に基き、左の如き教育宗旨説明書を起草せしめ、之を大會の修正を経て通過したのである。

## 五、中華民國教育宗旨説明書

### (一) 教育宗旨の確定

國家の教育は必ず一貫せる具體的の宗旨を定め以て國家生存の基礎を確立し、國民文化の向上進路を示さねばならぬ。中華民國の成立既に十七年會て一の教育宗旨を定めたが抽象的で疑義を生じ易い。換言せば主義が無いから事實上宗旨なきに等しかつた。爲めに十七年來國家生存の基礎は確定し得ず却て益々動搖し、國民文化は向上の軌道を進まずに却て退歩脱線の現象を呈するに至つた。かくて政治上の革命が成功し得なかつたのは、教育上一貫せる具體的の宗旨がなかつたと云ふことに大部分の責任があるのである。

今日國民革命に努力しつゝある國民政府が成立するに及び、中華民國大學院が召集せる第一回全國教育會議は、一貫せる具體的の宗旨なき教育は教育無きに等しく、武力上の革命が成功する

としても政治上の革命は教育上の基礎なければ依然成功し得ないことを知るが故に、茲に一貫具體的の教育宗旨を明瞭に確定する。即ち今後の中華民國の教育宗旨は「三民主義教育」である。

### (二) 三民主義教育とは何か。

三民主義教育なる名詞の確定前は所謂黨化教育なる名稱があつた。この名稱は最初本黨(國民黨)反對者から發せられ、後又黨權を篡竊した共產黨に利用され、且つ牽強附會な解説と誤解との爲めに弊害を續出するに至つたが、今日では既に正式に取消されたから最早や言及する必要はない。

但單に三民主義教育と云つても矢張り一般の附會及誤解を生じ易い。例へば小學より大學に至る各級教育行政機關が、其の職員が僅か許り三民主義に關する書物を読み、標語を貼り、命令揭示を發し、又は若干時間三民主義の教授或は講演をしたり、或は各種教科目中に之に關する話を少し付け加へれば其で足れりとする如きである。故に一般の附會及誤解を避くる爲め三民主義教育の意義を明確に説明しておかねばならない。所謂三民主義教育とは即ち三民主義を實現する教育、三民主義の實現を目的とする教育で、各級行政機關の施設各種教育機關の設備

及各種教學科目が總て三民主義の實現を以て目的とするが如き教育である。

(三) 何故三民主義教育を實施するか。

政治と教育は互に因果關係に在る。政治が何を要求するかに應じて教育施設が定まり、教育培植の如何によつて政治收穫が異なる。故に教育は當然政治方面の要求に適應すべく、政治は又教育方面の播種に依頼しなければならぬ。現在本黨の三民主義は最も中國の現勢に適切なるもので國民革命を完成し、中國の自由平等の要求を實現し得る主義即ち唯一の救國主義、建國主義で且つ己に全國大多數人民が受納れてゐる所のものである。然し未だ全國大多數人民が之を實行し得るには至つてをらぬが故に、之を政治上に實行する爲めには是非共三民主義實現を目的とする教育を施さねばならない。

(四) 三民主義教育の實施方法。

教育宗旨は既に確定した。故に我等は全國教育會議の議決案全部及今後中華民國大學院（今日の教育部）一切の施設は三民主義教育實施の方案であると云ひ得る。但三民主義教育の實施方案には、先づ其の原則を定めねばならぬ。よつて茲に三民主義に根據して左の如く教育上實

施方案の原則を擬定する。

- 一、民衆精神の發揚
- 二、國民道德の提高
- 三、國民體力の鍛鍊を重んず
- 四、科學的精神を提唱し科學の應用を推廣す
- 五、教育普及の勵行
- 六、男女教育の機會均等
- 七、滿蒙回藏苗獠……等の教育の發展に注意す
- 八、華僑教育の發展に注意す
- 九、職業教育の推廣
- 十、農業教育を重んず
- 十一、自由の限界を闡明し紀律に服従する習慣を養成す
- 十二、政治知識を注入し政權運用の能力を養成す

十三、組織能力を培育し團體協同動作の精神を養成す

十四、生産消費及其他組合組織の訓練を重んず

十五、正しき生活（衛生的、經濟的、秩序的、藝術的）を提唱し共同生産の精神培養に努力す。

右各項原則に依て三民主義教育の實施方案を作製す。かく教育上三民主義實現の播種をなすことにより始めて政治上三民主義實現の効果を收むることが出来る。

此の教育宗旨説明書によつて吾々は中華民國の教育宗旨は三民主義教育であること及び三民主義教育の意味、其の實施方法等を理解することが出来た。併しこれは原則であり理想である。吾々の興味は此の所謂三民主義教育なるものが如何に特色ある方法に於て實施されてゐるかになければならぬ。

## 六、三民主義教育行政

國民政府第五十八次幹部會議にて議決された「小學規定」には、第一條に小學教育は三民主義に根據し民族生活の基礎訓練を施すを宗旨となすとあり、「中學規定」第一條には中學教育

は三民主義に根據し小學の基礎訓練を補充し且つ學生の智識技能を増進し以て民族生活の必要に適應せしむるを宗旨となすと云ひ、「大學規定」第一條には大學は世界日新の學術を攝取研究して文化の進歩を圖り以て三民主義を實現するを宗旨となすとある。

又十七年五月全國教育大會に於ては三民主義教育を以て支那教育の宗旨となすことに確定された事は前述の通りであるが、此の三民主義教育を普及徹底せしむる爲めに、教育行政上特殊の施設が要求さるゝに至つたのは當然の結果である。

學校教育の黨化は軍隊黨化の場合と同じく、其自身の發意によるものは少く、學校とは別個の系統に屬する黨部の積極的施設に負ふ所が多い。

最初各政務機關の場合の如く學校にも學校黨代表なるものがあつて一切の黨務を執掌したものであるが、之は必ずしも學校行政には容喙せず、學校と云ふ一個の機關を中心として集合する教職員學生の黨員を黨團體としての立場から指導訓練拘束してゐたに過ぎない。併し北伐革命の進展と共に其の組織や方法は漸次改良され、今日では中央黨部の訓練部が教育部と協同で黨化教育に關する諸案を議定し、各省市縣教育行政機關は教育部の訓令に基き省市縣黨部訓



練部と共同して黨化教育施設の實現を期すると云ふ仕組であり、教育部には黨政に關する事務を處理する爲めに特別の分科を設けてゐる。

#### 訓練主任及黨義教師

民國十三年國民黨中央執行委員會は廣州特別市黨部の建議に基き(一)市の教育局職員は一ヶ月以内に國民黨に入黨すること、(二)暑中休暇後は市立學校々長は必ず黨員の資格を有すべく(三)職員の採用には黨員を優先とすべし等を議決し、教育廳長をして之が實施をなさしめてゐるが、恐らく之が教育行政に現れた最初の「黨化」であらう。次で民國十六年三月四日廣東教育廳は同省執行委員會の議決により(中國々民黨廣東省執行委員會青年部の提議)公私立中等以上學校訓育主任條例なるものを公布した。之によると中等以上學校は必ず訓育主任を置くを要し、該主任は省青年部長の申斥により省執行委員會之を任免するもので、學校長を輔けて黨化教育の實施及黨所定の教育事務を執行し、國民黨の主義及政策に關する授業を擔任するを任務とする。又訓育主任の俸給及事務費は學校の負擔であり、學校は全豫算の十分の一迄は訓育經費として差支ない。越へて十七年夏北伐革命一段落を告ぐるや、中央訓練部は左の如き二個

の條例及通則を作製して全國に頒布した。之が現行の規則で正式に中央一五二次常務會議を通したものである。

#### 各級學校黨義教師檢定條例

第一條 全國各級學校の黨義教師は全部黨義教師檢定委員會の檢定を受くべし

第二條 檢定を受くべき黨義教師の擔任科目は暫時左記の範圍に限る

(一) 建國方略(孫文學說、民權初步、實業計畫) (二) 建國大綱 (三) 三民主義 (四) 本

黨第一次全國代表大會宣言

第三條 各級學校の訓育主任も亦本條例の規定を適用して之を檢定す

第四條 受檢者資格

(一) 黨員 (二) 各該地教育行政機關所定の教員資格に適合する者

第五條 受檢者は志願書履歷書及本人寫眞を黨義教師檢定委員會に差出すべし

第六條 檢定方法

(一) 無試驗檢定——高等教育の黨義教師に適用す

(二) 試験検定——中等教育及小學教育の黨義教師に適用す

第七條 無試験検定方法

(一) 第四條規定の資格を審査す

(二) 當該受験者が採用し又は自ら編輯する黨義教材を審査す

第八條 試験検定は第四條規定の資格あるものに對し左記科目の試験を施行す

(一) 中等教育の黨義教師

1. 建國方略 2. 建國大綱 3. 三民主義 4. 本黨第一次全國代表大會宣言

(二) 小學教育の黨義教師

1. 孫文學說 2. 民權初步 3. 建國大綱 4. 三民主義

第九條 検定合格者には當該検定委員會より證書を給與す

第十條 證書の有効期間を二年とし満期後は更に受檢するを要す

第十一條 本條例は中央訓練部の提請に由り中央執行委員會之を改修す

第十二條 本條例は中央執行委員會の議決により之を施行す

尙ほ十七年十二月中央訓練部の請求により中央執行委員會秘書處は「市縣教育行政機關が人員を任用する場合は教育上の學識經驗があり、黨義に精通せる黨員を優先任用し以て三民主義教育の實現を期すべき」旨の通知を發してゐる。

各級學校黨義教師檢定委員會組織通則

第一條 本黨は全國各級學校黨義教師の思想及程度を一致せしめんとの見地により特に黨義教師檢定委員會を組織す

第二條 黨義教師檢定委員會は各級黨義訓練部及該級教育行政機關が共同組織するものにして便宜上左の四種に分つ

(一) 大學及び高等專門學校黨義教師檢定委員會は中央訓練部及全國最高教育行政機關之を共同組織す

(二) 省(或は特別市、區)立學校及直接管轄の私立中小學校黨義教師檢定委員會は省(特別市區)黨部訓練部及省(特別市區)教育行政機關之を共同組織す

(三) 縣立學校及私立中小學校黨義教師檢定委員會は縣黨部訓練部及縣教育行政機關之を共同

組織す

(四)市立學校及私立中小學校黨義教師檢定委員會は市黨部訓練部及市教育行政機關之を共同組織す

第三條 各種黨義教師檢定委員會委員は五人乃至九人とし各級黨部訓練部々長及各該級教育行政長官を當然委員となし其餘は各級黨部訓練部より黨員中黨義を明確に理解し教育に精通し且つ教育に經驗ある者を聘任す

第四條 各種黨義教師檢定委員會は每學期開學以前に檢定を舉行し完了後は消滅す

第五條 本通則は中央訓練部の提請により中央執行委員會之を修正す

第六條 本通則は中央執行委員會の議定により之を施行す

右の黨義教師檢定條例は第四項に於て地方の情況に應じ受檢者の資格を酌定し得べき餘地を残してゐるので此の點は地方に依つて必ずしも一致しない。「山西省各級學校教師臨時任用條例」は此の點を(一)専門以上、(二)中等學校、(三)小學校の三種に分ち黨義教師受檢資格を詳細に規定してゐるが、十七年十二月十日同省黨義教師檢定委員會通告による檢定辦法は必ずし

も其の任用條例と照應せぬ點もある。同檢定辦法は單に其の受檢資格を黨義教師も訓育主任も共に第一に黨員たること第二に中等學校に服務する者は専門以上學校卒業者又は會て中等以上の學校教員たりし者、小學校に服務する者は中等學校卒業者なるべきことを規定せるのみである。

中央から右條例と通則が頒布さるゝや、各省市一齊に各檢定委員會が成立して中小學黨義教師の試験檢定を行ひ、南京の中央大學は十七年九月十日先づ第一回合格者として中等學校十八名小學校十二名を檢定發表し、河北省では十月十七日第一回中等二十九名小學校三十七名を檢定し引續き二回三回の檢定を實施してゐる。

全國大學及専門學校の黨義教師檢定委員會は十七年十二月南京中央黨部内に成立し、丁惟汾、蔣夢麟、戴季陶、陳果夫、馬敘倫、楊銓、周鯁生、史維煥、陳希豪の九氏が委員に任ぜられ、同時に檢定辦法(無試験)が發表されたが其の要領は次の如きものである。

一、受檢者資格(イ)中國々民黨員(ロ)國內外専門以上學校卒業者、専門以上學校に教員たること一年以上の者又は現任専門以上學校教員

二、申込と同時に受検者の差出すべき書類（イ）黨員證（ロ）卒業證書（或證明書）又は服務證書（ハ）願書（ニ）受検者が採用する講義教材及著作等

三、申込は南京の同委員会になすべく受付は民國十八年一月末日迄とす、但し陝西、甘肅、雲南、貴州、四川、新疆は十八年二月末日迄

北方支那が國民政府治下に統一されたのは十七年六月以來のことであり、従て「黨」の訓練を経てゐる青年が少く中小學校黨義教師に所定の資格者を採用することは容易でなかつたので、山西の如きでさへ「偏僻の地方にては市縣黨部の服務人員にして成績良好なる者を之に充任す」と云ふ例外を設けてゐる。北平特別市も亦人材の缺乏を感じ條例による正規の檢定を施行するを不便とし、同市の三民主義教育指導委員會は十七年十月小學校職員黨義訓練班なるものを城内四ヶ所に急設し、現任小學校職員四百餘名を收容して一週六時間（火木土）六週間の速成で黨義訓練を施し、彼等をして各校の黨義教師及訓育主任を臨時擔當せしめてゐる状態である。

黨義課程に關する規定は、支那の學校は九月を開校期とするが故に、十七年八月大學院は北

伐完成の後を承け九月の開學期にあはすべく、不取敢「各級學校黨義追加課程臨時通則」なるものを公布した。之は中央黨部訓練部の提議により中央執行委員會第百六十次常務會議の議決を経たものである。

#### 各級學校黨義追加課程臨時通則

第一條 本黨の主義を全國に普及し青年をして之を正確に理解せしむる爲め各級學校は本通則の規定に従ひ黨義課程を増加すべし

第二條 各級學校の黨義課程は臨時次の如く定む

#### 一、小學校

(一)孫中山先生革命史實 (二)三民主義大意 (三)民權初步演習

#### 二、中等學校

(一)建國大綱大意 (二)建國方略概要 (三)三民主義 (四)五權憲法大意 (五)直接民權の運用

#### 三、專門學校及大學

(一)建國方略 (二)建國大綱 (三)三民主義の理論と實際 (四)本黨黨綱及重要宣言と議決